
ルーントルーパーズ

浜松春日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ルーントルーパーズ

【Nコード】

N9111S

【作者名】

浜松春日

【あらすじ】

戦乱の中、一人の少女が願った。異世界からの、救いを信じて。だが世界の命運を託されたのは、勇者でも何でもない、海外派遣されるはずだった日本の自衛隊員達だった！？

果たして彼らはその世界にとって？漂流者？なのか？救世主？なのか？

剣と魔法の平行世界で、存在するはずのない近代兵器が咆哮を上げる！

序章 依巫（前書き）

2002年に「自衛隊漂流戦記」として発表していた作品を完全にリメイクしたものです。

本来、交わるはずのない存在であるはずの異世界の住人と、現代世界の日本人、それも自衛隊という武装組織が、異世界の戦乱の中でどう在るべきか葛藤する様を描いています。

重い話ばかりでなく、異世界の人々と現代世界の人間との意識の差や文化の違いなどをコミカルに描いていますので、様々な方が楽しめる作品になっていると思います。

序章 依巫

序章 依巫よりまし

朽ちかけた神殿の中に、扉を破ろうとする重い音が響いていた。神殿の最深部である円形の洞窟内広場にもその音は聞こえてくる。既に聖都は敵の手に落ち、敗残兵をまとめてこの山麓に立てこもって六日になるが、遂に正門を突破されたのだ。

じきにここにも敵が雪崩れ込んでくる。

五百年に渡って栄華を誇ってきた神聖プロミニア帝国も、今は無惨な最期を待つばかりだった。玉座に神皇帝は既になく、精鋭を誇った近衛聖騎士団もそのほとんどが魔物の腹の中へ収まっていた。この洞窟を出ればまだ燃え上がる皇都の赤い夜景をみることが出来るだろう。

「ここが落ちるのも時間の問題か……」

「ならば計画を実行に移さねばなるまい」

薄暗く、微かな光魔法が灯されたランプに照らされた広場の中で、老若男女が静かな絶望と狂気を宿した表情で話し合っていた。

拜月神の高位の神官や魔法学院の老練な魔導師に至るまで、雑多な、しかし誰もが一流の魔法を操ることのできる顔ぶればかりだった。

しかし、ただで滅びるわけにはいかない。そんな潔さは彼らにはなかった。

地位や役職も定かではないが、一人の男が重く、感情のこもらない声を祭壇へ投げかける。

「よいな？ ヒュムナ」

しゃがれたその声は、有無をいわさぬ強制力があつた。

「はい……」

祭壇の上には依巫が静かに座っていた。

依巫はまだ幼い年頃の少女であった。

薄く身体の線が透けて見える白く薄い羽衣に身を包み、声をかけられてなお深く祈るような思慮深い表情のまま手を合わせている。

有翼の民の末裔を意味する白い翼を備え、まるで人形と見紛わんばかりの神秘性を備えた少女だった。

彼らが今実行しようとしていることは外道の所作である。

しかし、滅び行く者にとって、それは間違いなく希望に他ならなかった。

戦場が、殺戮の宴が一步一步と近づいてくる。

中央の祭壇を一周するように黒いローヴを被った魔術師たちが等間隔に並んだ。

全員が静かに同一の言葉を口ずさむ。

それは洞窟の壁に反響し、集まり、うねり、混じり合っていく。

『虚空の狭間をたゆたう光よ』

じわり、と祭壇の上で依巫の身体に刻まれた文様から鮮血が滲んだ。

『現世と冥界を繋ぐ番兵に投げ掛けん』

少女が苦悶の表情を浮かべる。

『有翼の民の血を対価としてここに願わん』

溢れ出た血はやがて床へと溜まり、魔法陣に生き血を吸わせる。

『この世界へ虚空の代償を示したまえ！』

詠唱の完了と同時に、鉄扉に敵が殺到し、衛兵の断末魔の叫びが聞こえた。

それからそこで起こったことは一方的な戦いであった。

いや、虐殺というべきだろう。

ローヴ姿の者たちは手にする武器もなく、乱入してきた人外の軍団に倒れていった。抵抗らしい抵抗もない。

しかし、倒れ伏す者の顔には単なる絶望以外の感情が宿っていたことに気づく敵兵はいなかった。

死体が、ローヴの奥で歪んだ笑みを浮かべ、誰もいなくなった祭

壇に虚ろな視線を向けていた。

第1章 P K F派遣艦隊

声が聞こえたような気がした。

「て……を……」

女性の声だ。

……綺麗な声だな。

茫漠とした意識の中で、彼はそんな感情を抱いた。

遠い海から響いてくるような、どこか朧気な声。

しかしなぜか、その声を美しいと感じると同時に、不吉なものも感じた。

「……守って……私たちの世界を……」

最後に耳に入った言葉が、何を意味するのか、彼には理解できなかった。

「んっ!?!」

いちのせりゅうじ
市之瀬竜治はうつすらと目を開けた。

見慣れない殺風景な天井。それも随分と低い。

ややあつて、それが三段ベッドの一番下から見上げた二段目ベッドの床だと気づく。

ああ、そうだったな、と寝起きの覚醒しきれていない頭でそれに思い至った彼は、ポリポリと短い髪をかきながらベッドから身を起こし、床に足を降ろした。

無機質なりノリウムの床がひんやりと冷たく、それに関しては夢でないことを嫌でも理解してしまう。

彼が周囲を一瞥すると、もう見慣れた狭い光景があった。

三段ベッドを据えるだけあつて天上は高く、そこから暗くはないが明るくもない蛍光灯が並んでぶら下がっている。

今はどうやら自分以外に人気はないようだ。

「……何の夢、見てたっけ？」

何か恐ろしい、いや、それだけではない、不思議な夢を見た……
ような気がする。

うーん、判然としないな……

とりあえず寝間着代わりの青いジャージ上下を着替えることにする。

着替えながらも、なぜか気になった。

「確か……羽のついた女の子が……」

妹と違って頭は悪いかもだが、記憶力はそこそこある方だった。
考え事をしていながらも着替え終わった。ベッドに腰掛けて靴を
取り出す。ピカピカに磨かれた半長靴はんちようかをはく。

立ち上がると、すぐ近くの壁にある姿見の鏡の前に立った。

鏡に映った市之瀬の姿は、迷彩服を着ていることを除けば、ごく
普通の少年の容姿といえた。

（市之瀬竜治、一八歳、身長一七〇センチ、体重六四キロ、今日も
至って健康、と）

彼は心の中で呟く。

鏡の中で、締まった身体に、まだあどけなさの残る顔の少年がこ
ちらを見つめていた。

「あ！？ もう食堂の時間終わりそうじゃん！？」

夢のことなど忘れ、市之瀬は声を上げた。

壁にかけられている時計の針は、もうすぐ昼食時間の終わる十分
前くらいを指していた。

「やっべえ！」

彼は慌ててベッドルームを飛び出す。

本来禁止事項な廊下を走り、その窓から見える景色にため息を
つく。

「今日も晴れてんなあ」

もう見慣れた、そして見飽きた太平洋の海原と、自分の乗る輸送
艦と併走するイージス護衛艦の姿が、網膜に夏の日差しと共に焼き
付いた。

目を細め、今の自分が迷彩服に身を包んでいることが、未だに実感としてわかないことに気づく。

……俺、半年前まで高校生だったんだぜ、嘘みたいだろ？ なあ、美奈。

誰に言うでもなく、自身への問いかけのように心の中で呟いた。

自衛隊員になって、外国へ派遣される途中だという実感は、なぜか今でもいまいち湧かなかった。

イージス。

ギリシャ神話における全能の神ゼウスが、戦術に長ける女神アテナに授けたとされる、最強の盾。

イージス艦。

イージス・システムと呼ばれる、高性能レーダーとコンピュータを搭載し、各種武装を統括、同時に百以上の目標をレーダー捕捉・迎撃するシステム防空を行うことのできる世界最強の防空艦。

自衛隊の、そして日本の専守防衛という理念の最も象徴的とされる戦闘艦である。

その海上自衛隊イージス護衛艦？いぶき？艦内では『配食始め』のアナウンスと同時に昼食が始まっていた。満載排水量約一万トン、全長一七〇メートルに達する世界的にみても大型の艦であるため、乗員の数も多い。

だが、喧噪で賑わう一般乗組員用の食堂である科員食堂とは別に、幹部隊員専用の食事が行われる士官室は肅々とした雰囲気で包まれていた。

狭い艦内だが、ここだけは落ち着いた印象を受ける洋間となっている。上級者である幹部のためのものであることは容易に想像ができた。

「司令臨場、気をつけっ！」

幹部の一人が声を上げ、長テーブルに座る各区分の幹部達が一斉に姿勢を正した。

すると、ずっと士官室に入ってきた一人の男が、上座に腰を下ろす。

男は幹部達同様に航海中の服装である濃紺の作業服姿である。

一見すると年齢は若く見える。

それは雰囲気によるものだった。中年男性とは思えないほど身のこなしにキレがあるのだ。背筋は全く曲がっておらず、むしろこちらの現代の若者よりも覇気に満ちた印象がある。身長こそ小柄だが、それが気にならない威厳を備えている。いや、威厳というよりは信頼感であろうか。見た目だけはどこにでもいそうな、人の良さそうな男性だ。

かぶらぎのしお
蕪木紀夫海将補、この国連平和維持軍派遣艦隊の最高責任者であった。

「休ませ」

「休めえ！」

「ああ、後はいいさ。とっとと食べてしまおうか。皆食べてくれ。

お、今日は金曜カレーかね？」

真面目にしたのは最初だけで、蕪木は司会役の幹部を止めた。

大して意味のない形式化したことを長く続ける必要はないと彼は考えていたのである。

彼らしい、と笑みを浮かべる幹部もいれば、締まりのない司令だと無然とする者もいた。

「相変わらずですね、蕪木司令」

野太い男達の声ではない、涼やかな声が士官室に響いた。

近くの席に座る、艦隊の指揮幕僚団の主席幕僚、加藤修かとうしゅうじ二等海佐が笑ったのである。

彼はこの居並ぶ幹部隊員の中でも異彩を放つ人物だった。

彼はきらりと輝くノンフレームの楕円形の眼鏡で遠くの甲板にいても認識できることで有名だった。一見するとまるで高校生でも通

用するのではないかと思われる童顔が、むさ苦しい中に場違いな印象を添えている。時代が時代なら？参謀？と呼称される主席幕僚の役職を持った人物には到底みえない。

司令の右腕、それが彼だった。昼食で席がすぐ側なのはそのためだ。

「指揮官の私が良いんだからいいんだ」

にやりと笑うその顔は、まるで少年のように活気に満ちている。

蕪木は周囲の様々な意味のこもった視線はあえて気にせず、カレーを口に運ぶことにした。

しばらくすると、艦内での数少ない楽しみである昼食に意識が向いたためか、蕪木のことを気にする者はいなくなり、和やかな食事風景となる。

一人、主席幕僚の加藤だけが報告がてらに話をする。

「気象班からの報告によると昨日発生のは台風は航路からは逸れるそうですよ」

「ほう、なら安心だ。他には？」

「いえ、別にないですねえ。ああ、昨日僕が変な夢みたくらいですよ」

「夢……？」

できるだけ平静を装い、顔を向ける。

「ええ。よく覚えてはいないんですが……背中に羽の生えた女の子が、血を流して……」

彼の周囲の幹部達がぎょつとして目を向ける。

さすがの彼も、苦笑してごまかした。

「あははっ。すいません、食事中にする話じゃなかったですね」
だが、蕪木はそれで流すことはしなかった。

「不思議だな」

「え？」

「私も見たんだよ。翼の少女が生贄にされてしまう夢……」

「ええ！ ほ、本当ですか？」

心底驚いたように、加藤が眼鏡の奥の好奇心の強そうな瞳を丸くした。

生贄……ああ、確かにそんな感じだったような、と唸っている。

夢、翼の少女、生贄、そして同じ夢をみた部下、か。

「司令、お疲れなのではないですか？」

傍目に見ても異様な話をしている上官に、医務官の一人が口を挟んだ。

「そうですね、何せ今まで苦しい日程でしたから……」

？いぶき？の航海長が加わる。

彼らの言葉の意味するところは、現在のこの艦隊の出動経緯についてであった。

この艦隊が編成され、何を任務とするのかである。

それは、今から半年前の話だった。

アフリカのある国での紛争で国連施設が立て続けにテロに見舞われたせいで、米英を中心とした平和維持軍の積極派兵に踏み切ったはいいものの、いかんせん頭数がそろわない。そして米国がある国へ支援要請をするに至った。

それが日本だったわけである。

国際社会からの圧力にあっさりと負けた政府は国民不在の下に派遣を決定。

『国連参加国としての人道支援』という言葉こそ格好良いが、つまるところ政治家の保身やら、防衛省で豪華なイスにふんぞりかえっている階級章の星の多い連中の点数稼ぎだ。

これで何か失敗でもすれば命令した自分たちではなく、現場に責任を被せて自分は反対していたとでも言うつもりだろう。

畜生め、と現場一筋の蕪木も思っている。

救いなのか重荷なのかはわからないが、最悪の事態が起こる可能性が高いため、武器・弾薬は今までの海外派遣では例になく充実していた。防衛省の中にも送られる側の身を案じる人間がいたのだろう。軽空母並の巨体を誇る二隻の輸送艦には、陸上自衛隊の車輛や

各種機材、戦車や戦闘ヘリ、そして弾薬が満載されている。

海上自衛隊はこの最新鋭イージス護衛艦？いぶき？の他に、？ひゅうが？級ヘリ搭載艦、支援艦として大型補給艦までひっぱり出てきている。

これは戦場に行く布陣といってほぼ間違いない。

政治家の中には『世界に誇れる日本艦隊』などと喜んでいる者もいるが、そんな悠長な理由で艦隊を編成したわけではないのだ。

こここのところの情けない上層部の汚職事件など不祥事が祟ってか、自衛隊が嫌いでたまらない市民団体に派遣反対のシュプレヒコールを浴びながら横須賀基地を出航し、三日目の今日に至っている。

だが、蕪木はそれほど悲観していなかった。

彼は現場が好きだった。できることなら定年まで艦に乗っていたい。

現場の先頭に立つ者がいないなら自分が立てばいい。それが蕪木の信念だった。そんな性格が災いして、エリートでありながら今の役職から上は絶望視されているが。

「蕪木司令や僕が普通に見えたらむしろ危険信号だよ。医療班は注意してね」

「よしなさい」

加藤二佐があっけらかんと答える。

……こいつも変わり者だな。まあ、あれを原隊から主席幕僚に引き抜いたのは他ならぬ自分なのだから、不思議はないのかもしれないが。

蕪木は心の中でそう苦笑いしながら、こればかりは嫌いになれない伝統の海軍カレーにスプーンを運んだ。

艦に乗って三十年、食べ慣れた海の男の味が心を落ち着かせてくれる。

何の名誉もなく、国民さえ誰も望まない戦場に行く自分たちのこの日常が、なぜかとても大切なもののように彼には感じられた。そう、？日常？という平和な営みを忘れたときは、自分たちが戦争を

本当に戦う時なのだ。

それを思いながら、蕪木は先刻の加藤の話を反芻していてもいた。

……翼を背中に持った少女。

そして、彼女はなぜか、何かを求めていたような気がした。

……そう、何か切実に。

カレーを口に運ぶのも忘れ、蕪木はしばし思考に捕らわれた。

たかが同じ夢をみた者がいるからと、何が起るわけではない。

そのはずなのだが、彼には何故か胸騒ぎがしたのである。船乗りの勘だろうか。

『そう……あなたたちなのですね……』

「え？」

少女の声が聞こえた。

そのありえないことに、脳が一瞬、空耳ではないかと意識を混乱させてしまう。

ややあつて、彼ははつとして顔を上げた。

加藤がカレーを口に運ぶ途中のまま、ぽかんと間抜けに口を開けて、ある一点を凝視している。

蕪木が視線の先を見ると、そこには薄衣を纏った少女が立っていた。

「なっ!？」

長テーブルの上、向かい合う幹部達のと真ん中である。

自分は夢を見ているのか!？

背中に冷たい汗が伝う。

その場が一瞬で騒然となった。ガタガタと居合わせる隊員たちがイスを立ち上がる。

「お、おい!？ 誰だお前はっ! どうやってこの艦に侵入した!？」

「司令お下がりでさい!」

部下の一人に制されるが、蕪木はその少女の顔をじっと見つめたまま動かない。

「き、君は……！」

深い場所に眠っていた記憶が呼び覚まされていく。そう、彼はつい昨日に彼女のことを見ていた。

夢の中で。

幼さを残す顔、白い肌。腰まである長い銀髪の間から、薄く白い衣がのぞいており、身体中に黒い刺青が幾何学的な模様で走っている。

そして、その背中には、大きな白い翼。

すう、と彼女が目を開けた。

『あなたたちに託すしかないのです』

その言葉の意味を理解できずにいると、加藤が代わるように聞き返した。

「託す？ いったい何をだい？」

この状況で唯一、冷静になっているように見える加藤を、少女の優しい瞳が捉えた。

そして、加藤の真剣な眼差しを前に一つ寂しげに呟いた。

『ごめんなさい……』

「お、おいっ！？」

瞋目した少女に何かを感じた蕪木が咄嗟に制止の声を上げる。

だが、その瞬間、士官室が薄暗くなった。しかし、照明が落ちた訳ではない。

いったい何だ！？

その場の全員が、じわりと無意識に嫌な汗を背中に流す。

少女はぶつぶつと何か不思議な旋律の歌を口ずさんでいる。

ふっと彼女の足下が緑色に淡く光り、彼女のか細く白い肌を染める。

蕪木の隣で加藤が彼女の足下で淡く光るものを凝視する。

「魔法陣……？」

それは加藤が趣味で読んでいるオカルト雑誌で目にしたことがあるものによく似ていた。

確かに、その光は何か人為的なもののように見える。蠢いているように見える模様は、ひよっとして文字だろうか。

「何をしてるんだ！ やめろ！」

若い幹部の一人が少女を止めようとテーブルに上がった。丸腰の少女一人、止めることができると思ったのだろう。

「ダメだ止せ！」

嫌な予感がした蕪木が叫んだ、その時だった。

ゆらり

士官室の空間が歪んだ。

その今まで覚えたことのない感触に、全員が目の錯覚か、毒ガスによるテロだと思った。

しかし、その予想はどれも違った。

まるでタールのような闇が、彼女の全身に刻まれた紋様から溢れ出ると、白いテーブルクロスを浸食してあっという間に士官室を蝕む。

「ひー！」

闇が近くにいた船務長に飛びかかると、そのまま包み込み、飲み込んだ。

「うわあああ！？」

「た、退避っ……や、やめろおー！？」

まるで意思を持っているかのようなぬめった闇が、逃げ惑う幹部達を飲み込んでいく。

阿鼻叫喚の世界が現出した。

闇に喰われる！

人間の奥底にある暗い本能が恐怖で警告した。

「ひよああああ！？ お助けえー！？」

逃げ遅れた加藤が悲鳴と共に闇に消える中、蕪木は一人だけ冷静に司令として最後の抵抗を試みていた。

自分に課せられた使命、部下を守るという責務を果たさねばならない。

「こ、こちら士官室、蕪木……総員……救命ボートを……」
必死になって蕪木は入り口の隣の壁に掛けられている艦内電話を握る。

総員退避を命令しようとするが、引きずり込まれるように闇が覆い被さってきた。

艦の中では広い部類のこの士官室とて、部屋として狭いものだ。
闇が追いつくのはあつという間だった。

「繰り返す……総員……くう……」

闇は士官室を取り込んだだけでは飽きたらず、艦全体を、いや、それだけではない、艦隊そのものを取り込もうとしていた。

視界全てが闇に包まれたとき、蕪木は最後の手段として、この？いぶき？への撃沈命令を出そうとした。だが、遠のいていく意識の中、艦内電話を握る手からも力が奪われていき、彼はまるで昨日の夢の中のような絶望の淵へと追い落とされていった。

「う……」

仰向けに倒れたまま、市之瀬は目を覚ました。

彼は最初、自分は俯せに倒れているのだと思った。さっきまで晴れていた太平洋の空がこんなに薄暗いはずがないからである。しかし、そうではない。冷たい甲板の感触が背中に感じられる。今自分は仰向けに倒れ、空を眺めているのだ。ややあつて、それが周囲を包む霧が原因だと理解する。

「はっ!？」

あ、あの気味の悪い黒いウネウネは!？

イージス護衛艦?いぶき?から溢れだしたあの謎の存在のことを彼はすぐに思い出した。

少し前、彼はまるで芋洗い状態の混雑を見せる食堂で、味も分らないまま飯をかき込んだ後に、人混みにいた熱気を冷まそうと思

ったのだ。

隊での自分の役割である狙撃要員として、狙撃銃のスコープの調整だと小隊長に許可をもらって上部甲板に出て涼んでいたところまではつきりと覚えている。

……気を失ってたのか。

まさか白昼夢でも見てしまったのだろうか、それとも、今も夢の続きを見ているのだろうか。霧のかかった今の周囲の光景はそう思わせてしまう幻じみたものだった。

艦尾近くの彼の位置からは、艦が進んでいることを示す白い航跡が見え、大きな機関音も聞こえてくる。今この輸送艦は幽霊船ではなく生きた船として動いているのだ。

彼はそれに何故かとても安心した。

「に、してもさっきのは一体……」

まさか自分一人が見た幻覚だろうか。

とにかく艦内に戻って誰かに尋ねなければ。今のこの突然現れた霧といい、尋常ではない。

傍らの狙撃銃を抱き起こし、立ち上がった。

痛むところもない。ただ少しだけ頭にもやがかかったような感覚が残っているが、意識は完全に覚醒しているし、すぐに良くなるだろうと思った。

そして急いで足を艦内へ続くハッチに向かわせようとした時だった。

ラ……ララ……

旋律が霧を伝って彼の耳に届いた。

まるで引き留められたように、彼は足を止め、声の方を向いた。岩礁だろうか、乗っている輸送艦の右舷二百メートルほど先に何が見える。声はそこから流れてきているようだった。

「なんだ？ 歌？」

誰が歌っているのだろう、ここは太平洋のと真ん中のはずだ。

彼は禁止されているものの、狙撃銃のスコープで確認してみるこ

とにした。

慣れた姿勢と動作で銃を構え、スコープに右目をあてる。

映画などで大抵の人間が見たことのある十の字形に交差した照準^{レディ}線^{クル}。その向こうの世界が彼の眼に映し出される。

ララ……ララ……

輸送艦が岩礁から離れていき、霧の中に消えゆく中、彼ははつきりと見た。

「う……そだろ……!?」

岩礁には数人の人影があった。

最初はアシカなどの海棲動物が横たわっているのかと思ったが、そうではなかった。

その光景を凝視し、凍り付いたように霧の中へ没していく岩礁を見送る。

「なんだ市之瀬！　こんな所にいたのか！」

すると背後で男の声がした。

振り向くと、そこに立っていたのは若い男性だった。

年齢的には二十代前半、市之瀬と同様に陸自の迷彩服姿だ。自衛官にしては優しい印象を受ける柔らかな目元や、同性である市之瀬からみてもかなり整っていることがわかる顔立ちが特徴的だ。背もそこそこに高く、普通の人から見れば少し短い、自衛官にしては少し長い黒髪がよく似合っていた。

久世啓幸^{くぜひるゆき}三等陸尉。市之瀬の所属する小隊の隊長だった。

やっと生きた人間、それも自分と関係のある人物と出会えた。

姿を認めるなり、市之瀬は弾かれるように彼のもとへ駆け寄った。

「しょ、しょ、小隊長殿お!?」

滅多に敬語など使わない市之瀬が、この時ばかりは錯乱したように自らの上官の下へ走っていく。

途中、あまりの気の動転に脚がもつれて転げそうになりながら、彼は久世に詰め寄った。

「ほ、報告しますっ！」

「ど、どうしたんだい……？」

「いいい今、本艦右舷に、『人魚』の群れが！」

必死の形相でその方向を指さす。

久世がその先を何事かと確認するが、そこには濃い霧がかかっているだけでも何も見えなかった。

市之瀬もそのことに気づいて呆然とする。

と、彼の上官はそつと肩に手をかけ、心配そうな表情を浮かべた。

「……落ち着くんだ市之瀬二士。どこか痛むところはあるか？」

「へ？」

「君は気を失ったショックで混乱しているんだ。大丈夫、医務室に行こう。自分で歩けるかい？」

「う、嘘じゃありません！」

「うん、そうだな。詳しくは医務室へ行ってから聞こう」

普段ならこの優しさが嬉しかったが、今はじれったいことこの上なかった。

「ちよつと待つてください！ ホントなんですよお！」

「ああ、わかつてるよ。さあ、艦内へ戻ろう」

がっしりと腕を掴まれ、連行されるように引きずられていく。徐々に市之瀬の叫ぶ声が艦内へと遠ざかっていった。

やがて甲板から二人の姿が消え、再び静寂が海原を支配した。

周囲にはただスクリーンの巻き起こす白い航跡だけがはつきりとした形として海面に浮かび上がっている。

ややあつて、その航跡の横に、ちやぶん、と微かな音を立てるものがあつた。

それが数人の少女の顔であることに気づく者はいない。

霧中であつて、彼女らの美しさは全く損なわれず、宝石のような瞳が白い世界に花のように彩りを与え、波間には豊かな長髪が揺らめいていた。

彼女らの先には、あてもなく進んでいる輸送艦の艦尾がある。

少女たちが、人形のように整った顔で小首を傾げあうと、心配そ

うな表情で再び海中へと潜っていった。
彼女らの尾鰭^{おひれ}が、スクリーンの起こした航跡の中で踊っていた。

第2章 鳥

びよう、と風を切って飛ぶ感覚が彼女は好きだった。

ゴーグル越しの眼前には、吸い込まれそうなほどに蒼い海原が広がっている。

マリースアの夏の潮風だ。世界がどんな惨状を呈しているようにも、とりあえず夏はちゃんとやってきてくれるらしい。

ラロナはまるで熱い血潮のように紅い髪を掻き上げた。

女だというのに肩にもかからない髪だ、とよく莫迦^{ばか}にされるが、彼女はこの機能的な髪型をそれなりに気に入っていた。

眼下の海原のような蒼い瞳は一点の曇りもない。

彼女は癖のように身につけている物を確認する。

空を飛ぶ人間はひょんなことで物を落とすので、その確認作業は癖になって当然だった。

まず、あるかないかの軽い防具。役割としてはほとんど儀礼的な部隊識別用である。鳥のシルエツトに槍と短剣が交差した？飛行軽甲戦士団？を表す紋章入りの短胸当て^{ハーフ・プレストブレスト}が輝かしい。

オリーブ色の履き古された短パンに、腰には白兵戦用の短剣^{カトラス}が提げられている。長時間の飛行で足が傷つかないように濃紺のニーソックスを履いているが、靴はとにかくとして、そろそろニーソックスの方は買い換え時だった。

「はっ！」

彼女は気合いを入れて手綱を操った。まだ十五歳になったばかりとはいえ、その動作は手慣れたものだ。

彼女は今、晴れ渡った空を飛んでいた。

乗っているのは、？鳥？である。

鳥といっても、当然普通の鳥ではない。翼長だけなら竜並みの巨大種である。

アルゲンタビス。

人に乗せ、人と飛ぶ大いなる鳥。

外見はコンドルに似ており、その偉容にふさわしい知性もある程度備えている。

比較的世界的に軍・商用に飼い慣らされている種であり、一般には？巨鳥？と呼ばれて親しまれている。

ラロナが小柄とはいえ、一人の他に旅道具一式を背や腹に乗せて長時間飛行してられるその馬力ならぬ鳥力はかなりのものだ。

竜と比べれば安価に手に入れられることから、一般的には伝令や偵察など小規模な役割を担っているが、数が揃えられる名産地では軍に専門の部隊が編成されることもあった。ラロナの属する部隊がそうである。マリースア南海連合王国軍・飛行軽甲戦士団が正式名称だ。

この南の島々と、デメテル大陸の一部を領土とする連合国家が彼女の母国である。ラロナは大陸内陸部の山育ちだったが、美しいこの海原がとても好きだった。そのため、哨戒任務という地味な仕事でもそれほど苦にはならない。

「テール！ 気持ちいいなあー！」

背中に装着された専用の鞍に跨り、彼女は軍に入隊してからずっと組んできた？相棒？に語りかけた。

キユエ、と甲高くテールと呼ばれた巨鳥は応じる。

「うんうん。そうだろー」

ラロナがカツカと笑う。

ある程度巨鳥の言っていることが彼女には分かるのだ。その人外じみた能力のおかげで彼女は飛行軽甲戦士団の鳥騎手ちようきしゅに選抜してもらえた経緯がある。

と、彼女の表情がさっと変わった。

潮の香りが変わったのを察知したのだ。

重く、まわりつくような空気。

潮の香りというより、場の雰囲気が変わったといったほうが正確

だろう。

水平線を確認すると、霧のかかった海域が近づいてきていた。

「……もう少しで『人魚の海』か」

だいぶ飛んできたな、と彼女は呟いた。

そこには常に霧がかかり、決して晴れることはない魔の海域が広がっていた。

？大継承戦争？の頃に戦火から逃れてきた最後の海棲人たちが住み着いた場所である。

なぜこの海域に住み着いたのかは、はっきりとしたことが判っていないらしい。王立教養学院での研究者には『閉鎖環境を創ることで種族を守るため』という説が有力だ。

なにせ、あの霧の中へ迷い込めば最後、ほとんどの場合生きて帰ってくる者はいないという。研究が進まないのは仕方がなかった。そんなわけもあって、あの海域の奥深くには、世界の切れ目があるのだ、という奇想天外な説もあるらしい。

が、なににせよ、今の彼女にとっては特にあの海域の真実なんかはどうでもよかった。

大継承戦争といえば神話の域、一千年以上前の話なのだ。そんな時代から存在し続け、前人未踏の場所など自分にはどうしようもないとしか言いようがない。

それよりも重要なのは今の任務だ。

現在の彼女の任務は領海の哨戒だった。

早朝に王都からほぼ一直線に進路をとってきたから、正午に差し掛かるうという今の時刻に人魚の海に到達するのはかなり早い。夏風が強く吹いていたため、テールが簡単に風に乗って飛べたからだろう。天気には左右される巨鳥の速度と行動範囲だが、今日は運が良かったようだ。

この海域は人魚の海の影響があつて船や商用巨鳥の往来は少ない。辺境といって差し支えのない領域だ。

だが、海を挟んだ向こう側のルールイエ大陸からは比較的近い

め、敵の侵攻が懸念されている軍事的な地域なのだ。

敵。つい二ヶ月前にルールイエ最後の防波堤と言われた神聖プロミア帝国を滅ぼした国である。ルールイエ大陸をわずか五年でその手中に収め、このデメテル大陸に迫らんとしている。

フィルボルグ継承帝国。

ご丁寧に自らが世界の継承者であることを強調するために国名に継承の名を刻んでいる。

ラロナはじつと対岸の方向を監視した。

本来ならプロミア領だが、今は継承帝国の手に落ちている。

無論、必ずこの方向から敵船団が現れるとは限らない。それに、侵攻があるにしてもプロミアとの戦争である程度損害を受けている上、海を越えて軍勢を上陸させねばならないので、そう早くに敵影はみえないだろうと戦士団の中でも言われている。

しかし、ラロナは普段はずばらな性格だが、任務については生真面目だった。

彼女は気を抜かずに水平線を睥んだ。

彼女は目が良い。巨鳥乗りに必須の身体条件だが、その中でも飛び抜けていた。元々が山育ちだ。

「ん……？」

ふと警戒領域から外していた人魚の海に気配を感じる。

彼女の動物的な勘はよくも悪くも当たることが多く、本人もそれを信じていた。

ラロナは身体を緊張させ、感覚を研ぎ澄ます。

その瞬間だった。

ボオオオー

「おわっ！？　びっくりしたあ」

市之瀬は身体に振動が伝わってくるような汽笛の音を聞いて耳をふさいだ。

どうやら霧を抜けた瞬間に、全艦が警笛を鳴らしたようだ。

市之瀬は無許可で甲板に出ていた。

久世にも信じてもらえず、医務官からはしばらく安静にしておくように言われたのだが、自分が見た人魚の姿が頭を離れず、今度は先輩隊員に借りたデジカメを手に甲板に座り込んでいた。

結局再び人魚たちは姿をみせず、頭上には青空が戻ってきた。

残念な気もするが、空が見えるとやはり安心する。

どうなるのだろうか、今回の派遣は。日本に帰還するとなると、派遣隊員に与えられる手当金がなくなるわけだから、骨折り損のくたびれもうけだ。

と、そんな給料のことを考えながら艦内へ戻ろうと立ち上がったとき、頭上を何かが横切る影が見えた。

「え？」

市之瀬が見たこともない影にはつと空を見上げる。

「何……だ？」

太陽を背にした逆光。シルエットしか認識できず、判然としない頭上をしきりに旋回していることからどうやら鳥のようだ。

だが、何か違和感がある。市之瀬は狙撃手として距離感の把握には人並み以上のものを持っているので、すぐにおおよその高度と対象物の大きさを割り出せた。

デカイ！

市之瀬は直感的にそう思った。

それが鳥であることは分かったが、そんな大きさの鳥など彼は聞いたこともなかった。

キューー、と鳥の鳴き声が海に響いた。

思わず身を縮こめてしまふ、威嚇するような声だった。

「うわっ！？」

いつの間にか、その生物は高度を下げていた。旋回していたのは徐々に高度を下げていたのだ。艦隊の合間を縫うように滑空している。

市之瀬は手にしていたデジカメの倍率を上げてその生物を追った。艦内へ戻るべきだとも思ったが、まだ高校生気分が抜けきっていない彼には好奇心の方が勝ったのだ。

夢中になってシャッターボタンを押し続けていると、彼はあることに気づいた。

鳥の背中には人が乗っていたのだ。

「嘘だろ……！？」

市之瀬はその乗っている人物をズームアップする。一瞬手ぶれ防止のいいカメラだ、と思ったが、次の瞬間に目を見開いていた。

乗っているのが幼い少女だと分かったからだ。ショートカットの紅い髪が、潮風と飛行の逆風に荒々しく靡いている。

紅い髪というのも驚いたが、それ以外にも驚くべき点があった。

少女の格好が市之瀬には信じられなかった。

まるで大昔の兵隊のような鎧姿なのだ。

しかし鎧とはいっても、動きやすいようにかなり軽装化されている最低限のもので、腰には湾曲した短剣を提げている。

まあ海に出るのに防具なんか着込んでたら落ちたとき助からないか、と思いつくが、市之瀬にはそれ以上のことは分からなかった。

そもそもなぜそんな時代錯誤な格好でいるのだろうか。市之瀬が率直な疑問を抱く。

その間も彼女は細い両手で手綱を巧みに操っていた。

ゴーグルの奥から海原のように深く蒼い瞳がこちらを窺っている。え、こちらを？

市之瀬はカメラから目を離した。

倍率ではない視界が戻ってくる。

しかしそのとき、倍率と変わらない巨大な鳥のシルエットが視界いっぱい広がっていた。

「な、何なんだ……！？　これ！？」

ラロナは眼下に現れた？物体？に対して、形容すべき言葉が見つからなかった。

灰色の、巨大な何か。

彼女に分かるのはそれだけだった。

海の上に存在し、そして一定の方向へ進んでいるのだから、それはいわゆる船に違いない。だが、船ならば進むために必要な帆の類は一切それには見つけれなかった。にも関わらず、白い航跡を引きながらその物体は海の上を風のように早く進んでいる。それだけではない、この物体はあまりにも大きいのだ。マリースアの港を利用する巨大な交易輸送船でさえ、この船の半分もないはずだ。

「し、しかもあっちって！？」

そう、入った者は出て来られず、また出てくる者もないはずの、人魚の海。

そこからやってきた異形の存在。

ラロナは全身の毛が総毛立つのを感じた。

何か、良くないことが起きるのではないか？

直感だがそう思えたのだ。

「と、とにかく、情報を収集しなきゃ」

彼女は必死になって冷静な判断を心がける。

自分の任務は哨戒だ。異常があればそれを可能な限り詳細に調べることが最優先である。

「数は五隻、色は灰色、全体的に角張っていて、人の姿は見当たらない」

彼女は目を懲らしてその物体の全容を把握しようとした。

普通、船なら甲板上に水夫などがいつも忙しく働いているものだが、そういった人間も見当たらない。何から何まで不可思議な船だった。それが、レーダー使用中は甲板への出入りが禁止されていることによるのを彼女が知るはずもなかった。

「テール！　もう少し接近してみよう！」

彼女は相棒と共に旋回すると、その物体の合間を高度を下げた飛行するのを試みる。

「船内に人がいる？」

イーリス艦の艦橋の真横を飛び去った際に、彼女は目を丸くしてこちらを見ている海上自衛隊の乗員達を横目に見た。

だが、ずんぐりとしたライフジャケットを身につけたその姿は、彼女には奇怪な服装にしか思えなかった。

「一体どこの国の人間だ？」

やはり最初は仮想敵国である継承帝国の人間ではないかと疑ったが、どうもそうではないような気が彼女にはした。こちらに対して弓矢を撃つて来るなどの敵対行動も今のところ見られない。それにいくら継承帝国とはいえ、このような巨大な船を、それも帆も張らずに動くことのできるものを持ったという情報は聞いたこともなかった。継承帝国の海軍といえば、悪名高き海賊集団を母体としたものだが、海賊がこんな船を乗り回すとは思えない。

「分かんない……奴ら何者なんだろう？」

ラロナは、きつとこの報告を持ち帰ったところで、誰にも信じてもらえないのではないかと感じた。自分なら、きつとこんなバカみたいな話をされたら、鳥の上で羽毛に気持ちよくなつて昼寝でもしていた夢の話でもしているのだろう、と取り合わないはずだ。

「もっと確かな情報が必要！」

彼女はキツと表情を引き締めると、兵士としての使命感に奮い立った。

「こうなりや威力偵察だ！ テール、行くよっ！」

彼女は手綱をさばき、高度を更に下げた。

鳥騎兵は偵察任務に多用される。そして、敵への威力偵察は最も危険かつ重要な任務だった。が、彼女の思いついた威力偵察とは、つまるところ……

「あの船がいい！ 場所が平たくて空いてるから、着陸できるはず！」

単なる殴り込みなのだった。

「うわぁあああつ!？」

市之瀬はあまりの迫力にその場に尻餅をついた。

そして、強く何度か羽ばたいて、突風を起こしながら巨大な鳥が彼の目の前に降り立った。見た目は大きい、身のこなしは軽やかだった。輸送艦の甲板は空母のように平たく広いためか、降りやすかったのだろう。

もう一隻の輸送艦は甲板に車両を満載しているために降りることが難しかったからか、と市之瀬が気づくが、それよりも今は艦内へ逃げなければならぬ。

這うようにハッチへ向かおうとするが、カメラを構えているときにうつかり乗り出しすぎていたために予想外に遠い。

彼は恐怖のあまり慌てふためいて背後にいる怪物から逃れようとした。

と

「おい、貴様！」

「どわあつ!？」

少女の怒気を孕んだ声だった。

次の瞬間、体当たりされるような衝撃を受け、その場に倒れ伏す。そして、背中に誰かが馬乗りになると同時に、首筋に冷たい感触が走る。

突きつけられているものが刃物であることを理解するのに時間がかからなかった。

「騒ぐな、ゆつくりとこちらを向け」

声は幼いが、本気さが伝わってくる口調だった。

うめくことさえできず、彼は言われた通りにする。

仰向けの情けない姿になると、自分の自由を奪っている張本人と

対面する形となった。

蒼い瞳、紅い髪、はっとするような美しさを持った少女がそこにいた。

しばし言葉を失い、少女の顔をまじまじと見つめる。

ゴーグルを今は脱いでいるため、顔の全容がよりはっきりと分かった。

少女のそれは野性味のある美しさで、自分が持っている魅力を全く理解せずに生きているのが一目でわかる、そんなボーイッシュさを備えたものだ。

……カワイイのにカメラ映えないタイプかな。

刃物を首筋にあてられていなければもっとそう感じたことだろう。そして、なんの理由があつてこんな目に遭わされているのか、彼には全く見当もつかなかった。

「お前たち、いったい何者だ？ この鉄船の行き先は？」

ラロナは冷たい視線を向けながらそう尋ねた。

え？ 日本語じゃないか……

市之瀬は彼女の口から発せられている言語が流暢な日本語であることに気がついた。

「それにしても何て大きさ……まるで島じゃないか！ 信じられない、本当に船なのかこれは？」

しきりに少女は辺りを見渡しては意味不明な言葉を呟いている。

だが、今は命がかかっているときだ。そのことに言及する余裕はなかった。

「お、俺たちは日本人だよ！ 国連部隊のさ！ テレビでやってない？」

市之瀬は自分に向けられた敵意が誤解なのだとばかりに、肩に刺繍された日の丸のワッペンを彼女へ見せた。

だが、少女はきよとした顔で市之瀬の見せる日の丸を見つめる。

「はぁ……二ホン？ て……れび？ なんだそれは？」

嘘だろなんで通じないんだよ!?

日本という国名くらい知っていてもおかしくないはずだ。

(もしかしてあんまり教育が行き届いていない国の女の子なのかな? いやそれにしては日本語話せるし……)

「ひよつとして……あ、あんた海賊か?」

市之瀬は航海前にニユースでやっていた日本の貨物船などを狙う東南アジアなどの海賊のことを思い出し、そう口にしていた。こんな凶鑑にも載っていないであろう巨大な鳥を駆る海賊など聞いたこともないが。

? 海賊? という言葉を聞いた途端、少女の表情が陰しさを増した。

「誰が海賊だとっ!」

「ひいつ!?! わ、悪かったよ!」

今にも首に刃を突き立てそうな剣幕の少女に圧倒され、市之瀬が叫ぶ。

「貴様アタシの栄えある飛行軽甲戦士団の紋章が分かんないのか?!?!」

少女が自らの胸に手をあててそう詰問した。

「な、なんだよそれ?」

訳が分からずに市之瀬がそう言うと、少女が信じられないといった表情をする。

「ほら! ここだよ!」

胸をずい、と突き出して何かを強調した。

「分かったか!?!」

「……ちっちゃい胸だね」

ピク、と彼女のこめかみが反応した。

そして、どこか爽やかな笑みを浮かべる。

「……貴様、名は?」

「い、市之瀬」

「そつかイチノセ、珍しい名前だな。今から死んでもらうのが惜しいよ」

人間の部位でも最高の急所に刃物を押し当てられている市之瀬は、顔を真っ赤にしてジタバタとした。

「ちょ、ちよつと待てえー!?」

その瞬間、彼が逃げこもうとしていたハッチから大勢の隊員たちが飛び出してきた。

「おいあそこだ! 陸自の若い奴が捕まってるぞ!」

「なんじゃ、あの化け物みたいな鳥は!?」

海自の隊員らが不審者対処用の強化プラスチック盾や警棒を手に駆けつけてきたらしい。

彼らはまるで警察の機動隊のように盾を構えると、分隊長らしき壮健な男が拡声器を手に少女へ呼びかけた。

「その不審者、君は包囲されている! 人質を放して降参しなさい!」

マニュアルが何かにはそう言うように記載されているのだろうが、別に今の彼女は包囲されていなかった。

「誰が不審者だあー!?」

なぜか拡声器の増幅された声に一瞬怯んだ少女だったが、すぐに組み敷いている市之瀬を引き起こして怒号を発していた。

「ちよつ……乱暴にしないでくれって」

「やかましい黙れっ!」

腕を締め上げられた。

「あいたたっ!?」

「ちっ!」

いくら市之瀬が無防備とはいえ男相手に少女の体格では少々無理があった。

しかし、制圧部隊は彼女の背後でこちらを睨む巨大な生物を恐れてか対処に窮しているようだった。

奇妙な均衡状態が漂う。

市之瀬はちらりと彼女の横顔を盗み見た。

彼女の顔は、自分より幼いはずなのに、なぜか大人びて見える。

心に一本の芯が通っているような強固な意志を感じさせる、そんな顔つきだった。

彼女が何者なのか一切分からないが、市之瀬にはそれだけが漠然と理解できた。

しばし思考した後、分の悪さを感じたのか、突然少女が勢いよく市之瀬を突き飛ばす。

「うわっ」

甲板に叩きつけられ悲鳴を上げる市之瀬を尻目に、少女が駆けた。市之瀬はその背中を見るなり、思わず呼びかけていた。

なぜそんなことをするのか、気が動転しているのか彼自身にもよく分からなかった。

「な、なあっ！」

市之瀬の鋭い声に少女がさつと振り向いた。

蒼い瞳が市之瀬を捉える。一切の迷いのない、真っ直ぐな視線だった。

そしてその顔は真剣そのものだ。

なぜだろう、と市之瀬は自らに問いかける。

……こんな面構えした女の子、見たことがない。

市之瀬は心に芽生えた不思議な感覚に戸惑った。

「じゃあ、君の名前はなんだよ？」

咄嗟に思いついた言葉はそれしかなかった。

少女がまたきょとんとした表情を見せた。

おそらく本人に自覚はないのだろうが、険しい顔が和らいで、円らな目になっているのが可愛い。

彼女は逡巡したようだったが、そう間をおかずに答えていた。

「ら、ラロナ……」

遠慮がちにそれだけ言うと、彼女は踵を返した。

「テールっ！」

叫び、彼女は軽やかな身のこなしで巨大な鳥の背に跨る。

鳥が威嚇するように大きく翼を広げた。

少女が手綱を引っ張ると、艦首の方へと向きを変え、そして走り出した。

甲板を滑走路代わりに助走をつけたのだ。

艦首から飛び降りるように甲板を鋭い爪で蹴ると、まるでグライダーのように風を掴んでいた。滑空し、数回羽ばたいて高度を上げる。

クエー……

鳥の鳴き声が徐々に遠ざかっていった。

「行ってしまった……」

イージス護衛艦？いぶき？の艦橋で双眼鏡を覗きっぱなしだった加藤が呟いた。

今しがた起こったことをどうにか理解しようとしているのだ。

それは艦橋にいる者全員に共通している。

皆が青空が戻ってきたことに喜んだ矢先の出来事で、艦橋内は様々な言葉を交わす雑然とした空気が支配していた。

しかし、加藤だけは信じられないことが起きたと異口同音に言う他の幹部隊員たちとは違い、必死に今の状況について何らかの結論を出そうとしている。

主席幕僚の義務感もあるだろうが、これは彼自身の柔軟さや適応能力の高さもあった。

硬直した思考を持ってしまうがちな自衛隊幹部の中では例外的な存在である。

ざわざわと落ち着かない雰囲気は艦橋を包んでも、加藤はほとんど動揺を見せずにいた。

「何か、分かったか？」

ライフジャケット ヘルメット

他の海自隊員と同じく灰色の救命胴衣と鉄帽を身につけた、紺色の作業服姿の蕪木が、司令席を降りて隣に静かに立っていた。

若く、異質な存在になりがちな自分を理解してくれる得難い人物である蕪木に対して、加藤も信頼を寄せていた。

ええ、と明るく答える。

彼の声に、示し合わせたかのように艦橋が一斉に静まった。

注目を集めても平然とした様子で、加藤は一つ咳払いする。

「我々が士官室に現れた翼を持った少女の引き起こした異変により現在位置を見失い、濃霧の中を迷走して約二十二時間が経過しました。その間、あらゆる周波数帯が沈黙。通信手段を失ったまま、緊急措置として最寄りと考えられたグアム島の米軍基地を目指す進路をとっていました」

加藤は異を唱える者がいないことを確認して一呼吸を置く。

「しかし、霧を抜けたと思ったら、あの鳥です。乗っていた少女の国籍も不明……しかしこれはさほど重要なことでありません。これは今後の問題であり根本的な問題ではないからです」

加藤はかなりの重大事に違いない先刻のことについてあまり言及はしなかった。

だが、代わりに現在の通信・レーダーの状況を？いぶき？の艦長に詳しく尋ねる。

「では霧が晴れた今も、何の電波も傍受できないんですね？」

「はい」

「故障ではない？」

「三回も点検しましたが、機器そのものに故障はありません」

「衛星位置観測システムも、人工衛星からのレスポンスが消失して使用不能……ですね？」

？いぶき？艦長は無言の肯定をした。

加藤は断言した。

「そんなことは地球上ではありえない」

それはその場の人間が最も強く感じていた疑問だった。

電波妨害をかけられているわけでもないのに、民間のラジオ電波や衛星通信までもが全てダウンするというのは絶対にありえない。

しかし、ありえないことなのだから、そうなっている原因が分からなかったのだ。

自然環境以外の電波の消失。

そう、それはまるで世界そのものが消失でもしたかのような現象だった。

ぼそぼそと何人かが加藤の言っていることの意味を図りかねて不安げに話し始める。

加藤が続けた。

「量子力学の？多次元解釈？というものをご存じですか？」

「いや……なんだねそれは？」

蕪木が聞き慣れない言葉に少し驚いた様子で答えた。

加藤は腕を組み、片手の人差し指を立てて教師のように説明を始めた。

「？シュレディンガーの猫？という思考実験で有名な分野なのですが、量子力学では極論してしまうと世界は一つだけではない、という仮説があるんです」

「世界？」

「そう、世界です。我々が住む世界には多数の平行世界が存在し、平行しているがゆえに交わらず、我々には知覚できないし、存在を知る術也没有」

加藤の淡々とした話し声は聞く者の耳にすんなりと入ってくる不思議な説得力があった。

「ですが、なんらかの方法で別の世界にあるものを我々の世界へもつてくることはできたなら？」

加藤はそこまで言って、メガネを珍しく神経質そうに中指を差し、位置を直した。

「あの翼を背中にもった少女という？観測者？の存在は、重なりあった可能性に形を与えることにより、自らを？結節点？として我々を別世界へ引きずり込むことをも可能にしたのでは……？しかし、一体なぜ我々である必要が……？」

「加藤二佐、いったい何の話をしているのか私にはさっぱりわからんよ」

幹部の一人がヤジを飛ばすように遮った。しかし、加藤はそれに意を介さずに話を進める。

そして、少し早く、結論を導き出すことにする。

「つまり、僕の仮説が正しいなら……世界が消失したのではない」
居並ぶ幹部たちを見渡し、彼が宣言するかのように言い放った。

「その逆、つまり今、我が艦隊の方が？ 平行世界？ に迷い込んだ！」

第3章 上空

マリースア南海連合王国の王都？セイロード？の王城からは、城下町として栄える海洋交易都市としての都と、国家の象徴ともいえる整然とした活気ある都としての両方を一望にできる。

夕刻になってしばらくの時間があつたので、そろそろ教会の鐘の音が聞こえてくるはずだ。全てが朱に染められた逢魔が時に、悪霊を追い払う光神の音色である。

都の湾岸線は大きく三日月型を描いており、その両側は岬となっていた。低い岬が灯台で、高い方が王城だ。

王城はその岬を古くから改築を繰り返して、記録に残っているだけで六回目の拡張整備の後に今の姿に落ち着いていた。目を見張る白い王城は、大陸横断街道經由でなくては手に入らない白大理石の城壁で、建築様式は前期光母教建築^{しうぽきやう}。五本の天を突く尖塔と、宮殿には金や真珠、翡翠などをふんだんに使用した華美な様式が印象的である。

ラロナの部隊の駐屯地は対岸にその王城を望む灯台の足下にあつた。

岬の先端、助走路として荒く整備されている場所に滑り込み、巨^{アルゲ}鳥^{シタリス}のテールを鳩舎へ入れることも投げ出して宿舎へと走る。

途中、何人かの同僚が血相を変えた彼女に驚いて声をかけるが全て無視する。

二階建ての頑丈そうな石造りの建物へたどり着くと、立哨当番日であろう幼い少年の衛兵を突き飛ばして戦士団長室へと駆け込んだ。質素な執務室といった室内には、豊かな草色の長髪を持った妙齡の女性が座っていた。

名をカルダといった。

マリースアは文化的に名字を重視しないという特殊な背景を持つ

ている。そのため、カルダも名字を今まで部下の前で口にしたこと
がなかった。それは貴族として歴史的に義務付けられたもので、カ
ルダが貴族のステータスである名字や爵位を誇りに思っていないわ
けではなかった。南海連合王国という名であるように、様々な文化
を持つ国や民族の連合体がこの国なのだ。

ちなみに、ラロナのような平民は名字を持つ者、持たない者と混
在している。便宜上、ラロナが名字を名乗る必要に迫られた場合は、
母の名字を名字として代用する。

「何事ですか？ ラロナ練戦士^{れんせんし}」

練戦士とはこの国での戦士団で用いられる階級である。下から練
士生・練戦士・戦士……と上へ続いていくので、下から二番目のラ
ロナはやつと半人前といった階級の兵士だった。

そして、目の前のカルダは若いものの階級は戦士団長、部隊の長
であり、更に戦士団では少ない貴族身分だった。

封建社会において身分は絶対である。階級以外にも貴族へ対する
畏怖からラロナは非礼を詫^{はげ}び、床に片膝を立てて頭^{こぶし}を垂れた。

「突然の無礼をお許しください！ ですが可及的速やかにご報告せ
ねばならないことがあるのです」

カルダが右目にかけていた片眼鏡^{モノクル}をそつと外した。

動作の一つ一つが洗練されている。さすが貴族だ、とラロナは思
った。

彼女が身につける黒の槍兵将校用の夏外套は、ユニコーンの家紋
が入っていないければ、まるで拝月教^{はいげつきょう}の修道女のようなだった。

切れ長の双眸がラロナを捉える。

彼女の眼光は高貴さを表す紫水晶のような輝きを持っていた。

「…… よろしい。手短に」

ラロナは元気よく顔を上げ、昼に自分が経験したことを早口で捲
し立てた。

人魚の海から何かが現れること自体が大事件だが、更に出てきた
ものが巨大な城のような鉄の船。数は五隻、国籍不明。

いつもは凜として冷静な表情を崩さないカルダが、その報告にやがてうつすらと額に汗をかいた。

「まさか、フィルボルグ帝国か？」

敵国の？継承帝国？という傲慢な名をマリースア貴族らしく口にしない。

カルダは今現在最も懸念されている国について言及したのである。プロミニア占領という対岸の火事が、こちらにも飛び火する勢いを持っているのだから当然といえた。

「いえ、私が見た限りではそうではないかと……」

少々歯切れ悪く、ラロナが答えた。

彼女自身そのことを考えていたが、しかし短剣一本でおとなしくなる帝国兵などいるだろうか。

それを思うと、とてもではないがあゝの蛮勇で知られる帝国の人間とは言い切れなかった。

イチノセ。

あの少年の名前を思い出す。

男のくせに、ずいぶんと情けない声を出す奴だった。あんな奴が軍人であるはずがない。

彼女に分かるのはそれだけだった。

（まるで、別世界から来たような奴だったな）

ラロナはそんなことを考えてうつかり笑いそうになるが、貴族の前であるのを思い出して堪える。

カルダは大きくため息をついた。

一瞬、笑いそうになったのを気付かれたのかとヒヤリとしたが、そうではないようだ。

「……今はそんな不確かな報告の真偽を正している状況ではない」
カルダは椅子を立ち上がると、窓から海の方こうへ沈もうとしている太陽を眺めた。

「カルダ戦士団長？」

「なあ練戦士、今この世界はどうなっていると思う？」

唐突に話題が変わり、ラロナは思わず間拔けな声を出す。

「え？」

しかし、カルダの美しい顔には苦悩が見て取れた。

深く、沈痛な表情。部下の前ではまず見せない姿である。

何か、様子がおかしい。ラロナにはそう見えた。

「あの千年帝国と呼ばれたプロミニアさえ滅んだ。そして、今のフィルボルグ帝国との最前線は……このマリースアなのだ」

ラロナは、その言葉の意味するところを理解するのに、しばしの時間を要した。

そして、カルダが口にしたことが、まだ公表されていない軍事機密であることを知る。

心臓が、悪魔に驚掴みされたような驚愕をラロナは感じた。

「その鉄でできた船と、国籍不明の外国人共が帝国軍でないなら今はどうでもよい」

カルダは部屋の隅に置いてある槍を手で撫でた。

戦いの予感が、彼女の心には確かにあるのかもしれない。

「覚悟しておけ練戦士。今日、最後通告が我が国に届いたそうだ」

ラロナは、次の言葉を耳を塞いで聞きたくないと思った。だが、兵士として、聞かなければならなかった。

ごくろり、と乾いた喉を鳴らす。

上官は、冷静な声で言った。

「フィルボルグ帝国が、我が国に宣戦布告した」

洗剤を水をまいたタイルの床にぶちまけると、デッキブラシを両手にガシガシとこすり始める。デッキブラシは高校で使っていたのと同じだ。

無断で甲板に出入りし、しかも正体不明の少女に命を脅かされ、海自の関係各部署に多大な迷惑をかけたとして、今後一ヶ月の艦内

各所のトイレ掃除を罰直された市之瀬二等陸士は、夕飯を食べた後に訪れるはずの自由時間の一切を剥奪されていた。

中隊長からの叱責の中で小隊長の久世が庇ってくれなければ減俸……会社でいう減給処分を受けていたところだろうから、まだこれでも感謝せねばならないのだろうか。

今着ているのは迷彩服ではなく、古いタイプの深緑の作業服だが、ズボンの裾を巻き上げているにも関わらずびしょ濡れになっていた。しかし、そんなことよりも彼は、作業中にもずっと頭から離れないことがあった。

あの真剣な眼差し。

ふう、と一息をつく。

なぜか、彼女のあの顔を思い出すと、自分のことが情けなくなってくるのだ。

理由は分からないでいる。

やめだやめだ！

市之瀬はもう少し楽しいことを考えることにする。トイレ掃除の精神的な負担に加え、作業の単調さは一種の拷問なのだ。

彼女が唯一まともに答えてくれた言葉を脳裏に蘇らせる。

回想の中で、彼の脳内フィルターを通して少し恥ずかしげに頬を染めている少女。

『ら、ラロナ……』

ちよつと可愛かったよな、とデッキブラシのピストン速度を遅くして考える。

心なしか、顔が笑っていた。
と

「手を抜いちゃいかんよ？」

「ぬおっ！？」

驚きのあまり水の入ったバケツを蹴飛ばしてしまい、更に服を濡らす結果を招く。

「しょ、小隊長っ！？」

市之瀬の叫びに表情を一切変えないで、迷彩服姿の久世が入り口に突っ立っている。

まるで、出来の悪い弟を諭すような冷静な口調で彼は答える。

「ここはもういいよ。明日に備えてくれ」

「明日、ですか？」

久世の言わんとしていることが分からず、市之瀬が聞き返す。

「ああ、僕と君で、任務に就くことになった」

知的な顔に、苦笑いを浮かべて、上官はそう言った。

昼食後一時間で久世三等陸尉の指揮下、搭乗開始。それ以上はあまり説明もなかった。

明石標準時で午後13時半、天候は快晴。風は潮風がやや強めだった。

隊員の間で『自分たちは今どこか違う世界にいるらしい』という噂で持ちきりの今、市之瀬はそれに参加することもできずに、輸送艦の後部甲板に待機しているヘリに乗り込んでいた。

「こちらグリーンアイ、了解、^{ラジャー}発艦する」

コクピットからパイロットの声がエンジン音の中に微かに聞こえた。

^{キャビン}貨物室で市之瀬は一番端のシートで縮こまって狙撃銃を抱く。

隣には久世、その向こうには映像電送装置の操作員が座っている。この輸送ヘリは胴体側面に巨大なバレーボールのような球体カメラが着いた偵察仕様である。自衛隊では災害派遣でよく活用され、被災地の映像をリアルタイムで遠い基地や対策本部へ送ることができる。

ふわりとヘリが浮いた感覚に、市之瀬はサイドドアの四角い窓から外を眺めた。

流れるように海の風景が過ぎていく。美しいが単調な景色だった。

「どうしてなんすか？」

ヘリが巡航飛行へ入ってしばらくすると、市之瀬は隣の久世に聞いていた。

「何がだい？」

戦闘帽に防弾チョッキという完全武装の出で立ちの久世は、その質問の意味を分かっている様子で、あえて聞き返す。

「偵察なら偵察専用のヘリがあるじゃないですか？」

「ああ、あれかい。あれは見た目が戦闘ヘリに似ているからね、上がいわゆる『配慮』を気にしてね。どうみても輸送ヘリにしか見えないこの機体で行くことにしたんだよ」

「じゃあ……」

市之瀬は狙撃隊員用のブッシュハットの下で、少年らしい輝きを宿した瞳を手元へ向けた。

「どうしてこんなもん持つてくんです？」

狙撃銃の他にも、弾薬をポケットに詰めた集約チョッキを着用し、救急キット・サバイバルキットなどが入った雑嚢（ざつそう）を袈裟懸け、腰の弾帯……軍用ベルト……には銃剣や水筒・折り畳みスコップ、右太股にはレッグホルスターに収められた9ミリ拳銃が装着されている。こんな装備は、よほどの大きな実弾演習でなければ身につけたことがない。

「何かあったときのためさ……」

久世はフライトヘルメットを被った操作員が操作パネルのジョイスティックで操るカメラ映像を、共に注意深く監視しながら言葉を濁した。

市之瀬はため息をついた。

……何かって何さ？

とはいえ、幹部である久世が言葉を濁す理由は分からないでもない。これはおそらく上層部の考えが如実に表れた結果なのだ。

またあの化け物のような鳥に襲われないとも限らないのだが、偵察ヘリは出せない。となると、せめて護衛の隊員には完全武装させ

ておこつ、といった落しどころだったのだろう。

嫌な予感がするのは、自分のようなダメ隊員を行かせるということだった。

危険だから死んでもよさげな奴行かせてるんじゃないだらな？

久世は若い幹部だし、自分は二等陸士という一番下っ端だ。上が考えていることをどうにも邪推してしまうメンツだった。

考えてもしょうがない。市之瀬は水平線の向こうから現れるはずの陸地を探すことにした。

それからしばらくの時間が経ち、市之瀬がなかなか現れる気配のない陸地に飽きがきて居眠りしそうになっていた頃だった。

「見えた！ 陸地だ」

操作員が快哉のように叫んでいた。

慌てて顔を起こすと、はつきりとした輪郭を見せ始めた陸地が確認できた。

こうした形で陸を見るのは市之瀬も初めてで、思わず身を乗り出す。

「街だ……」

市之瀬は誰に言うでもなく呟いていた。

ヘリが高度を下げて陸地へ接近していくと、その光景は次第に鮮明となってくる。

やはりそこは街に違いなかった。いや、規模からいって都市といつていい。

使っている石材の関係からだろうか、建物の多くは白い壁に茶褐色の屋根といった見た目だ。木造らしきものも多い。市之瀬は、テレビの旅番組で見た地中海の風景にどこか似ているように見えた。

高層ビルの類はないが、都市の中央に位置する広場らしき場所の前には、巨大な鐘楼を持った建物が聳え立っている。

上空からは、都市が三日月型の湾岸線から扇状に広がっているのが分かる。都市は海側と、その後ろには山岳地帯があることから、いわゆる扇状地の地形に沿って創られていた。

へりはその突端にある岬の上、灯台らしき物の上を通過していった。

これはカメラに写されて艦隊にも届いていることだろう。きつと大騒ぎになっているに違いないと市之瀬は思った。

自分でも信じられない気持ちだったが、あの少女に出会った時から薄々何か違和感を持っていたのも確かだった。

改めて目の前に広がる見たこともない町並みに、市之瀬は言葉を失う。

へりの乗員全員が、いや、この映像を見ているであろう艦隊の者もそうであることは想像に難くない。

「あれは城か？」

久世が都市で一際目立つ巨大な構造物を見つけて呟く。

へりも、そこが最も施設としても重要である可能性が高いと認め、進路をそちらへ向ける。

「あ、あれ……？」

そんな中で、市之瀬はふとあることに気づいた。

都市の上空を何かがしきりに飛び交っている。

この距離から一見すると、まるで腐ったミカンにたかるハエのようだった。

しかし、それだけではない。

市之瀬は胸騒ぎのようなものを覚えながら、隣の久世に言った。

「街、燃えてないすか？」

立ち上る黒煙が、一つ、また一つと増えている。

目の錯覚ではない。現在進行で何かが起こっているのだ。

ただならぬ気配を感じ取ったのか、久世がパイロットに叫んだ。

「帰投しては？」

「ああ、今許可をとつ……」

その瞬間、市之瀬は何かが激しくガラスを叩き割る凄まじい音を耳にした。

「わぁっ！？」

何が起きたのか理解する前に、ヘリがコントロールを崩して下降を始める。

ジェットコースターに乗ったとき、最初に滑り降りるあの感覚だった。

機体内に耳を劈く甲高い警告音が鳴り始める。

市之瀬が慌てて体勢を立て直してコックピットを垣間見ると、コックピットのフロントガラスが全面に渡って割れ、計器板に何か赤いものが散乱していた。

それが人間の血だと理解したとき、市之瀬は突風に煽られる枯れ葉のように揺れる機体内で絶叫した。

「うわああーっ!？」

叫びが高度警報のアラーム音にかき消されていく刹那、市之瀬はさっきまで見下ろしていた城が自分を吸い込むように広がってくるのを見た。

マリースア南海連合王国の王都・セイロードは混乱の中にあった。早朝、日の出と共に始まったそれは全くの奇襲攻撃だった。

朝日を背に、大量の巨鳥の群れが王都の空を埋め尽くした。その巨鳥は、ルールイエ大陸産の黒毛鳥であるのに気付いた都の住人は多かったが、今から何が起こるのかをすぐに理解するにはそれはあまりにも唐突過ぎた。

黒毛鳥は都の出入り口に当たる陸側に着陸すると、載せていたフイルボルグ帝国兵達を降ろし、またすぐに飛び立って行った。その第一次の上陸により、都は完全に封鎖されるという状態に陥った。

そして、時を置かずして行われた第二次上陸。これは本格的な攻撃部隊の上陸となった。そして、それを阻もうとするマリースア軍を一掃したのが、他でもない帝国軍の竜騎士団だった。数にして五十騎を超える竜を前に、小国の、それも虚を突かれて反撃体制が整

わない軍が太刀打ちできるはずがなかった。

そして、マリースア軍は早々に方針を敵の撃退から一般市民を城へ避難させるまでの遅滞行動……つまり時間稼ぎへと転換した。

都市を封鎖されての戦闘は、援軍も撤退しての再編成も期待できない絶望的な戦いだった。

そしてその中には、ラロナの姿もあった。

与えられた任務は伝令兵。混乱状態にある都市の各守備隊が連携して防御に当たることができるよう、命令を伝達していく役割だった。

最前線ではないからと軽んじられることもある任務だったが、今のこの都市に最前線でない場所などないも同然だった。上空は常に敵の竜騎士が我が物顔で旋回し、伝令の巨鳥を見つけるなり襲いかかって血祭りに上げてしまう。

「転進命令が出た」

戦時につき、ラロナ達同様に軽装の防具を身につけたカルダが、残存兵を前にしてそう口にした。

転進。それはつまり、退却を言い換えた単語だった。そのことを兵士達も理解している。

都市中央部の広場に集合した彼らの顔に不安と屈辱の色が滲んだ。都市の中央部でなんとか維持していた戦線が崩壊し、もはや組織的な抵抗は不可能となったのだ。城へ退却するのは末期的な戦いであることを暗に語っていた。城の中へ国民と残存部隊を収容し、籠城する構えなのだ。だが、籠城は援軍が来ることが前提の戦法だ。その望みがないこの戦いで、それは得策とはいえなかった。だが、他に方法はない。

ラロナの属する飛行軽甲戦士団も、既に行方不明と戦死者を合わせれば、既に半数近くの兵を失っていた。これは、部隊としての戦闘能力の喪失を意味した。

ラロナは、最前線からの伝令から帰還して聞かされたその命令に落胆の色を隠せなかった。自分自身、幾度となく上空で敵の竜騎士

に殺されかけた。同行していた戦友が食われるのも目の当たりにした。

せめて奴らに一矢報いたい！

その思いは今にも爆発しそうだったが、現実是非情だった。

ぐつと怒りと悔しさを押さえつけ、命令に服従する。

あの謎の船団についても、今のこの非常事態にあつては忘れるよりない。カルダにしても、気になつていても考える暇がないようだった。

あのイチノセという名の少年の顔を思い出す。

……お前は、やっぱり敵なのか？

ラロナはそんなことをななしに考えた。あの船団が今のこの帝国軍の奇襲攻撃に合わせて出現したことといい、そう思うのも無理はなかった。

……それとも、私の方こそ幻でも見たんだろうか？

人魚の海の近くで起きたことだ。その可能性も否定できない。戦場という現実の仲にあつて、あの海で見た非現実極まりない存在の記憶は、たった一日で自信のない曖昧さを持ち始めていた。

「これより城へと転進、その守備に当たる」

カルダが命令を発すると、この状況にあつてまだ士気旺盛な部下達が応えた。

「はっ！」

カルダは部下達を頼もしげに見渡した。

薄汚れ、中には負傷している者もいたが、それでもなお祖国を守るために戦う気概を失つてはいない。

「ここから城まで、アルゲンタビスに乗って可能な限り辿り着け。途中、安全な空はない。よって、各人の鳥騎手としての腕だけが頼りだ」

カルダは片眼鏡の奥の鋭い目を部下達に向けた。

「向こうで、落ち合おう。もし落ち合えなかったなら……」

彼女は自身の鳥に跨った。

「『戦士の海辺』で会おう！」

彼女が先陣を切って飛び立つ。

巨鳥は羽ばたいている内が最も目立つ上に無防備だ。おそらく、彼女は上空の敵の注意を自分に引きつけるつもりなのだ。

そんな上官に奮い立った部下達が続いて行く。

「行くぞガキ共！」

老年の古参兵が行く。

「『戦士の海辺』で会いましょう！」

ラロナの先輩にあたるまだ若い娘が叫ぶ。

名誉ある死を遂げた戦士が辿りつくと呼ばれる、死後の世界を願いながら。

「テールっ！ 行くよ！」

ラロナも遅れまいと飛び立った。

部隊は各班に別れ、可能な限り散会しての撤退となった。

ラロナは街の建物の影を縫うように飛んだ。低空飛行だけが敵の竜から逃れられる最善の策だ。恐ろしい速さで風景が自分に向かって流れて来る。一瞬でも気を抜いたら建物の壁に衝突して一環の終わりだ。

（光母神様！ どうか敵に見つかりませんように！）

勝ち気な性格の彼女がそう願うのは屈辱的なことだったが、そう祈らずにはいられなかった。

「うわあああ！？」

彼女の願いも虚しく、飛び立ってそう間を置かない内に背後で味方の悲鳴と、巨鳥の断末魔が聞こえた。

振り返ると、背後の空に敵の姿が見えた。

白い体表の竜、おそらく大陸北方の氷結竜だ。

ラロナも話に聞いたことしかなく、その話を聞いたときは格好良いと興奮したのを覚えているが、今、敵としてそれを目の当たりにして感じるものは恐怖だけだった。

氷結竜がカツと口を開くと、中から高速の氷の刃が打ち出された。

次の瞬間、鈍い音を立ててラロナの隣の通りを飛行していた仲間の鳥の羽毛が舞うのが垣間見えた。建物に阻まれ、その串刺しにされた姿を直視しなかったのだけが救いだった。

「クソっ！ クソおっ！」

ラロナは歯を食いしばり、無力感に叫ぶ。

竜騎士相手では巨鳥では太刀打ちできない。いや、竜騎士を倒すためには莫大な兵力と、そして運が必要だ。マリースアに、そんな余裕はない。それが意味することは、もうこの国は帝国の侵略を撃退することが叶わないのではないかという恐ろしい結論だった。それを打ち消したい一心で、ラロナは叫んでいた。

そして、彼女は低空飛行を止めた。

一気に高度を上げ、竜と同じ高みへと登る。地べたを這いずるようにして死ぬのだけは嫌だったし、自分がこうして踊り出れば、注意はこちらに集中する。それだけ、味方が生き延びる確立が上がるはずだ。

「ラロナ！？ ダメだ！」

仲間の誰かの声が聞こえたが、彼女は止まらなかった。

「来い！ アタシが相手だ！」

彼女は旋回すると、敵と真正面から向き合うコースを取る。

イチかバチか！

ラロナは腰の短剣を抜いた。

重いためと自分が扱うには非力であるために、短槍を用意していなかったのを後悔したが、贅沢は言っていられない。

狙うのは敵と空中接触して敵の竜騎士に肉弾戦を挑むことだ。鳥と竜なら、空中の能力に差はない。むしろ、身が軽いこちらの方が有利だ。

「勝負っ！」

ラロナは敵の注意を自分に集中させるべく、気合いを入れて身構えた。
と

「ん……？」

何か聞き慣れない音が聞こえる。

竜騎士達の動きも変だ。

こちらではなく、海の方角に注意が逸れているようだった。

規則的な音が、風を震わせていた。

バラバラバラバラ！

その音を何と例えるべきか、ラロナには適当な語彙が見つからなかった。あえて表現するなら、空気そのものを叩いているような音だろうか。それはこの世のどんなものが出す音とも異質なものだ。

「な、何だよ……アレ？」

振り返ったラロナはそれを見た瞬間、ここが戦場であることさえ忘れてそう口走っていた。

？それ？は空を飛んでいた。

空を飛んでいるということは、アルゲンタビス同様に何か飛行能力を持った生き物であると考えるのが普通だ。

だが、？それ？は緑色と茶色の模様の、明らかに物体の一つだった。その形状も異様で、箱に尻尾がくつつき、その箱の上で目にも留まらない速さで風車が回っている。

まるで冗談のような物体だ。子供の空想でさえ、こんなものを思いついたりはいしない。

しかも、ここは戦場だ。そんな場違いな空想の産物があつていいはずはなく、それを見た者は敵も味方も皆、呆氣にとられてしまっていた。

そして幸い、それによつて味方を追撃する竜騎士はいなくなった。だが、自分も、そしておそらく敵の竜騎士も、その？物体？が何なのか、全く理解できなかった。

しかし、ラロナにはある確信があつた。

きつと間違いない。あの物体は、あの船からやってきたのだ、と。やっぱり幻なんかじゃなかった！

そう彼女が思った時だった。

「あつ！」

竜騎士が動いた。

その物体を、敵として認識したらしい。

仲間を屠ってきた、あの氷の刃が打ち出されるのを、彼女はただ見ていることしかできなかった。

（煙を噴き始めた！？）

竜の攻撃を受け、その物体は明らかにダメージを受けたようだった。それまで安定していた飛行が、フラフラとしたものになり、やがて……

「城に……落ちた……？」

フィルボルグ継承帝国南伐混成軍なんぱつこんせいぐんのセイロード攻略作戦は、概ねおおむ計画通りに進んでいた。

陣頭指揮の最高司令官である第四階位将軍の表情にも余裕を感じさせるものがある。

現在、陣を張っているのはセイロードの山側の街道近くだった。

敵軍の脱出経路を遮断し、王を含めたマリースア貴族を一人も逃がさないためのものである。

マリースア軍も、おそらく昨日の宣戦布告のたった一日で侵攻を受けるとは予測していなかっただろう。それも、都市を包囲される形で後背を突かれるなど思いもよらなかったはずだ。これならば増援も加えれば、最低限の被害で日没までには都市全域を占領できるだろう。

将軍リヒャルダ・フォン・アードラーは火の手が次々と上がる街を小高い丘から見下ろしながら、報告に上がってくる軽微な敵の抵

抗を聞き、そう樂觀した。

リヒヤルダは帝国西方領貴族出身の姫將軍きしやうぐんであつた。

若干二五歳。実力主義の前線部隊とはいえ、若い。

白磁のように白い肌と、肩までの銀髪が太陽に輝くその姿は、漆黒の甲冑を着込んでいなければまるで聖女と見紛うばかりの美しさを持っていることだろう。

「報告っ！」

重い影が現れたかと思うと、彼女の目の前に巨大な？竜？が着陸した。

体表が北方竜独特の雪に溶け込むような色合いをしていることから、氷結竜だろう。

都市の後背を突くという奇策を可能にしたのも、この竜騎士団の動員を本国から許可されたからに他ならない。同時に、竜騎士団が共に戦うことで将兵の士気も高まる。

この氷結竜を主力とする冰雪竜騎士団と、火炎黒竜を主力とした黒竜騎士団の二個竜騎士団が今回の戦闘には参加していた。マリィスアのような弱小国家相手には過剰とも言える戦力である。

「何事か？」

リヒヤルダは自分の父親ほど年上であろう竜騎士に向かって鋭い声を放った。

全竜騎士は都市内の敵陣の破壊をと命じている。持ち場を離れた事への叱責でもあつた。

「急ぎお知らせすることがあります」

「何だ」

「都市上空で見たこともない奇妙な空飛ぶ物体を撃破いたしました」部下の顔には動揺が走っていた。

百戦錬磨で知られる竜騎士が動揺することは滅多にない。それだけでもかなりの事態といえた。

「奇妙な物体だと？」

リヒヤルダが呆氣にとられたような顔をする。

「はっ！ 自分も信じられませぬが、確かに見たのです。奇怪な羽音を響かせ、中には人らしき姿もありました。友軍であるはずもないので我が竜と共に襲いかかり、氷結弾にて打ち落としましています」

リヒヤルダはしばし思考した。

この竜騎士は周囲からの信頼も厚いベテランである。実直で、命令を曲げてまで嘘を言いくるはずはなかった。

心情的には半信半疑だが、リヒヤルダは部下を信じることにした。「分かった。で、息の根は止められたと思うか？ 我が軍の進軍に影響は？」

「はい！ 正面から我が竜の氷結弾を撃ち込みましたので。それに、あの高さから落ちて助かるとは思えませぬ」

氷結竜を見やると、確かに竜の口からは氷の塊を高速で撃ち出した後の冷気が漏れている。

「そうか。報告御苦労。行つてよい」

「はっ！」

再び竜が羽ばたき、冷たい風を残して飛び立っていく。

リヒヤルダは順調な戦況の中に現出した小さな異変に、不吉な予感を抱いた。

しかし、帝国軍人として不安を表に出すことなど許されることではない。

現状として順調ならば、占領後にでも考えればよいことだ、と思ひ直すことにする。

「お困りですか……？」

しゃがれた声が彼女の耳に障った。

うんざりしながら振り返ると、本国から派遣されてきた魔導師が不気味な笑みを浮かべて立っていた。

……確か名前はゲンフルと言ったか。

竜騎士団の増援の見返り、といった形でこの男は督戦を命じられていた。

年齢も出身も、はっきりとした階級も持たない肩書きだけの男は、それだけで軍の中で浮いていた。

督戦などわざわざ魔導師にやらせる理由などないのだ。何か別の任務があつてここへ来ているに違いなかった。

「いいや、督戦官殿のお手を煩わせるほどのものではない。まだ未確認の情報であり、作戦も当初の計画通り、滞りない」

「それは重畳にございます」

急ごしらえの天幕の中へ帰って行く黒い後ろ姿に、リヒャルダは小さく舌打ちする。

その忌々しさに、先刻の報告に感じた微かな不安も消えてしまう。彼女は再び炯々とした目を戦場へ向けた。

「う……」

幸い、気を失わずに済んだようだ。

しかし、身体中に痛みが走っている。まずは骨が折れていないか確認する必要があつた。

なんとか大丈夫だ。

市之瀬は身体を起こした。

頭に鈍痛が残っている。手で軽く触れると、墜落の衝撃で擦った傷から血が流れていた。

……墜落、そう、ヘリが墜落したんだ！ でも、いったいどうして？

機内は文字通りひっくり返ったような有様で、荷物や機器がバラバラになって足下を埋め尽くしている。

「久世三尉っ！？」

朦朧とする意識の中で、真っ先に上官の名前を口にする。

慌てて機内を探すと、彼は機材の下敷きになっていた。

無我夢中でそれを退け、生死を確認する。

……良かった。息をしてるし、目立った傷もない。

気を失ってるだけか、と運に感謝したのは一瞬のことだった。

コックピットから呻き声が聞こえたのだ。

「大丈夫ですか!？」

コックピットに駆け寄ると、市之瀬は絶句した。

二人のパイロットの内、一人はおそらくトラブル発生直後に何かの直撃を受けて即死していた。副パイロットらしき若いパイロットは、最後まで機体と格闘したようで、操縦桿を握ったまま瀕死の重傷を負っている。

あまりの惨状に胃の中の物が逆流しそうだったが、すんでのころで抑える。そして、とにかく生存者を助けようと思った。

動けない重傷者は二人。副パイロットと映像伝送装置の操作員だった。二人とも、骨折や内臓への損傷の恐れがあるのは、衛生隊員でない市之瀬にも一目瞭然だった。

機内に備え付けられていた担架と、座席シートを利用した応急担架で二人を外へと引きずるように運び出した。

外から見るヘリの損傷状態は、まさに残骸といった感じだった。

回転翼はあらぬ方向へ折れ曲がり、尾翼はひしゃげてだらしく地面に垂れ下がっている。

「しっかりしてください！　すぐに救出がきますから！」

市之瀬は慣れない手つきで二人に応急処置を施す。しかし、ヘリの救急箱程度では気休めにしかない。一刻も早く病院設備を備えた輸送艦に搬送しなくてはならない。

救助が来るならと、ヘリの中で煙幕手榴弾や信号弾発射機などを探し出す。だが、すぐに救助ヘリが飛び立ったとしてもここまで片道で一時間はかかるだろう。往復で二時間だ。それまで彼らが保つかどうか怪しい。

うめく負傷者に包帯を必死に巻きながら、市之瀬は泣きそうな気持ちになった。目の前で人が死にそうになっているのに、自分は何もできないでいる。

「くっそお！」

あつという間になくなった消毒液の空瓶を蹴飛ばし、市之瀬は機内の艦隊との交信が可能な長距離通信機を調べる。

雑音すら聞こえない。墜落の衝撃で壊れていた。

彼は精根尽き果てた表情でよろよろと機外へ出た。

さつきまで夢中だったので気がつかなかったが、今自分がいる場所、上空から見たあの巨大な城のどこからしかった。周囲にはハイビスカスに似た美しい花などが植えられている。何かの女神だろうか、女性を象った石像から水が流れている噴水もある。

中庭か何かかな？

市之瀬はなんとなしそう感じる。

そして

「あ」

と間抜けな声を漏らしてしまう。

周囲の状況を確認しようと、反対方向を振り返ると、そこには大勢の人間の姿があったからだ。

そこにいたのは数百人、いや数千人の雑多な種類の人々だった。薄汚れた服を着た初老の男性、子供を抱えた若い母親、急ごしらえの担架に乗せられた負傷者……皆、あのラロナとかいう少女と同じように、時代錯誤な民族衣装のような服装をしている。いや、時代錯誤ではなく、ここではそれが当たり前なだけなのだろう。

彼らに共通するのは、少なくともこの場所に望んでいるのではないのであろうことだった。怯えと不安に彩られた表情を誰もが顔に貼り付けている。事情が全く分からない市之瀬にも、彼らがここへ避難か何かをしてきたのだと理解できる。追い詰められた者達が纏う一種異様な雰囲気ギリギリと肌に感じられた。

そして、そんな彼らは今、ある一点を凝視している。

他でもない、市之瀬を見ているのだ。

付け加えるなら、その視線に宿った感情は、お世辞にも好意的とは言えないものだった。

「信じられるか？　そ、空から降ってきたぞ？」

「な、何なんだあいつ……気味の悪い模様の服を着ているぞ」

「あれは乗り物なのか……？」

「て、帝国軍なのかしら？」

様々な負の感情が群衆の中に渦巻きながら、ざわざわと話し合っている。鉄で出来た乗り物が突然空から落下してきたかと思うと、その中から奇妙な緑色の服を着た少年が現れた。それは、市之瀬のいた世界の価値観でいえば、墜落してきたUFOから宇宙人が現れたくらいに衝撃的な光景に違いなかった。ただ、この世界の人々は、そういった時にどうすればいいか分かっていないだけなのだ。

市之瀬はその時、例えばような孤独感に襲われた。

まるで、子供の頃に知らない旅行先で迷子になった時のような、頼るべきものが全くない感覚だった。

詳しくは分からない。だが、一つだけ理解できた。ここは自分の知る？世界？ではないのだと。そして、目の前にいる人々も、自分のことを、それこそこの国の人間であるのかさえ知らないのだ。

今朝、艦内で噂されていたのは嘘ではなかった。今、自分は、？平行世界？へと迷い込んでいるのだった。

（マジかよ……！？）

全くお互いの事を知らない。それがここまで心細く、そして不安なことだとは思わなかった。

だが、今は一刻を争う。ヘリには重傷者がいるのだから。

気がおかしくなりそうだったが、彼はそれだけを精神の支えにして踏み止まる。

「あ、あの」

市之瀬は大勢の見ず知らずの人間に対してどうすれば良いか、しばし考えあぐねていたが、意を決して声を発した。

市之瀬の声に、群衆が「ひっ」と一步後退った。

「じ、自分は怪しい者じゃありません！　け、怪我してる仲間がいるんです！　こ、この中にお医者さんか何かいませんか！？」

彼は群衆を刺激しないように手には何も持たずに彼らに近づいた。警戒の色が濃い人々が、小さな悲鳴を上げて彼から距離を取ろうとする。

「あ、ちょ、ちょっと!？ 怖がらないでくださいよ!？」

彼も仲間の命がかかっているので必死だった。しかし、蜘蛛の子を散らすように彼らは逃げて行ってしまう。そんな中、誰かが叫んだ。

「兵隊だ！ 兵隊を呼べ！」

「きつとあいつも帝国兵に違いはないわ！」

市之瀬はとりあえず状況が悪化していることに焦る。

「ち、違うんですよ!？ ちょ、ちょっと話を……」

近くにいた女性を呼び止めようとするが、次の瞬間、彼は自分の喉に何かが突きつけられたのに息を飲んだ。

「動くな」

有無を言わさぬ冷徹な女の声が彼をその場に釘付けにした。

「ちょ、な、何すかこれ……?」

「動けば命はない」

目の前には、背の高い美女が立っていた。

サラサラの草色の髪をした、黒いコートのようなものを着た女だ。彼女は市之瀬の喉もとに槍を突きつけ、微動だにしない。その冷静そうな表情と合わさって、威厳のようなものが漂っていた。そうした雰囲気纏う人物は、そうはいない。市之瀬はすっかり気圧されてしまっていた。

その女の背後には、部下だろうか、軽装の鎧を身につけた兵士達が控えている。

それが、ラロナの身につけていた物と同じであると気付くほどの余裕は、彼にはなかった。

そして女……カルダは目の前にいる少年に対して、小さな警戒と大きな苛立ちを感じていた。

今は戦時だ。戦闘以外に手を割かれなかった。そう思ったの

も、この緑色や茶色の混じり合ったような奇妙な服を着た少年が、どう考えても軍人の類には思えなかったからだ。戦時であるというのに身を守るための武器も持たず、一般市民に対してヘラヘラとしていた。兵士にあるべき戦いを至上とする雰囲気は一切感じられないのだ。腑抜けていると言っても過言ではない。

「一度しか聞かない。いいな？」

カルダは手短に尋問することにした。

部下を更に半数は失ってこの城まで到達してきた。冷静な彼女でなければ、その苛立ちは間違いなく顔に出ていることだろう。

「は、はい……」

情けない声で少年が答える。

ふん、と鼻を鳴らして彼女はそれを嘲った。

「貴様は帝国兵か？」

「な、なんすか、それ？」

「……一度しか聞かんと言った」

彼女は槍の切っ先を少年の首に当たる程に突きつけた。

「ち、違う！ 違います！ マジで！」

必死になって少年は否定する。

だが、カルダにはそれについては聞かずとも分かっていた。周囲に理解させるために自白させたただけだ。

おそらく、この少年と、あそこに残骸を晒している見たこともない機械は、ラロナ練戦士から報告があつた国籍不明の船からやってきたものだろう。帝国兵とは思えないような腰抜け共だったという報告も正確なものだった。そして、事実、カルダも彼が帝国兵とは程遠い存在であることを一瞬で見抜いた。こんな腰抜けが相手ならマリースアは今ここまで苦戦などしていない。

ならば、とカルダは質問を考える。

「貴様は、一体どこからやってきた？ お前達は敵か、味方か？」

少年の表情が、何かを考えているかのような複雑なものになる。

「敵じゃないのは、確かだと思っくんすけど……」

「ならば、どこからやってきた？」

少年は押し黙る。

急ぐカルダは恫喝した。

「貴様は我が国の領土領海に不法侵入している。この場で処刑されても文句は言えんのだぞ？」

この腑抜けた少年の存在など取るに足りないものだが、あの鉄の塊に乗って空を飛んで来たというのは驚異と言う他ない。その正体と目的を知りたいと思うのは軍人として自然なことである。それに、この戦時下にとこの馬の骨とも知れぬ外国人を野放しにはできない。……多分、説明しても分かんないと思いますよ」

どこかひねくれた表情で彼は言った。貴族相手にそんな態度を取ること自体、不敬罪で処断理由になるが、カルダはそれは口にしないでおく。

「構わん。言ってみろ」

少年は、言葉を選んでいる様子だった。

そして、彼は決心したような表情を浮かべ、断言した。

「俺達は……別の世界からやってきたんだ」

第4章 異界の戦士

「私のミスだ……」

イージス護衛艦？いぶき？の艦橋で、司令官・蕪木は隣に加藤にだけ聞こえる声で言った。平静を装っているものの、その顔には深い苦悩が感じられた。

「……仕方ありません。誰にも予測できないことでした」

「日本及び近隣各国との通信は？」

加藤は諦観ともとれる表情で首を横に振った。

「そうか……」

それが意味することは、現在の緊急事態の全責任が彼の肩にのし掛かっていることを意味した。その上、事態は未だ進行中であり、こうしている今でさえ決断が迫られている。

国籍不明の都市で火の手が上がっている映像を最後に交信を途絶したヘリ、そして……

「あの巨大な正体不明の生物……」

ヘリに搭載されたカメラからは、最後の映像データが送られて来ていた。そこに写っていたのは、巨大な爬虫類を思わせる巨大で、そして禍々しい生物の姿だった。口を開いたかと思うと、何とそこから氷の弾丸を撃ち出し、おそらく、ヘリを撃墜した。

その姿は加藤にも見覚えがあつた。

SFやオカルトが趣味という彼が？変人？と呼ばれることに拍車をかけている趣味の中では、あまりにも有名な存在だ。

？竜？

それ以外の形容を彼は思いつかなかった。

映像を見た隊員の中には、あれが恐竜であると主張する者もいたが、そうではない。恐竜は騎士を乗せて空を飛ばないし、そして氷を打ち出したりもしない。

（……やはり、ここは？平行世界？我々の世界からは、誰一人足を踏み入れた者はいない、未知の世界）

加藤は、その思いを強くする。

（どうすれば良い……？あの街、見た限りでは戦場になっていた。我々は、この世界に介入すべきなのか？）

加藤は必死になって思考を巡らせた。

本来、交わるべきではない世界の存在が、異質な世界の情勢に関わる。それがどんな問題を引き起こすのか見当もつかなかった。

「あの人を乗せた鳥といい、この世界は一体どうなっている……？」

思案する加藤の隣で、蕪木は海の方こうを睨んだ。まるで、そこから新たな脅威がやってくるのではないかと恐れているかのように「司令、意見具申してよろしいでしょうか？」

主席参謀・加藤が、普段の適当そうな表情を一切浮かべず、主席参謀としての表情で尋ねた。

「何だ？」

「行方不明となったヘリ搭乗員の救出作戦を立てるべきです」

加藤が導き出した結論は、味方を救う事にまず全力を挙げるということだった。万が一、ヘリに生存者がいたなら、あの街の戦乱の中ではあまりにも危険だ。そして、もしも捕虜になったり殺害されたりした場合、ヘリに載せられた装備や武器などがこの世界に流出してしまう可能性も否定できない。この世界で波風を立てないようすべきだとしても、介入すべきにせよ、彼らを放っておくことだけは現状では得策ではなかった。

加藤の言葉に、蕪木は険しい表情を浮かべた。

その先の言葉を制するように言う。

「救助ヘリは出せない。また撃墜される危険がある」

「戦闘ヘリを護衛に付け、武器の使用許可を出せば……」

「いかん、それでは先制攻撃になる」

蕪木は自衛隊という組織の持つ決定的な問題に直面せざるをえなかった。

自衛隊が、いや、日本という国が守り続けてきた？専守防衛？という鉄則である。

海外派遣においては、国際法上も日本の法律上も、自分の仲間あるいは守護下にある者を守るための武器使用は認められている。だが、今のような敵味方の区別がつかない状況での武器使用は？現場の判断により適切に措置をとる？と区分される。言い換えれば？現場の責任？なのだ。

（……？平行世界？での戦闘規則など、あるわけがない）

蕪木は瞳を閉じて苦悩する。

日本との通信さえ途絶した今、この事態の全責任は彼にある。そして、どれか一つをとってみても、それは彼の肩には背負えぬほどに重い。

（？決して戦つてはいけない軍隊？……戦うことを前提としながら、その矛盾を内に秘め国土防衛の任を担う組織が、我々なのだ……）
「ですがこのままでは生存者を救えません！ 事態は一刻を争います！」

珍しく加藤が語気を荒げた。

この若き主席幕僚は、変人でキレ者で、そして部下を思いやる心に篤い。

蕪木にも、その感情は痛いほど理解できた。指揮官として、そして、海上自衛隊でも少なくなりつつある？海の男？としてだ。

「……腹を決めねばならんわけか」

定年の近い自分の首一つで足りるならいいが、と彼は内心で自嘲した。

今も昔も、時代に恵まれた者は英雄と呼ばれ、時代に翻弄された者は無能と呼ばれる。だが、その差は実は紙一重のものなのかもしれない。

……自分は後者なのだろうな。

蕪木は拳を握りしめ、ヘリの搭乗員名簿を確認した。
皆、若い。

『市之瀬竜治 二等陸士 一八歳』

この若者、いや、少年に至っては自分の娘と同じ年だ。

（救わねばならん。絶対に！）

蕪木は冷静さの中に一種の激情を潜ませ、決断した。するしか、なかった。

「はッ！」

カルダは怒りを通り越し、軽い笑い声を上げていた。

「別の世界から来ただと？」

舐めているのか、この小僧？

失言はまだ許せる。だが舐められるのは我慢がならない。それを捨て置いては貴族の誇りに関わる。

彼女はギツと目尻をつり上げた。

「……嘘はためにならんぞ。マリースア武人をあまり軽く見ないことだ」

「嘘じゃない！俺達は別の世界からこっちの世界に迷い込んで来たんだよ！」

「ならば何の目的でこの世界へ来た！？この戦時下で、どうしてこの城へ！？」

カルダは遂に激昂していた。

市之瀬もつい熱くなってしまう。

「こっちが聞きたいんだよそんなこと！戦争やってるって知ってれば偵察になんて……」

すっかり彼が口を滑らせた『偵察』という言葉に、彼女は即座に反応していた。

片手で構えていた槍を素早く回転させると、柄の部分で市之瀬の腹を強打する。

「あがつ！？」

突然の鈍痛に、言葉にならない呻きを漏らして彼はその場に崩れ落ちた。

「な、にを……？」

「貴様、やはり我が国に仇なす者だな？」

冷やかな目で彼女は腹を押さえて蹲る市之瀬を見下ろす。

「どこの国に雇われて偵察に来た？ 帝国でないならどこだ？ 隣国のエレエナか？」

勝手に何かを完結させてしまっている様子の彼女に、市之瀬は愕然とする。

（何言っているんだこの姉ちゃん！？ 頭おかしいんじゃないの！？）

エレエナはマリースアの隣国の一つだが、他国と異なり帝国の侵攻に対する軍事同盟に関して中立の立場を表明している国だった。彼女の中では、市之瀬は帝国以外の自国に対して好意的でない国の間諜ということになっていた。武人でない間諜であれば、この情けない性格も納得できるというものだ。カルダは、武人であるが故の頑迷さが強かった。

「吐け。今は悠長に尋問している時ではない。答えんのなら死んでもらう」

カルダは今度は両手で槍を構えた。

市之瀬は、目の前に立つ女が、恐ろしく自分とは思考回路が異なり、しかも暴力を厭わない性格をしていることに戦慄した。今まで生きてきて、ここまで躊躇なく暴力を初対面の人間に振るう者がいただろうか。武人だとか、無茶苦茶な自称を使うのも悪い冗談に聞こえる。

だが、それが冗談ではないのは、この状況から考えれば自明のことだった。

「嘘だろ……」

ガタガタと恐怖の余り歯が鳴り始める。

（ヤバイ。この人目がマジだ）

彼は焦った。この女ならやりかねない。そんな不気味な説得力が感じられた。

死ぬ。殺される。

どうする？ どうすればいい！？

市之瀬は自分が処刑されかかっていることに、必死になって思考を巡らせた。

ここでこのまま殺されてしまうのか？

美奈を置いて？

彼の脳裏に、家族の顔が過ぎる。

……そんなの、ぜってえダメだ！

彼は生き残るための方法を考えた。

（そうだ！？ レッグホルスターの拳銃……）

そこで彼はある事を思い出した。今、手に武器こそ持っていないが自分は完全な丸腰というわけではない。右脚にくくりつけてあるホルスターには、実弾を装填した9？拳銃が収まっている。言うまでもなく、これは護身用の武器である。今使わなければ、いつ使うというのか？

それは恐ろしい選択に思えた。しかし、このまま死ぬわけにはいかない。

妹を……美奈を残して、死んでたまるか！

そうだ、自分は生きて帰らなくてはならない。家族のため……美奈のために。

たった一人の兄妹。美奈。

数年前に父を亡くした今、母親と美奈を守ってやれるのは自分しかない。美奈には、高校にちゃんと通わせてやりたい。自衛隊に入隊したのも、そして今回、海外派遣に志願したのも、妹の将来の学費を稼いでやりたい一心からだ。美奈は賢い。将来の道を少しでも明るくしてやりたかったのだ。

……生きて帰るためなら、美奈のためなら、俺はっ！

彼がそう決心を固めた瞬間だった。

「戦士団長、待ってください！」

唐突に、少女の声が降ってきた。

そして、目の前に誰かが飛び降りてくる。

一瞬置いて頭上をあの大鳥が飛んでいった。あれから飛び降りてきたらしい。

「ラロナ練戦士……！？」

目の前に立ち塞がった人物が、自身の部下であったのに、彼女は驚きを隠せなかった。

ラロナは、よほど急いでいたのか、荒い息をつきながら、上官を前にしていた。

「……無事なのは良かった。御苦労。そこを退け、邪魔だ」

カルダは部下の一人の生還に少しだけ表情を和らげたが、すぐに険しい顔つきに変わる。

そして、市之瀬はその少女の姿をただ見つめるしかない。

自分に背を向ける小柄な少女。紅い、燃えるようなショートカット。

「ら、ラロナ……？」

市之瀬が信じられない表情で彼女を凝視した。

「彼は、敵じゃありません！ 帝国軍の竜騎士に攻撃されるのを空で目撃したんです！」

ラロナはまるで市之瀬を庇うかのように上官に意見していた。

彼女は振り返らずに、市之瀬に確認した。

「そうだよな？ イチノセ」

「え……」

名前を呼ばれた。

自分が彼女を覚えていたように、彼女もまた自分の名を忘れてはいなかった。

安堵感。

この完全な孤独の中で、彼女は自分のことを名前だけでも知ってくれていた。

それが、こんなにも嬉しいとは思わなかった。

「エレエナないしは帝国同盟国の密偵の疑いがある。この男、我が国を偵察に来たと言った」

市之瀬が叫んだ。

「しょうがねえじゃねえか！ 違う世界から来て何も知らなかったんだ！」

「違う、世界から……！？」

ラロナが驚きの表情を浮かべて振り返る。

そこには、見たこともない服を着た、あの少年がいる。違う世界。

人魚の海から現れた、あの巨大な船団を直接その目で見たラロナには、その言葉は何よりも説得力のある説明に聞こえた。

あの船は、そしてこの少年は、全てがこの世界から断絶した世界でなくては存在しない。そんな確信のようなものが彼女にはあった。「そんな子供じみた言い訳が通るか！」

カルダが鋭く一喝する。

市之瀬はその迫力に何も言い返せない。最早話が通じないのではないかと思えた。

しかし

「……彼が言っていること、本当だと思います」

少女の声が、市之瀬の耳に入る。

「何？」

ラロナが呟いた言葉に、カルダの目がすつと細まった。

貴族である自分の判断が誤っている、と？

片眼鏡の奥の瞳がそう語っていた。

「私は、見ました。人魚の海からやってきたあれは幻なんかじゃない……その証明に、彼と、あの空飛ぶ機械があります」

ラロナはその目に一切怯まず、自身の考えを答える。

「その男と面識があるのか？」

「はい。甲板で尋問したのが、彼です。ですが、彼も、その仲間も、

私に危害を加えようとは最後までしませんでした。もし密偵なら、あそこで私を無事で帰すでしょうか？」

カルダの顔に戸惑いの色が滲み出た。

彼女は頑迷だが無能ではなかった。指揮官として、部下を適性に評価している。そして、ラロナ練戦士は、勇猛果敢で直情的な面はあるものの、概して模範的な兵士といって差し支えない人物だった。その彼女が、そこまで言うのを一蹴するのは難しい。

「……その報告、確かなんだな？」

「はい」

ラロナは真つ直ぐに上官を見据え、断言していた。

奇妙な静寂が一瞬、訪れる。

（ラロナ、俺のことかばってくれてるのか……？）

市之瀬は呆然とそのやりとりを眺めていた。ほんの少しの間、話したことがあるだけの少女が、どうやらかなりの無理をして自分のために努力してくれている。それだけは理解できた。

そして、ややあつてカルダが構えていた槍を静かに降ろし、地面に立てて仁王立ちになった。

「イチノセ、と言ったか？」

「え？ あ、はい」

突然の質問に、彼は思わず間抜けな答え方をしていた。てつきり、ラロナとまだ話し合うのかと思っていた。

「所属を、聞いていなかった。どこの国に属する者が、改めて問おう」

それなら、はつきりしている。

市之瀬は、このわけの分からない状況で、数少ない確かに自信を持つて言えることを答えていた。

「日本国、陸上自衛隊所属、二等陸士・市之瀬竜治」

不思議だった。

組織に組み込まれた自分の名前を口にした時、何の変哲もない自分の名前が随分と存在感あるものと思えた。きつと、自分の名前だ

けを間抜けな自己紹介のように口にしても、こうは締まらない。
そして……

（ああ、家族のためだって思って入隊したけど……）

彼はこの状況下で、不意にちよつとだけ目頭が熱くなった。

（俺も、なんだかんだで苦労してきたよな）

さらりと自分の所属と階級を言えるような立場に自分はなっていた。ほんの半年前まで、何一つ責任もなく、同時に何一つできなかった高校生の自分が、嘘のようだった。教育隊でシゴキ倒された日々が思い出される。あの時は、何で自分はこんな辛い思いをしなればならないのだと内心ボヤいてばかりだった。

だが、それはこうして胸を張って誰かに自分の所属を口にできるようにするためだったと、今なら理解できた。

それがカルダにも伝わったのか、彼女は笑わなかった。

「そう、か」

短く、そう呟く。

そして、小首を傾げて尋ねた。

「ニホンの……そのリクジョウジエータイというのは、軍隊か？」

「え、えーと……厳密には違うことになってるんすけど、まあ、軍隊なのかな？」

「ならば、お前は軍人か？」

「え？ そ、それは、その……」

市之瀬は返答に困った。

不審な態度を取ることが命取りだと分かっているはずなのに、つい首を傾げてしまう。

「それとはちよつと、違うような……」

自衛官自身、自衛隊を軍隊ではないと本気で思っているわけではない。しかし、では冗談ではなく、真顔で自分達が？軍人？であるかと誰かに問われれば、それはどこか違うとを感じるものなのだ。軍人という単語を素直に受け入れられないのは、やはり自衛隊はどこかで軍隊とは違ってにいるからなのかもしれない。

歩兵を『普通科』、砲兵を『特科』等と軍隊を連想させる単語から変更し、陸軍二等兵を『二等陸士』、将校を『幹部』と呼ぶ組織創設から五十年以上の間にすっかり定着したその独特の文化は、例え内容が軍隊そのものであっても、誰かから「軍人」と大真面目に呼ばれるのには違和感があるのだ。

そんな世界でも例を見ない特殊で微妙な事情など知る由もないカルダに、彼の曖昧な返事はどう受け取られるだろうか。

市之瀬はヒヤヒヤとしながら相手の反応を待った。

「では、お前には……」

カルダは、質問というより、何かを見透かそうとしているかのよう言葉が続けた。

「守るべきものは、あるのか？」

「それは、ある！」

ほとんど即答だった。

それがなく自衛隊になど、いない。

市之瀬にとって、それこそが全てだ。

彼は高校生だった頃に自衛隊員になろうと思った理由を思い出す。市之瀬には高校生になる妹がいた。母子家庭で、母も病気がちだった彼は、自分のことに一切金のかからない自衛隊に入ることでの計を助けようとした。海外派遣に志願したのもそのためだ。

自分と違って賢い妹は成績も良く、将来は大学で勉強したいと夢を持っていた。兄として、その夢を叶えてやりたかった。

美奈……兄ちゃん、絶対生きて帰るから……

市之瀬は自分が高校を卒業し、入隊するのと入れ替わりに入学した妹の顔を思い浮かべ、そう強く誓った。

そうだ、こんな所でくたばってたまるかよ！

キツと彼はカルダを見つめた。

カルダは彼の茶色い瞳の奥にあるものを見据える。

「……お前のその取り繕うことのない様子が、逆に真実やもしれんな」

ふう、とカルダは肩の力を抜いた。

「分かった、敵ではない。それで、我らの助けが必要か？」

彼女にしては珍しく、半ば冗談でそう言っていた。

誰かを助けていられる程、今の状況は甘くない。助けて欲しいのはこちらの方だ。

だが、貴族として、こうした虚勢は必要なものだった。

「ヘリに負傷者がいるんだ！ 助けてください！」

市之瀬は必死になって懇願していた。

カルダは頷くと、所在なざげにしている兵士らに向かって呼びかけた。

「この中に治癒魔法を使える方は？」

「私が！」

「頼む」

兵士の中で武器を持っていない一人が立ち上がると、担架の元へ駆け寄った。

見ると、とてもではないが医者には見えない、さらさらの長く、深い海色の髪をした少女だ。

しかも、このカルダとかいう女は？魔法？ と言った。

どこをどうツツこめばいいんだと空を仰いでいると、ラロナが安心させるように話しかける。

「大丈夫だよ。彼女は光母教神官戦士だ。腕は確かだよ」

「あのなあ！ ふざけてる場合じゃ……」

その時、跪いた少女の手元がほかに輝いた。

そつと目を閉じ、集中した表情で彼女は負傷者の傷口に手をかざしていく。

市之瀬は目の前で起こっていることをまたもや呆然と見つめることになる。

少女の手をかざした後の傷口は、明らかに治癒の痕跡が見えたからだ。

市之瀬は夢でも見ているような気持ちでそれを見届けるしかない。

やがて、少女が額の汗を拭ってこちらを向いた。

「……一命は取り留めましたが、血を失い過ぎています。内臓までは自分一人では治せません」

「まずいな……」

カルダの表情が曇る。

市之瀬は目の前で起こった？奇蹟？に言葉を失っていたが、慌てて二人の会話に割って入った。頭がおかしくなりそうだったが、今はとにかく人命がかかっている。考えるのは後回しだ。

「じゃ、じゃあ早く船に戻して医務官に診せないと！」

「あの巨大な鉄船に？そこへ運べば助かるのか？」

「ああ！でもここまで救助が来るまで往復分の時間が……」

「……よし、分かった。ラロナ練戦士」

「はい！」

テール、と叫んでラロナが口笛を吹いた。

あの巨大な鳥がこちらへのそのそとやってくる。

「彼女の鳥に乗せて行こう。鉄船の大体の位置は分かるか？」

カルダが彼にそう尋ねる。

一瞬何の意味が分からなかったが、この鳥に乗せてこちらから搬送しに行けば、ヘリで往復するよりはいくらか早く着くはずだと思に至る。

市之瀬もすぐに彼女の意図を理解し、大きく頷いた。渡りに船だ。

「ああ、そうしよう！片道ならきつと間に合う！」

市之瀬の表情にようやく希望の光が見える。

早速、負傷者を鳥の背中に乗せる作業にかかることにする。

念のため、手短に今までであったことを紙に書いて乗せておく。少しでも早く残された自分たちに救出が来ることを願ってのことだ。

「……な、なあ」

報告の文章を書きながら、市之瀬がラロナに尋ねる。

ようやく混乱が一段落し、心に少しでも余裕が出たための言葉だった。

「何だ？」

担架をベルトでしっかりと固定する作業の手を休めず、ラロナが応じる。

「さっきは、ありがとうな……かばってくれて」

ラロナは首を横に振った。

「気にするな、困った時はお互い様だ」

この非常事態にあつて、そんなことが言える彼女を市之瀬は素直に凄いと思った。

そして、いまいち状況が飲み込めていないので、彼女に確認してみる。

「ラロナたちがヘリを落としたんじゃないんだよね？」

「へ……り？」

「ああ、えーと、俺が乗ってきたあの空を飛ぶ機械だよ」

「鉄の塊が空を飛んでいたなんて信じられない気持ちだけど……とりあえず違う。そうか、今この街がどうなっているのか知らないんだっただな？」

「……そうだよ。一体何が起きたってんだ？ 空からは煙みたいなのがあちこちで見えたけど」

「戦だよ」

「え？」

「手短に説明すると、今、アタシの国は敵国に攻め込まれてる。お前たちを攻撃したのは奴ら帝国軍だ」

「お、おいおい……」

市之瀬は思わずラロナに詰め寄った。

まだはつきりと今置かれた状況を理解できた訳ではないが、紛争に巻き込まれる形になっているらしいことは分かった。

そしてやはり、ここは自分が今までいた世界とは違う別世界。

初めて見た人魚もきつと見間違いなどではない。巨大な鳥も、目の前に立っているラロナも、死んだパイロットも……全て、現実。ぐるぐると乗り物酔いになったような感覚が身体全体を覆った。

……冗談じゃねえよ！

「それやべえじゃねえか、早くここから逃げないと！」

薄ら寒い不安感に苛まれ、市之瀬は身震いした。

だが、そんな彼女を彼女はきつと睨むように直視した。

「アタシは戦う。故郷を守るために」

市之瀬は息を飲んだ。

……また、あの目だ。

何も言えなくなるくらいに、真っ直ぐで純粋な瞳。

彼女は本気なのだ。

戦士、という冗談みたいな言葉が、ずしりと重く彼の心に響いた。

「な、なんだよ。そんな怒んなくていいじゃんか……」

思わず目を逸らしてしまう。

次の瞬間、テールと呼ばれた巨鳥が羽ばたく。

負傷者を乗せていることを気遣ってか、滑走の足取りは丁寧だ。

市之瀬が思っていたよりもずっと頭が良い。

グライダーのように風に乗ると、身体が滑らかに宙に浮き、市之瀬の視界から遠ざかっていった。ラロナが暫くの間、自分が乗っていない鳥の背中を寂しげに見送る。

「……ここも戦場になる。お前は どうする？」

鳥がいなくなったからか、若干トーンダウンした口調だった。

「一体どこにいりゃ、安全なんだ？」

市之瀬が怪訝な表情で聞くが、彼女は空を見上げて微動だにしない。

「お、おい？」

「……いけない、見つかった！」

「へ？ 見つかったって誰に……」

「来いっ！」

「わっ！？ 何すんだよ！」

近くの植木の合間に引きずり倒される。

「……いってえ」

「静かにっ！」

市之瀬は耳元で緊迫した口調のラロナの声を聞き、思わず彼女の顔を凝視した。

彼女は頬に緊張の余りか幾筋もの汗を伝わせていた。

「え……？」

彼はラロナの視線の先を見やった。

その時だった。

悲鳴が彼の耳に飛び込んできた。それも一人や二人のものではない。

それは大勢の断末魔の叫びだった。

「くっ！？ もはやこんな所まで飛んで来たか！ 退け！ 退くん
だ！ 市民を奥へ逃がせ！」

カルダが必死になって指揮を執っている。

その表情には、気丈な彼女でさえも恐怖の色が隠せていなかった。
そして、そのパニックの中から一つだけ場違いな喜びの声も聞こえてくる。

「くっはははあ！ 弱い！ 弱いなあー！」

市之瀬は植木の中から？それ？を見た。

「ド……ラゴン？」

自分の口から自然とこぼれ出た単語が、自分で信じられなかった。
そこにいたのは黒色の生物。それも、心理的な威圧感を除いても
巨大であることが分かる生命体だった。

市之瀬はその容姿に漠然とだが見覚えがあった。

そう、よくロールプレイングゲームなどに登場するボスキャラだ。

「嘘だ……こんなバカなことがあるかよ？」

当然だった。竜なんて架空の生き物だ。実在するはずがない。

しかし、市之瀬の網膜にははっきりとその存在が何をしているかが
焼き付いた。

「焼き払えい！」

竜の背に乗る漆黒の甲冑を着込んだ男が命令する。

何を考えているのか分からない不気味な眼孔で逃げ惑う人々を見下ろし、黒い竜は大きく口を開けた。

紅蓮の炎と、断末魔。

市之瀬はさつきまで側にいた一般市民達が絶叫しながら消し炭になるのを目撃した。

「うつつ……!？」

咄嗟に目を背ける。

（死んだ！？ 人が、人が！？ こ、こんな簡単に！？ そんなに
ありかよ！？）

手が震えている。いや、手だけではない、身体全体が震えていた。恐怖以外にも、今目の前で起きたことが彼の理解の範疇を超えていたのだ。

ゲームにはない生々しさと、ゲームではあり得ない唐突さで人が焼け死んだ。そのことを現実として受け入れられないのだ。

「きやああ！」

息を潜め、身体を震わせていた市之瀬の意識を一気に引き戻したのは、少女の悲鳴だった。

恐る恐る再び視線を戻すと、そこにはさつき負傷した二人に？ 治療魔法？ とかいうのをかけてくれた蒼い髪をした女の子だ。

彼女は味方が全滅し、最後の一人となって追い詰められていた。

「んうー？ 一人焼き漏らしたか？」

その場の全てを支配している優越感からだろうか、漆黒の甲冑を着込んだ男はくつくつと笑い、手綱を少女の方へ向かわせた。

「ああ……か、神よ……」

少女はぐつと首から提げたペンダントのようなものを握りしめている。

（や、止めてくれよ……）

市之瀬が心の中で祈る。

まるで覚めることのない悪夢の中で、必死になって懇願する気分だった。

「ふん、手間のかかる。小娘一匹にファイアブレスはもったいないな……」

男の声が微かに市之瀬にも聞こえた。

「喜べ、楽に死ねるぞ」

そして、男は傍らから背丈以上はある槍を手にとった。

それから先、男が何をするのかくらい、市之瀬にも分かった。

あの少女が血溜まりに沈む光景が一瞬脳裏をかすめる。

「やめろおおおーっ！」

裏返しそうな声で、市之瀬は絶叫し、植木の中から飛び出していった。

「バ、バカっ！？ 何してるんだ！」

背後でラロナが驚きの声を上げるのが聞こえたが、市之瀬は止まらなかった。

正義感や、使命感といった感覚など、彼は微塵も意識していなかった。ただ一つ、目の前で起こる？ 理不尽？ に我慢ができないという思いに突き動かされていた。

自分の理解を超える行いを、これ以上許容できない。そんな感覚が心を占めていた。

「む？」

男がこちらに気づく。

市之瀬は少女に向かって全力疾走しながら、腰の雑嚢をまさぐった。

いくら我を忘れているからといって、あの怪物を倒せる武器を自分が持つていないのは分かり切っている。しかし、彼は狙撃兵という孤独で脆弱な特性故か、圧倒的な敵を翻弄する術はよく知っていた。

「状況、煙幕っ！」

間抜けにも訓練手順を復唱し、彼はありったけの煙幕手榴弾の安全ピンを引き抜くと、立て続けに投げつけていた。

軽い破裂音と共に、瞬く間にカラフルな赤や緑といった煙が広範

囲に充満する。

煙幕は味方へりにこちらの居場所を伝えたりする使い道もある。救助へりが来ることも考えて、かき集めていたのが幸いした。

「ぬおおっ！？ な、何だこれは！」

想像していたよりも怪物とその御者の男は狼狽を見せた。

その巨大な翼を羽ばたかせ、煙を晴らすうとしているが、手榴弾の薬剤が反応を続ける効果時間中は次々と煙が噴出するので、返って煙にまかれる結果となっている。

これならおそらくこちらの姿は見えていないだろう。

市之瀬はすかさず少女に駆け寄ると、そのか細い手を取った。

「さあ、こっちだ！」

「え？ はい」

少女はほとんど為すがままに彼に手を引かれていく。

「イチノセ！」

「ああラロナ、この子を頼む！」

市之瀬は後を追ってきたラロナに彼女を託した。

そして、彼はへりの残骸へと駆ける。

「ちよつとイチノセ、今は逃げなきゃ……」

「無理だ！ こんな開けた場所じゃ追いつかれる！ だから……」

「だから何！？」

「奴をぶっ倒す！」

市之瀬の言葉に、ラロナは絶句した。

「倒す……？ 竜相手に？ たった一人で？」

彼女は目の前の少年が口走ったことを理解するのに時間がかかったのか、ややあつて我に返って叫ぶ。

「そんな無茶な！ ドラゴンクラスにこの人数で勝てるわけが……」
ラロナの声を背後に浴びせられながらも、市之瀬は機内へ駆け込み、？ 非常用？ と久世に厳命されたケースをひっくり返った荷物の中から取り出した。

ケースには『火気厳禁 実弾』とペイントされている。ずしりと

重い。

パチパチとケースを開ける。

そこには黒光りを放つ物体が収まっていた。

「イチノセっ！」

ラロナの悲鳴じみた声が聞こえた。

「おのれ小娘どもが！ 黒竜騎士団をコケにしてくれおつて！」

煙幕の効果時間が切れ、怪物はその不気味な眼孔を今度はこちらへはつきりと向けていた。

「……焼き尽くしてくれるわ」

甲冑の男は聞くだけで身がすぐむような声で言った。

「あ……あ……」

ラロナがドラゴンに睨み付けられ、まるで飢えた猛獣を前にした小動物のようになる。

がくがくと足が震え、地面にへたり込みそうになっている。

そこへ、彼の声が響いた。

「や、やれるもんならやってみるよ！」

ヘリの残骸の中から、彼は？それ？を担いで現れた。

甲冑の男が、怪訝そうに声を発した。

「……小僧、なんだそれは？」

「今退けば助かるぞ！」

「なっ！？」

甲冑の男だけでない、ラロナや少女までもが耳を疑ったようだ。

しかし市之瀬は本気だった。

「警告はしたからな！ これ以上やるんなら正当防衛成立だぞ！

分かってんのか！？」

今度は減給なんかじゃ済まないだろうな畜生！

市之瀬はヤケになってそう思うが、もう遅い。どこで何を間違えてこうなっているのかさえ分からなかった。

「くははっ！」

男が笑う。

その場は驚くほどの静寂に支配されているからか、その声は特に通って聞こえた。

市之瀬にはたまらなく不気味だった。

人の死体があちこちに散在している中で、笑うことができるというこの男の神経が。

そして、次の瞬間、突然冷静な声で言い放った。

「小僧、貴様は万死に値する」

手綱を引き、声を張り上げる。

「焼き尽くせつ！」

竜が口を開け、何かをチャージするような行動に出た。

それを前にして、市之瀬は反射的に絶叫していた。

「バカ野郎おおおおっ！」

市之瀬は発射レバーを引き絞っていた。

刹那、目の前は噴射煙で遮られ、それと同時に起こった閃光と爆風に、市之瀬はそのまま地面にひっくり返った。

落雷の直撃のように鳴り響く轟音。

激しい衝撃波を受け、一瞬気を失いそうになる。

「くっ……！」

爆音によるツンとした耳鳴りの中、パラパラと巻き上げられた土が降ってくる。

市之瀬は担いでいたものを投げ捨て、煤だらけの顔で何とか立ち上がった。

「うわ……」

目の前にあったものは、さっきまで竜だった存在。しかし、今はどちらかというと、肉塊に近い代物だった。

一撃で戦車を撃破可能な84？むはんとつぽう携帯無反動砲の対戦車砲弾を至近距離で受けたのだ、無理もないことだった。

市之瀬はちらりと足下に転がる携帯無反動砲を見やった。見た目はいわゆる？バズーカ砲？によく似ている。

こんなものをへりに積み込んでいたのは、いわゆる踏み込んだ抑

止力、つまり威力を見せつけるなどの？威嚇？のためである。本来なら目標へ向かって撃ち込むことはしない。

だが、この？お飾り？のお陰でなんとか助かった。

（そういえば俺、これの実弾撃ったことなかったんだっけか……）

ふう、と深呼吸する。

肉の焼ける臭いにむせそうになった。

「うぶ……」

それに、怪物とはいえこんな死に方をした生き物を直視はしたくない。

何より、市之瀬には重大な事実直面せねばならなかった。

「人を……殺したけど……」

市之瀬は安堵感と罪悪感を同時に抱き、整理のつけようのない感情をもてあました。

「仕方ねえじゃんか！ こっちだって死ぬとこだったんだ！」

ヘリの残骸を思い切り蹴飛ばす。

「ああ畜生、痛え！」

泣きそうだった。

痛いからではない。自衛隊に入って、こんなことになるなど予想できなかったことが悔しかった。まるで詐欺に遭った気分だ。

自衛隊が武装組織であることくらいはバカでも分かる。しかし、自衛官自身、その手にする武器で誰かを殺傷するということを明確に自覚はしていない。

日々の業務としての戦闘訓練はあっても、それが誰かの生身を切り裂き、血を流させるイメージには直結しないのだ。訓練は訓練であり、書類上の想定域を出ることはない。実弾の向かう先には木製が紙製の点数表示のついた標的があるに過ぎない。今回の海外派遣でも、市之瀬たち末端の隊員はアメリカ軍の後方で突っ立っているだけでいい、という感覚がどこかにあったくらいだ。

それが、戦後半世紀以上もの間？戦争？を経験しなかった国の？軍隊ではない軍隊？の兵士の現実だった。

「けほっ！ けほっ！」

「ラロナ……」

粉塵の中から二人が起き上がってくる。

よろめきながらも、市之瀬は手を差し出した。

ラロナがその手を取る。

温かい。

生きた人間の手に違いなかった。ただそれだけなのに、市之瀬にはそれがたまらなく儚く、得難いもののように感じられた。

「大丈夫か？」

「あ、ああ…… なんとか」

「わ、私も」

二人とも埃だらけでひどい有様だが、不幸中の幸い外傷はなさそうだ。

緊急避難とはいえ、この二人の命を救うことになったのだ。少しだけ、許されたような気がした。

そしてまた、訳もなく泣きたくなった。

どっと疲労感が襲ってくる。彼はヘリのドアに腰掛け、腰から水筒を取り出した。喉を潤し、ブッシュハットを目尻が見えないように目深に被った。

そこへ、呆然とした表情のカルダがやってくる。

「……なんすか？」

市之瀬が面倒臭そうな目を向けると、彼女は唇を震わせながらこう呟いた。

「これが…… 異界の戦士の、力なのか？」

第5章 戦火の中へ

「久世三尉、痛みますか？」

市之瀬はヘリの残骸の日陰で上官の手当にあたっていた。

この世界、というよりこの国は暑い。日なたに長時間いると熱中症になりそうだった。市之瀬は腰の水筒からたまらず水を飲み干す。王が鎮座する城が建てられるだけあつてか、涼しげな潮風が絶えないのが救いだ。

「いや、大丈夫だ」

意識を取り戻した久世は、頭に湿布を貼り付けて包帯を巻き、ヘリのサイドドアの縁に座って市之瀬の報告を聞き終えた。頭はまだ痛むが、幸い脳に後遺症などがあるようなものではなさそうだ。

「そう、か……機長が」

彼は沈痛な面持ちで呟いた。

そして、ため息をついて辺りを見渡す。

周囲は、あの竜の出現により人気はなくなっていた。避難民はより奥の城塞に逃げ込んだようだ。

無反動砲の対戦車砲弾で撃破された竜の死体と、運ぶ余裕さえなく打ち棄てられている気の毒な一般市民達の遺体が不気味な空気を漂わせていた。

そして、遠くからは軍勢同士がぶつかり合う戦場の音が聞こえてくる。おそらく、この城の城壁付近にまで帝国軍は迫ってきたのだろう。

この城はどうやら二重の防護壁を備えているらしく、正門のある第一の城壁が突破されるのを見越して、市民を逃がした奥の第二の防護壁へと守備兵力を移しているようだった。

久世は都市ごと包囲されて援軍を望めないこの戦況を知り、それはただの延命措置でしかないと思った。籠城という戦法は守る側に有利とはいえ、援軍がないということは戦況が好転しないということ

とだ。つまり、遅かれ早かれ、この城は落ちる。

「すみません……私の魔力と技量では蘇生魔法までは無理なんです……」

久世の思案顔を見て、しゅん、と肩を落とした少女が申し訳なさそうに呟いた。

サラサラの海色の髪が風に揺れている。

久世は部下から報告を受けた、『魔法使い』の少女に慌てて言った。

「あ、い、いや君のことを責めたんじゃないんですよ」

重傷ではないとはいえ、気絶するほどの頭の打撲を受けてここまですぐで元気でいられるのは、実は彼女が治癒魔法を久世にかけたからだった。

最初は久世も信じられなかった。だが彼女を救った時に負ったという市之瀬の擦り傷を、その魔法であつという間に治してしまったのを見て認識を改めた。

とはいえ、柔軟な適応力を持った久世だが、混乱していないという嘘になる。心のどこかで、自分は頭を打ったせいで幻覚を見ているのではないかという可能性も疑っているのだった。

が、目の前の現実そのものの少女は寂しげに呟いた。

「いいんです……私には、もう治癒魔法担当の神官戦士としての部隊もあります。おめおめと一人生き残ってしまいました」

彼女は一見すると神に仕える聖職者のようだったが、その中でも武装して教会を守る職務に当たる者のようだ。そのため、簡単ではあるが白と紺を基調とした僧衣の上に簡単な胸当てを身につけ、腰には護身用に片手剣を帯びている。

「生きてることの何が悪いんだよ」

水筒を腰に戻しながら、市之瀬が複雑な表情で彼女に言った。

自分は死にたくない。自分が死ねば、家族が悲しむ。だから生きていることは重要だし、生きていることはそれだけで誰かの幸せだ。特に、家族を元の世界に残す彼にとっては。

そんな彼の言葉に少女がはつとする。

自分が目の前の少年に命を救われたことを思い出したのだ。

「す、すみません！ 貴方を侮辱するつもりはなかったんです！」

「あ、いや別に恩着せるつもりで言っちゃんないけどさ」

「ああ、私なんてことを…… 武人としてあるまじき言動でした」

おろおろと些細なことで狼狽する少女は、市之瀬の目から見ても武人という柄ではなかった。たれ気味の目元といい、どこかおっとりとした印象が強い。治癒担当というのも頷けた。

（……これが本当の『癒し系美少女』）

そんなくだらないことを一瞬考えてしまうが、彼女は真剣に悩んでいるようなので慌てて打ち消す。

市之瀬に代わって頭を押さえた久世が言う。

「そう思うなら、生き残ったことを恥だと思っちゃんいけませんよ。」

えーと、名前は……？」

少女はそつと上目遣いで二人の自衛官を見つめた。

「リュミ、と申します」

「俺は市之瀬」

「久世だ。リュミさん、怪我を治してくれてありがとう。何とお礼を言ったらいいか」

久世も、市之瀬も心から少女に対して礼を言っていた。

見ず知らずの人間に、戦時下でここまで奉仕してくれているのだ。礼を言って言い足りない。

リュミはそんな二人をじつと見つめる。

（……とても、誠実そうな方々）

竜を相手に死闘を演じ、人の命を救ったというのに、彼らは恐ろしい程に謙虚である。

彼女には彼らが別の世界からやってきたということは、いまいちよく分からなかった。よく分からないというのは、実感として理解できないからかもしれない。目の前の二人があまりにも人間臭いからかもしれない。超然とした勇者でも、人知を超えた怪物でも

ない。その反面で、たった一撃で竜を打ち倒す力を持つ……

全てが不釣り合いなのだった。力と人格が一定の比例関係を持つこの世界と、科学力によって戦闘能力を補う現代世界ではそうしたことは珍しくはない。

リュミは、二人を計りかねていた。

しかし、少なくとも、悪人でないことだけは確かなのは分かる。ならば、と彼女は意を決した。

「……そう、思われるのでしたら」

ぐつと勇気を振り絞り、真剣な表情で彼女は言った。

「ん？」

「失礼を承知で、一つ、頼んでもよろしいでしょうか……？」

そうだ、もう彼らしいくない。

異世界から来た戦士達という、不確定要素に賭けるしかないのだ。恐れてはいけない。

「自分らにできることなら、なんなりと」

久世は軽い気持ちで応じていた。

ラロナと同じ年頃の少女が、無茶なことはまさか口にしないだろうと見くびっていた。だが、リュミは真剣そのものの口調で願いを口にした。

「この国を、救っていただきたいのです」

リュミの言葉に、二人の自衛官はぎょつとした顔になる。

神に仕える少女は畳み掛ける。

「これはきつと神のお導きなのです！ イチノセ様は私たちのことを命をかけて守ってくださいました！ 私の信仰は間違っではないなかつたのです！ 貴方たちはきつと……この国の、いえ……」

彼女は市之瀬の手を力強く両手で包み込んだ。

華奢な少女の指だったが、驚くほどに力強かった。いや、そう感じられるだけの彼女の意思の強さがそう感じさせているのかもしれない。

彼女は、彼の目を真っ直ぐと見つめた。

そして、断言する。

「この世界の……希望なのです」

「え……ああ、その……」

ごくり、と市之瀬がその恐ろしい程に澄み切った瞳に気圧される。普通なら過剰防衛と問題になりそうな重火器の使用が原因で、こんな状況に陥るとは予想外過ぎた。

と

「尼ちゃん。それくらいにしときなよ」

快活な少女の声がその場の空気を変えた。

「ら、ラロナ？」

市之瀬が気の抜けた声を上げながら振り返る。

「ほらよ、酒と食い物だ。腹減っただろ？」

紅い髪の少女はニツと白い歯を見せると、麻袋を放り投げて寄越した。中には干し肉と葡萄酒の入った革袋があった。

久世が尋ねる。

「いいんですか？ 籠城してるなら食糧は貴重でしょう？」

ラロナは苦笑いする。

「持久戦になるほど残存兵力もないらしいからな。女王陛下が士気を高めるために食料庫は開けっ放しにしてるんだ」

そう言い、彼女はどつかとヘリの残骸の日陰に入ると、自分の分の食糧を広げてむしゃむしゃと食べ始める。

「うんめー朝からはんもくっへなかつたらん！」

リュミは、真剣な表情を崩さずに戦士の少女を睨んだ。

「……このまま、仲間の仇も討てないまま終わっていいのですか？」
この温厚そうな少女のどこにそんな闇が潜んでいたのかという低い声だった。

いや、潜んでいたのではない。この戦争で、仲間を全て失ったついさつき、その闇は生まれたのだ。

ラロナは本人は自覚していない復讐の色が宿るリュミの瞳を見つめ返す。

「ごくん、と口の中のものを飲み込んでから、世間話のように答えた。」

「イチノセ達は、この世界にわけも分からずに漂流してきただけなんだ。それなのに、アタシ達を命をかけて守ってくれた。信じられるか？ 黒竜相手にだぜ。それだけでも勲章ものの働きだよ。だから……」

ぐい、と酒を喉に流し込み、口元を拭ってから続ける。

「もう十分なんだよ。無関係なこの国のことなんか忘れて、もう元の世界に戻るべきなんだ」

短い食事を終え、彼女はさっさと立ち上がった。

リユミは自分が復讐を望んでいたことに気付き、目を見開いたまま頂垂れた。

「ラロナはそんな彼女の肩を優しく叩いてやる。」

「それ食ったら、お仲間が助けに来るまで隠れてたらどうだ？ カルダ団長も許可してくれたし」

カルダは広場の向こう、正門へ続く回廊前で残存兵を率いて再編成を行っているようだった。彼女は、ヘリの残骸に時折眩しげな、羨望とも嫉妬ともつかぬ表情を向けていた。

「ラロナ……そ、その……」

忘れて、という言葉が彼の心に深く突き刺さった。

彼女は、誰も彼もが敵だったここで、ただ一人自分のことを庇ってくれた。ただ一人、名前を覚えていてくれた。

その彼女を、忘れることなどできない。

彼女は行ってしまふ。戦場へ。死と狂気が支配する場所へ。

何故だ？ どうしてそこまでして戦おうとする？

分からない……

分からないから、どうしようもなかった。

市之瀬は中途半端に立ち上がってラロナを止めるもせず、送り出しもせずに呆然とした。

ラロナはそんな彼をしばらく見つめていたが、何も言わない彼に

何かを感じ取ったのか、腰に手を当てて言った。

「勘違いするなよ。この戦争は帝国の糞野郎共と、アタシらの戦いなんだ。余所の奴の手なんか借りない。自分の国は、自分で守る」
彼女はそう言い放つと、向こうで部隊を再編成しているカルダのもとへ向かおうとした。

「じゃあな、イチノセ。……悪いな、命を救われた借り、返せなくて」

彼女の小さな背中が、更に小さくなっていく。

去っていくのだ。

「お、おい」

「ん？」

ラロナが足を止める。

市之瀬は、彼女の顔を直視できないまま、言う。

「戦況、悪いんだろう？ ……死んじまっていいのか？」

「戦士として戦って死ぬなら本望だ」

「か、家族が悲しむだろう！？ 逃げても生きるべきなんじゃないのかよ！？」

彼女が、ゆっくりと振り返った。

恐る恐る、彼は顔を上げる。

迷彩服の少年と、鎧姿の少女が、見つめ合う。

「……アタシは戦災孤児だ。家族はいない」

一陣の風。

短い彼女の髪が揺れた。

沈黙。

「だから、だからもう……自分が死ぬことになっても、アタシは何も失いたくないんだ」

彼女は微かに肩を震わせていた。

そして、ぎりりと歯を食いしばった。

「もう、何もっ！」

彼女は短く叫ぶと、脱兎の如くその場を離れた。

市之瀬には目もくれずに。

その頬に涙が光っていたように見えたのは気のせいだろうか。

彼は、ただただその場に立ち尽くすしかなかった。

「黒竜が仕留められただっ！？」

リヒヤルダは伝令から上がってきた報告を耳にした瞬間、普段の冷静さからは想像もつかない動揺をみせた。

……先刻の爆音の正体はあれであつたか！

リヒヤルダは呻きそうな顔で懸念していた音の事実を悟る。

今の今まで、戦況は完全に帝国軍に有利であつた。それが覆されたかのような情報だつた。

それは他の幕僚たちも同じであつた。

「マリーヌスア軍にそんな力が……！？」

「いや、あり得ぬ！ 何かの事故ではないのか？」

前線司令部内にはあつという間に憶測が飛び交つた。

リヒヤルダは銀髪を忌々しげに掻き上げると、よく通る声で一喝する。

「静かに！」

静まったのを確認すると、彼女は切れ長の瞳を伝令に再び向けた。

「黒竜はどのような武器でやられていたのだ？ 槍か、それとも魔法か？」

「それが……おそらく魔法ではないかと思われませんが」

「おそらくとは何だ？」

伝令はその問いに即答できなかった。

「その……竜の体が原型を留めておりませんでしたので、火炎属性の高位魔法かと」

伝令の説明に、幕僚の一人が声を荒げる。

「竜の体を破壊するほどの魔術師がこんな辺境国の軍にいるはずが

なからう！」

「待て、その目で確認したのだな？」

縮み上がる伝令を救うようにリヒヤルダは念を押した。

「は、はい！」

「よろしい……下がれ」

リヒヤルダは火の手が上がる敵国の都市を再び丘から眺めた。

今のところ、異常らしきものは見受けられない。しかし、妙な胸騒ぎがした。

すると、頭を抱える彼女の背後に影のように立っている男がいた。
「実に面白いですな」

ローヴを目深に被っているため、表情を読み取することはできない。
だが、その顔が薄気味の悪い笑みに彩られていることは想像に難く
なかった。

「……督戦官殿、我が軍に損害が出ており、作戦に遅延をもたらしているこの事態が面白いとは聞き捨てならぬな」

「いや失礼。非礼はお詫びいたしますよ、將軍」

「貴様、何か知っているのではないだろうか？」

「督戦に同行しているだけの私に左様なことを尋ねられましても返答に窮しますなあ」

次の瞬間、椅子から立ち上がった彼女は、督戦官ゲンフルの首根を片手で掴み上げていた。

「う、ぐ！？」

「本国からの差し金知らぬが、我が将兵に仇なすと分かればその場で斬る！」

緋色の瞳が男を射抜く。有無を言わさぬ恫喝だった。

「と、督戦官を殺せば、本国への反乱と取られますぞ？」

「情報を出し惜しみる督戦官だ、間諜の嫌疑があつたとすればよい」

リヒヤルダは口の端を歪めて男に釘を刺す。脅しと取られるのが癪だった。

「ふ、ふふ…… お好きになさればよろしい」

「言われんでも」

彼女はようやく男を解放した。

咳き込むゲンフルを尻目に、彼女は部下たちを睥睨する。

部下は皆、彼女のことを信頼した面持ちで、督戦官の男を哀れむ者は一人もいない。

「主力は健在だ。日没までに城を完全に包囲しろ。正体不明の敵の抵抗に遭えばそこで陣を止めてよい。各部隊、伝令を密にしろ」

「はっ！」

「戦利品掠奪や残敵掃討なぞ後回しだ。部隊を再編成して城攻めの準備。明日までに落とす！」

応！

姫將軍に率いられし精鋭たちは、命を捨てるに値する戦場を求めるかのように天幕を離れて行った。

「では…… 御達者で……」

蒼い髪に僧衣を纏った少女が、深々と頭を下げていた。

目の前に、二人の迷彩服姿の若者の姿がある。

「あなたの助けを必要としている人は、きっと大勢います。ですから、生きることが諦めないでください」

リュミは久世が宥め賺し、なんとかして後方の民間人達のもとへと下がってもらうことになった。

彼女は、もしかしたら迷っていたのかもしれない。

信仰も、仲間の全滅という現実には、あまりにも無力だったのだろっ。

そんな中、自分の命を救ってくれた異界の戦士達の励ましは、神の声よりも心に響いた。

少女は何度も彼らを振り返りながら、寂しげな視線を送って去っ

て行く。

だが、最後に彼女はこう叫んだ。

「真の勇ある者を神は必ず見ておられます！ あなた方に、神のご加護とご武運を！」

彼女の目にも、ラロナのように涙があつた。

そして、戦場に奇妙なエアポケットが生まれた。

そこには、迷彩服姿の二人だけが残された。

「市之瀬、何を考えてる？」

「え……？」

ヘリの残骸の中から使えそうな装備や、そして武器弾薬を運び出す作業をしていると、久世が不意にそう尋ねた。

久世はヘリの中から弾薬の入った箱を運び出し、地面に置いて一つため息をつく。

「ラロナちゃんには、ラロナちゃんの国の事情があるし、僕達には僕達の国の事情があるんだ」

市之瀬は、うつと言葉に詰まった。

ラロナが去っていった正門の方がどうしても気になり、何度も見つめてしまっていたのだ。

そして、久世は彼に釘を刺した。自衛隊に身を置く指揮官として、それは仕方のないことだった。

「我々は、ラロナちゃんにも、その敵にも、味方をしちゃいけないんだ。それが……」

彼自身、納得してはいないといった様子だったが、それでもはっきりと言う。

「自衛隊って組織なんだ」

市之瀬は上官から目を逸らすようにラロナの行ってしまった先を再び見た。

「……俺、あいつに助けられたんです」

「あの竜を倒したことで貸し借りなしだ」

「あいつ、きつと死ぬ気なんです」

「だとしても僕達にはどうしようもない」

「どうしようもなくはないですよっ！」

市之瀬は叫んでいた。

それが、久世が部下に対して理解ある良き上官であることに甘えていると分かっていたが、それでも止められなかった。

「久世三尉だつて見たじゃないですか！？ あんなにたくさん兵隊でもない人達が殺されてるんだ！ 俺達、人を救うために海外派遣されてたんじゃないんですか！？」

「我々の任務は人道支援であつて戦闘ではない。それに、ここは派遣先のアフリカじゃない」

「何の違いがあるっていうんです！？ 同じ人間なのに！」

「市之瀬二士、上官命令に逆らうなら……」

久世の顔から、いつもの温厚な青年の表情が消える。

冷たささえ感じられる、鋭い眼光が宿っていた。

「俺も相応の覚悟をしなくてはならん」

久世は腰に提げた？拳銃を引き抜いていた。

市之瀬にこれみよがしに向けたりしないことが、逆に彼の本気さを表している。

「俺の任務は、生き残った部下を無事に帰還させることだ」

「撃てば無事じゃなくなりますよ」

「あの子を助けに行つても無事ではなくなる」

市之瀬は、久世とこうして言葉を交わしている内に、自分が何をしようとしているのが分かってきた。

俺は、ラロナを死なせたくないんだ……

そのために、自分にできることは限られている。

戦いの中へ、戦場へと飛び込むこと。

あの狂気と恐怖の世界へ。

ああ、美奈……俺、お前のために生きるって約束したのに……どうして……

本来なら、赤の他人のラロナのために命を張るなんてことは、全

く天秤に釣り合わない選択だ。事実、さっきまではそう思っていた。だが、何故か今は違う。

家族のことを軽んじ始めたわけではないが、ラロナも同じくらいに気になるのだ。

家族のためなら、どんなことだってやってやると決意したように、ラロナのためなら、きっと、同じく何だってできるかもしれない。

例え、上官命令に背くことでさえ。

「俺、今分かった。やっぱり自衛隊向いてないっすわ」

反抗的とも取れる自嘲の笑みを見せると、久世はどこか悲しそうな顔をした。

「市之瀬、俺は我が身可愛さで言ってるんじゃないんだ。お前にもしもの事があつたら、親御さんに合わせる顔がなくなる」

市之瀬は罪悪感に胸が痛んだ。家族以外の誰かに、ここまで真剣に心配されたことは始めてだ。

そうだ。そうなのだ。

ラロナも、久世三尉も……

みんなみんな、本当に自分以外の誰かのため、何かのために生きている。

俺は、結局、誰かのためだと言い訳をして逃げてきたただけだ。

自分で何も選択してこなかったし、そのために負う責任からも目を背けていた。

……ああ、考えれば俺は自衛隊に志願入隊したんじゃない。

就職先がないこの御時世に、公務員になれば将来安泰だとか、自分が大学に行く余裕が家にないから、消去法としてその道に踏み込んだだけなのだ。

美奈のためだなんて後付の理由だったのかもしれない。

本当は説明にやってきた、どこかいやらしい笑みを浮かべた中年の広報官からこう説明を受けたからだった。

『いいかい、浪人したり、中途半端な大学に行って就職浪人するハメになるなんて、バカバカしいと思わないかい？ それならだね、

自衛隊でがんばれば、衣食住ただで生活できて、ご家族のためにもなる。妹さん、今度高校進学なんだってね？ お父さんがお亡くなりになったとお母さんが仰っていたけれど、古いこととは思っけねどね、一家の大黒柱になってあげるのも男の子の務めなんじゃないかな？ 君、体力ありそうだし、大丈夫大丈夫。そうだそうだ、海外派遣とかに行くよね、手当金がたくさん出てそれこそ高級車が新車で買えちゃうんだよ？ ははは、興味あるって顔してるね、じゃあ、今度駐屯地で試験があるから、受けるだけでも受けてみないかい？ そうか受けてみるかい！ じゃあ、この書類に印鑑を……」

過去の記憶を思い出した市之瀬は、空を仰いだ。

戦場だというのに、突き抜けるように高く、蒼い空。

……なんてザマだ、この俺は。
部下を守るために鬼にも仏にもなる久世三尉、故郷のために命を投げ出す覚悟のラロナ、あのカルダとかいう姉ちゃんだって、虚勢を張ってまで貴族とやらの矜持を貫いている。

俺には、そんなものは何もない。

「……分かってます。久世三尉」

久世は一瞬、市之瀬が自分の命令を聞き入れたのかと表情を緩めた。

が、次の瞬間、久世の目は驚愕に見開かれた。

「俺、クビでいいっすから！」

市之瀬は久世に背中に負っていたスナイパーライフルを構え、銃口を向けていた。

「甲板に無許可出入り、重火器の無許可使用、最後に上官反抗」

震える声で市之瀬は上官に言った。

「もう、いいんす。久世三尉には、十分お世話になりました。すいません、最後までダメ隊員で」

「市之瀬え！」

久世は叫び、拳銃を市之瀬に向けようとした。
射殺するためではなく、手を撃ち抜いて行動不能にするためだっ

た。彼は、本物の指揮官であり、本当の意味で心優しき青年だった。
が

「うわっ!？」

ずん、と爆音と地鳴りが彼らを襲った。

二人は震源地を無意識の内に振り返っていた。

正門の方で、黒い煙と地鳴りのような声が聞こえて来る。

直感的に、正門が突破されたのだと思った。

「ラロナ！」

市之瀬は走り出した。

ただ一人の少女に会うためだけに。

「市之瀬っ！ ダメだ止まれ！」

パン！

乾いた銃声が響いた。

だが、着弾の気配がどこにもないことから、市之瀬はそれが空に向けた威嚇射撃だと理解した。

「……ごめんなさい、久世三尉。ごめん！」

市之瀬は走った。人としてくだらないことだが重要なことを捨て、大切だがくだらない何かを手に入れた気がした。

「死ぬなっ！ ラロナああああ！」

狙撃銃を抱え、安全装置を外し、彼は思いの力だけを頼りに戦場の中へと飛び込んでいった。

第6章 防衛戦 ？

城の間隙で敵の密集陣形が地響きを立てて迫ってくる。黒い甲冑に身を包んだ、海の向こう、フィルボルグ帝国精鋭の黒騎士の一系乱れぬ戦列陣形だ。

防衛側は城壁から絶え間なくそれを阻止すべく弓を射掛け、敵の顔まで判別できる距離まで接近されると、スリングを勢いよく回転させ、石を投げつける。張り巡らされた堀に手間取り、前進の速度が落ちたところを頭上の城壁から狙い撃ちにされる。特に、セイロード城の堀は水堀で、接近が極めて困難であった。言うまでもなく、正門にかかる橋は上げられている。栄華を誇るセイロード城は、その絢爛豪華さ以外にも、防衛拠点としての城としても完成されていた。

そのため攻城戦の定石通り、帝国側にもかなりの損害が出ていた。だが、攻撃側は防御側の三倍の兵力が必要だが、おそらく帝国軍は防衛側の五倍はいた。奇襲攻撃の混乱の中、都市部を放棄するのを躊躇ったために、マリースア軍は無意味に兵を消耗し切っていた。残存兵力を少年兵まで投入して前線を維持している。

「怯むな！ 敵は空を渡って来ている！ 攻城用の投石機は持っている！」

城壁の上でカルダが叫んでいた。最前線の指揮を受け継いだのだ。正規兵の指揮官は、本丸まで撤退することになった。それが命令だった。

カルダ達、制空権を奪われた飛行部隊の残存兵は、正規兵ほどものは期待されていない。そのため、時間稼ぎのために戦線投入されたのだった。

捨て駒である。

だが、それを理解してなお、兵士達の士気は旺盛だった。

「ここが破られれば後はないぞ！ 日没まで耐えきるのだ！」

カルダの檄に、兵士達が歓声を上げて応える。

女子供の多い二線級部隊としてどこか低く見られて来た飛行軽甲戦士団が、ここまで正面切つて敵と戦う榮譽の場を与えられている。そのことが嬉しいのだ。

今までに散つていた仲間の仇とばかりに、城壁にいる彼らは獅子奮迅の戦い振りを見せていた。

「はあっ！」

彼女は次々と城壁に登るために掛けられる敵の梯子を槍で叩き外し、登つて来る敵兵を串刺しにして城壁から払い落とす。

やはり、彼我の戦力差は歴然としていた。数の勢いで押し切られそうになっている。城壁にいるマリースア軍の数は五百足らず。対して攻撃側は三千はいる上、後詰めに更に待機している部隊が見えた。岬の上に城が建っている関係上、防衛すべき面積が小さく、守りやすいとはいえ、この戦力比は絶望的だった。

敵の魔法戦士が火炎魔法を打ち出し、城門に当たって巨大な爆音が鳴り響く。

黒い煙がもうもうと立ち上り、一瞬、門が遂に破壊されたかと肝を冷やす。

セイロード城の城門は、並の破城槌の直撃を受けてもびくともしない。だが、こうした攻撃が重なり、今にも崩れそうなほどに破損して来ている。敵は無駄のない攻撃を繰り返していた。

「……彼らの力があれば、この戦況、覆せるだろうか？」

何度目かの攻勢を何とか防ぎ切ったカルダは、返り血に朱に染まった凄絶な顔を、一瞬疲労に歪ませてそう呟いた。

竜を一撃で倒す、異界から漂流してきたという、この世にあらざる戦士達。

だが、貴族として、余所者の力にすがりたいと思つてしまった心境を恥じる。

「カルダ団長、何か仰られましたか？」

「いや、何でもない」

彼女にも薄々この戦いの結果は見えていた。

だが、武人として、自分には戦うことしかできない。その愚直さ故に、自分は幼くして家を飛び出し武人の道を歩んだし、軍にあっても二線級部隊に左遷されていた。

（私は……馬鹿な人間だったのかもしれない……）

貴族の矜持にこだわり、何か本質を見誤ってきたのではないか。自分は他の貴族とは違う、貴族の女どもとは違う。結局、それは自分の独りよがりだったのではないか。

乾いた笑みが浮かぶ。

返り血に染まった美貌の中のそれは、狂氣的に美しかった。

周囲にいる男性の兵士達は、それを見ただけで、背筋がぞつとし、同時にこの女性のために死ぬことが名誉なことに思えてきた。

「最後だけは、武人らしくあろう」

彼女は決意した。今までの自分など、もうどうでも良い。

今、いかに生きるかが重要なのだ。

ここで、満足いくまで戦えば、自分は戦士の海辺へ行けるはずだ。すまない、私などのために命をかけさせてしまつて……

カルダは自分を信頼してついでに兵を見渡し、高らかに槍を掲げた。

部下達の純粹な歓声が、彼女の心を少しだけ癒してくれた。

だが、その時、歓声を打ち消すように咆哮が響き渡った。

オオオーン……

竜の鳴き声。

海を渡ってきた強行軍と、初戦の戦果で疲れ、翼を休めていた竜騎士団が再び戦空へ飛び立とうとしている。

それはマリースア側にとって、死の咆哮だった。

竜の咆哮には人間の根源的な恐怖心を煽る性質がある。そのため、竜騎士団は敵前であれば、相手の士気を砕くために一斉に咆哮を上

げる戦法を取る。それだけで降伏した例も少なくはない。

カルダも、先刻までの決意が揺らぐような恐怖に襲われていた。

それは、理性ではどうにもできない、人間である以上抗えない恐怖であつた。

と

「負けるかあ！ イチノセの手柄つつつても、こっちは黒竜一匹ぶつ倒してんだぞ！」

少女の叫び声が聞こえた。

カルダは横を見る。

紅い髪の少女が、勝ち誇った顔をして敵陣を睨んでいた。

ラロナ練戦士……？

カルダは目を見張る。

「そ、そうだそうだ！ こっちは黒竜を倒している！」

「戦つて勝てない相手じゃないのよ！」

部下達は虚勢には違いなかったが、誰もが戦いを放棄しようとはしなかった。

カルダは気付いた。いや、気付きたくなかったことを、認めた。

そうだ、あの少年は、我らが逃げ惑う中、ただ一人で竜の前に立ちただかつた……

彼女は恥じた。

あの少年を一度でも腰抜けだと思つたことを。

「そうだ戦士イチノセを倣え！ 武運は我らにあるぞ！」

カルダは部下達に続いてそう叫んでいた。

すると

「あれ、俺がどうかしたんすか？」

少年の声が城壁へ登つて来る階段から聞こえた。

「……イチノセ、殿？」

カルダは振り返ると、信じられないものを見るかのように彼の姿を見つめた。

間違うはずはない。あの奇妙な緑色と茶色が混じり合った服を身

につけ、得体に知れない武器らしきものを抱えている。

「まあいいや、ラロナ、います？」

「え？ あ、ああ、あそこに、いるが……？」

「どうも！」

「あつ、ちょ、ちよつと……」

いつもの怜悯な言葉遣いのカルダが思わず普通の女性のような声を上げていた。

それくらい、市之瀬は無頓着にその場に現れたのだった。

ラロナも、あんぐりと口を開けて彼の姿を凝視していた。

「……何しに來たの？ お前」

「何しにつて、お前を守りに來たんだよ」

市之瀬は身を低くしながら城壁で防御態勢を取っている彼女に近づいた。第一匍匐と呼ばれる中腰くらいの匍匐前進だ。

「守り、に……？」

ラロナは自分の隣へ腰を据えた少年を呆然と見つめた。

そして、かつと表情を怒りに変えた。

「馬鹿野郎！ 余所者の手を借りる気はないつて言っただろ！」

「知らんよそんな。俺が守りたいから守るんだ」

「はあ！？」

ラロナは彼が何を言っているのか訳が分からなかった。

命令でも、行きずりで仕方なくでもなく、守りたいから、守る……理由になっていない。

どうしていいか分からず目を白黒させるラロナの横で、市之瀬はライフルのボルトを操作し、ガチャンと薬室内を確認した。

「リユミもそうだ。借りがあるつて思っただったら、軽々しく死ぬ覚悟なんかするなよ」

そう独り言のようにラロナに言いながら、彼はボルトオープンしたライフルに弾薬を装填する。

「そんな……こと言われたつて……アタシは……」

「ああ、分かるよ。戦士だから戦場にいるしかない。だから來た。」

俺も、借りを返したいしな」

「……お前、アタシに借りなんてあったか？」
ジャカツ！

ボルトを閉鎖し、弾を銃身へと押し込む。

市之瀬はラロナにそつと言った。

「あるよ。俺の名前、覚えててくれただろ」

そんな会話を続ける少年を、城壁の兵士達がまじまじと眺めていた。

「あ、あれが？ 竜殺し？ の戦士なのか？」

城壁にいたために市之瀬を知らない守備兵の一人が隣の飛行戦士団の中年の兵士に尋ねる。

「間違いないえ、俺は見たんだ。あの小僧……いや、イチノセ殿が魔法を使って竜を一撃で倒すところを」

弓を負った若い女兵士が驚きを隠せずに言う。

「本当なの！？ でもどうして私達のところへ？」

その戦友らしき若者が恐る恐る呟く。

「味方、してくれるんじゃないか？」

「そんなまさか……」

ひそひそと周囲が落ち着かない雰囲気になった。

カルダはおもむろに市之瀬の所へ歩いて行く。こんな時でも、悠然とした態度でいるのは、士気を気にしてのことだった。

「イチノセ殿、加勢していただけるのか？」

カルダは信じられない反面、信じたかった。

彼らが、異世界の戦士達が、自分達と肩を並べてくれることを。

「加勢なんて大したことじゃないっすけど、そうっすね……」

実際、ほとんど行き当たりばつたりのノープランで飛び出して来たのだった。苦笑いするしかない。だが、やるべきことは分かっていた。

「一人でも多く、守ります」

それだけは心に決めていた。ラロナを、そして理不尽に死ぬべき

ではない一般市民を、自分は守る。それが、生まれて初めて自分が、上官に反抗してまで掴み取った選択だった。

カルダはじつと少年の顔を見つめる。

そつと、目を伏せた。

「かたじけ、ない……」

彼は……こんなにも純粹に無辜の民のために命をかけるつもりでいる……

義のために命をかけるのが貴族だ。ならば、彼こそは貴族であり、騎士に違いない。

だが、ここで彼に跪くことをしない自分に、彼女は自分のプライドの度し難さを感じた。

そんな彼女の心中を察そうともせず、市之瀬は苦笑いした。

「あのー……これ終わったらカルダさんの方から上官に取り合ってくれないか？ 俺、脱走してここ来ちゃったんで」

ラロナがぎょつとした顔をする。

「だ、脱走してきたのか！？」

この世界の一般的な軍での脱走といえば、最悪の場合軍法会議にかけられて、良くて鞭打ち、最悪死刑になる重罪だ。

だが、市之瀬はあまり気にしていないようだった。

それもそのはず、自衛隊には軍法会議はない。軍法会議というのは日本国憲法において禁止されている特別裁判所に該当するので設置や制度化はできないという細かい背景もあつたりする。つまり……「ああそーだよ。今回ばかりは減給どころか懲戒免職まっしぐらだよ」

脱走の最高刑はそれなのだった。

そんな彼の置かれた立場を知ってか知らずか……恐らく知らずに、カルダは笑った。

「ははははっ！ 見上げた根性だなイチノセ殿。分かった。このカルダ、家紋にかけてその約束果たそう。安心していてくれ」

勇者のためなら、それくらいおやすいご用だった。

カルダの顔に、ここまで純粋な笑みがこぼれるのは珍しいことだった。そして、本人もそれに気付いていない。

「そんじゃあ、カルダさんにも死んでもらっちゃ困るっすね」

冗談じみているが、決して冗談ではない彼の言葉に、カルダは頷いた。

「そうだな……なに、イチノセ殿がいるなら一騎当千だ、自分の命の心配などせずともよいだろう」

「うへえ、プレッシャーかけないでくださいよ」

「ぶれっしゃあ？」

「まあそれはさておき、戦況はどうなってるんすか……って」

城壁の影から城の外を見た市之瀬は顔面蒼白になった。

「うわっ！？ 何だよあれ！ あんなたくさん敵いんの！？ 弾ぜってー足りねーじゃん！？」

ラロナがさつきとは別の意味でぎょつとする。

カルダは、前言撤回しようかと心の奥で呟いた。

市街地の制圧を終えた帝国軍の前線司令部は城の近くまで移動していた。

無論、リヒヤルダは兵に自分の姿が見えるよう気を配り、士気の維持に努めていた。そうした彼女の指揮官としての有能さもあり、黒竜の撃破という衝撃はさほど影響はしていない。その証拠に、攻城戦はおおむね目論見通りに進んでいる。正門を突破するのにあと一歩というところだ。敵の残存戦力は多くはない。城へ雪崩れ込めば、勝敗はほぼ決する。

「竜騎士団は魂砕きの咆哮のみとは慎重に過ぎませぬか？」

その認識は麾下の指揮官達も同じだった。

だが、彼女は虎の子の竜騎士団を温存することを選んでいた。確かに強行軍を行った竜達は休ませねばならない。しかし、この正念

場で最強の戦力を出し惜しみし、無駄な地上兵力の消耗を強いるのはどうしてなのか。

そんな彼らの疑問の視線に、彼女は冷静な表情で答えた。

「黒竜が倒されたのは事実だ。ならば敵を過小評価するのは愚拳。奴らが何を『隠し持っている』のかを知る必要がある」

リヒヤルダは戦場において極めて実利的であり、慎重な人物だった。だからこそ、今までの戦闘で失敗が少なく、同時に危機に陥っても立ち直りが早く、致命的な損害を受けることなく作戦を完遂させてきた。

彼女の直感は外れたことがない。

とはいえ、今の幕僚達の顔には明らかな戸惑いがあった。

今見えているマリースア軍の抵抗は至極普通の田舎軍隊のものだ。城は確かに堅固な作りだが、落とせないものではない。これよりも困難な城攻めはいくらでもあった。

「閣下、命令通り戦列第三大隊が本格攻勢をかけるようですよ」

今までの戦闘は所詮、小手調べだ。

マリースア軍はどうやらよく守っていると悦に入っているようだが、手加減した攻撃を防いでいるとも知らないとはおめでたい。

リヒヤルダは精鋭の騎士団が整然と前進を開始するのを満足気に眺める。

前線指揮を取るガスコーニュ伯が古強者を思わせる笑みを見せて抜刀した。

「前進ー！」

黒騎士達が一糸乱れぬ隊列を整えて前進を開始する。まだ弓も魔法も届かない距離だが、その迫力は敵の度肝を抜いていることだろう。

幕僚の中には笑っている者さえいた。やはり帝国軍の黒騎士は最強である。

指揮官を示す派手な装飾の甲冑を身につけたガスコーニュ伯は、前線でまず城壁の防御状態を確認しようと遠眼鏡を従者に命じて取

り出した。

ガスコーニュ伯は無骨な男だったが、敵情をよく観察し、的確な弱点や有用な情報を分析することのできる人物だった。リヒャルダが第一波の正面攻撃の先陣を彼に切らせたのは、そうした能力を買ったことだった。

彼は城壁を注意深く確認し始めた。

やはり、敵の守備隊は満身創痍の捨て駒らしき連中ばかりだった。女子供に負傷兵。哀れなほどの敗軍である。

（だが変だ……あそこまで追い詰められて怯えておる者が誰もおらぬ）

城壁上の敗軍であるはずの兵士達は、事前の竜の咆哮を受けながらも、誰一人恐怖や不安に満ちた顔をしていない。それどころか、まるでこの戦いに勝つつもりでいるかのような戦意に満ちた表情をしている。

それには妙な胸騒ぎがした。

リヒャルダ將軍の危惧が、漠然と理解できたような気がした。

だが、彼はまだ余裕があった。

彼が立っているそこはまだ最前線からは程遠い。

どんな強い弓でさえ、ここまで矢を飛ばすことはできないだろう。そのため、彼にはそこに目立つ姿で立っていることに、何の警戒もなかった。

彼はじつくりと城壁を眺める。

あれは、敵の指揮官だろうか？ 草色の長い髪をした槍兵将校風の女が立っている。

その隣に、短く紅い髪をした小娘が一人。

そして

「……何だあの小僧は？」

周囲のマリースア兵とは異質な何かがそこにいた。

緑色と茶色が混じり合った奇怪な服を着た少年だ。

少年は微動だにせず、何か細い筒のようなものをこちらへ向けて

いる。

筒の上には、今自分が使っているような遠眼鏡のようなものが乗せられていた。

一瞬、目が合ったような気がした。

そして

（何か光っ……）

オレンジ色の閃光と共に、超音速で飛び込んで来た何かが、遠眼鏡のレンズを貫通し、彼の右目から後頭部をぶち抜いて行った。

彼にはそれが、M24対人狙撃銃から放たれた7・62?口径の高速ライフル弾であると知る術もなかった。

勇壮なる攻撃の前に、最高の士気であったところで、ガスコーニユ伯がもんどりうって倒れた。

リヒャルダは絶句する。何か起こるのなら、最前線であろうと思っていたため、全くの予想外の出来事だった。

同時に、事が起こってなお、リヒャルダをも含む帝国兵達には一体何が起きたのか全く理解できなかった。

と、彼らの耳に、二秒遅れて乾いた音が聞こえてくる。

ターン……

百戦無敗の帝国軍が、音を知る前に命を奪われる、スナイパーライフルによる超遠距離からの狙撃を目の当たりにした瞬間だった。

防衛戦？

「が、ガスコーニュ伯討ち死につ！」

副官が叫び、指揮を引き継いだ。

「団旗をかざすのだ！ 前進あるのみ！」

副官は旗手に命じ、後方の司令部と友軍によく見えるように旗を振った。命令伝達の技術が未発達なこの世界においては、旗や笛といった視覚・聴覚による情報伝達が重要である。同時に、部隊の象徴である団旗が倒れることは、例えば部隊が健在であったとしても、指揮能力の喪失、つまり部隊の壊滅を意味した。

そのため、兵士達は健在な団旗を見て戦闘の続行と、部隊が混乱していないことを確信する。

しかし

「ぎゃあっ!？」

突然、旗手が肩を押さえると、旗を取り落とす。

旗手の肩からは鮮血が迸っていた。

パーン！

風に乗ってあの音が再び聞こえた。

兵士達が戦慄する。

だが、狙われる危険を顧みず、別の兵が旗手を交替する。

「旗手を絶やすな！」

「お、応！」

戦友の叱咤に、精鋭の騎士達は未知の脅威との戦いの中でも混乱なく戦列を前進させていく。そう、彼らは数多の戦場を駆けてきた精鋭部隊だった。新兵のように多少の恐怖で泣きわめいたりはいしない。

乾いた音。

今度は誰が倒れたのかと、兵士達は周囲を見渡した。

「うぐっ!？」

副官が腹を押さえて跪いた。

「副官殿！」

側近が駆け寄る。

「……か、構うな！ 貴様が指揮を引き継げ！ 確固に現場指揮官が協働して戦闘を継続せよ」

副官の腹からは大量の血が流れている。

「くっ！」

必死になって側近の騎士は副官の傷口を止血しようとする。

ガスコーニユ伯達を殺した謎の攻撃は、まるで見えない矢で貫かれているかのようなだった。副官の鎧にも、指先ほどの小さな穴が開き、それが背中まで貫通している。

「治癒魔法を！」

側近は従軍の魔法使いに治療を命じる。

そして、歯ぎしりして城壁を睨む。

抜刀し、切っ先を城へ向けると、部隊を鼓舞するように叫んだ。

「ガスコーニユ伯の仇を取るぞ！ 全軍進撃い！」

白刃が太陽に輝く。

そこ目掛けて、銃弾が飛び込み、刃をへし折って地面へと突き立てた。

「ああクソ！ 距離のせいか思ったより逸れる、少しクリック修正しないと」

市之瀬は狙撃銃を一度引っ込め、弾薬をリロードしながらそう呟く。

そんな彼をラロナが耳を押さえながら見つめていた。

「この距離から、敵将の首を挙げるなんて……」

彼女は目の前の少年を凝視する。まだ耳がキンキンと鳴っていた。

『なあラロナ、あいつらの指揮官はどいつなんだ？』

彼はすこし前、そう自分に尋ねた。

戦列の後方にいる敵将を教えてやると、『距離700メートル……大分遠いな、風向きを考慮して調整するか』とブツブツと呟き、手にしていた変な鉄の棒を抱え込むようにした。

一体何をしているのだろうかと思しんでいると、次の瞬間、何かが破裂するような凄まじい音を立てて鉄の棒が火を噴いた。その音にひっくり返りそうになったが、それよりも驚いたのは、遙か彼方の敵将が血を吹いて倒れたことだ。

それから、彼は続けて敵の重要と思われる者を狙って攻撃し、敵の進撃を遅延させ続けた。

信じられない戦い方だった。伝説の弓使いでさえ、こんな無茶な戦い方などではしないだろう。

彼女は急に彼のことが恐ろしくなった。理由はない。強いて言うなら、あまりにも次元の違う戦い方をする彼が理解不能だからかもしれないかった。

だが、恐怖は次第に薄れた。彼は味方で、そして、自分を守るためにここへ来たのだから。

「あんだだけ指揮官やられてまだ引き下がらないのかよ!？」

市之瀬は再び狙撃銃を戦場へ向け、呆れと恐怖をない混ぜにした感覚で呟いた。

「奴ら、今度こそ本気のようなだ」

カルダがその様子を見て額に汗をかく。

「何で今までは本気じゃなかったんすか？」

市之瀬の問いに、カルダが唸る。

彼の問いはもったもなものであった。確かに、何故全力を挙げてここを落とそうとしなかった？ 我々の敢闘があつたとはいえ、竜騎士団を少しでも差し向けられていたならひとたまりもなかったはず。おそらく、自分の勘が外れていないのなら……

「あなたを知るためだったのかもしれない……」

「お、俺を!？」

市之瀬が何の冗談だとカルダを仰ぎ見る。

だが、カルダの顔にからかうような表情は見当たらない。

「敵は黒竜を倒されて慎重になっていたのです。もしも最初から本気であったなら、この守備兵力でここを守るなど……」

市之瀬は背筋がぞつとした。

相手が、馬鹿でも烏合の衆でもない、組織化された軍隊であることを改めて思い知ったのだ。そして、敵の指揮官は自分の狙撃を知るために、作戦を立てた。だとしたら、相手の思い通りに事が動いているということだ。

戦争とは、被害の大小で勝敗が決まるのではない。作戦の目的を完遂したかどうかで勝敗が決まるのだ。だとしたら、今の状況は敵が勝っているといっても過言ではない。

市之瀬は不安に駆られた。

自分は相手の思うとおり、手の内を見せてしまった。狙撃というこちらの戦い方を見せてしまった。

狙撃の恐ろしさにより慎重になるだろうか？

それとも……

市之瀬は射程圏外に存在する敵の前線司令部をスコープで確認した。

白銀の髪を流した美女が、こちらを見ていた。

その女は、不敵な笑みをたたえているように、彼には思えた。

「……敵の手の内は分かった」

リヒヤルダは熟考の末、判断を下していた。

「作戦通り、後続隊も投入、竜騎士団にも出撃準備させろ。あの程度の将校の損失ならば、無視できる範囲だ」

「御意！」

黒竜が撃破されたと聞き、敵がどれほどの切り札を持っているのかと気になったが、あんな子供騙しの戦い方しかできないのなら問題は無い。確かに将のみを狙い、指揮能力の低下や混乱を誘発さ

せる戦法は恐ろしい。

「だが、そんなものが通用するのは普通の軍だけだ」

リヒャルダは勝ち誇った。帝国軍の真の強さは、指揮官がいなければ戦闘が継続できなくなるほど柔な将兵ではないことにある。黒騎士達は雑兵ではないのだ。高度に訓練された常備軍なのである。

それも、実戦経験豊富な精鋭達で構成されている。団旗を決して手放さなかったのを見ても分かることだ。安易な退却などあり得ない。「マリースア、そしてそれに味方する何者かよ。その城で土くれになるがいい」

リヒャルダの命を受け、主力部隊が攻勢をかける突撃ラツパが吹き鳴らされていた。

「来るぞ！ 全員備えよ！」

明らかに今までとは様子の異なる、怒濤のような敵の攻勢を目の当たりにし、カルダを始めとする守備隊は覚悟を決めて体制を整えた。

「俺の狙撃、取るに足らないって思われたわけか……」

市之瀬は無力感に苛まれていた。

敵が規格外な軍隊だからだという冷静な判断はできなかった。

「何言ってるイチノセ、大戦果だったじゃないか」

沈む彼の肩を、バンバンと叩く者がいた。

ラロナだった。

「羨ましいぞ。敵の大將首を挙げるなんて、我が軍だったら出世間違いないのにな」

彼女は白い歯を見せて笑った。

太陽のような笑顔だった。

「……ラロナ」

「生きて帰るんだ、イチノセ。アタシを……」

彼女は市之瀬の両肩をがっしりと掴み、じつと彼の顔を見据えた。
「アタシを守ってくれるんだろう？」

それっきり、しばらく二人は見つめ合ったまま、言葉も交わさずにいた。

少年は、誰かを守ると約束したのは初めてだった。

少女は、誰かに守られるのは初めてだった。

遠くから、敵の突撃ラッパが鳴り響いて来るのが聞こえた。

市之瀬は力強く頷いた。

「ああ、そうだ……俺達、生きて帰るんだ。誰も、ここで死んじやダメだ」

彼はライフルを握りしめる。

「イチノセ殿！ 敵の弓兵と魔法使いが厄介だ！ 狙えるか？」
カルダが戦場を睨みながら尋ねて来る。

彼は再び城壁から狙撃銃を敵に向けて構えると、ラロナに言った。

「目標を指示してくれ！」

「ああ！ 任せとけ！ 山育ちだから目の良さには自信があんだ！」
「頼んだぜ相棒！」

市之瀬はライフルを構えると、直近の敵に向かってトリガーを引いた。

一人の自衛官と、一人の兵士の戦いが始まった。

いや、それだけではなかった。

「共に戦えて光栄だ！ ? 竜殺し?!」

「先刻の戦い、目を見張りました！」

守備隊の兵士達が口々に叫んでいた。

市之瀬は彼らを振り返り、その目に焼き付けた。

例えようのない高揚感が彼の身体を駆けめぐっていた。一種のナチュラル・ハイだ。

今自分は、今まで生きてきた中で最も誰かに必要とされている。それは不思議な感覚だった。

何か、報われた気がした。自分の選択は、少なくとも全くの誤り

ではなかった。

「イチノセ！ 右側面の魔法戦士部隊が魔法陣作ってる！」
「了解、阻止する！」

市之瀬は攻城のために大規模な魔法攻撃を企図しているらしい、敵の魔法戦士達に向けて射撃を加えた。術の途中で狙撃を受け、円陣に立っていた一人が斃れた魔法戦士達は慌てて魔法詠唱を取りやめ、部隊を安全地帯へ移動させていく。時間稼ぎにはなった。

「わうつ！？」

びゅ、と鈍い風切り音を立て、市之瀬の横を矢が飛んでいった。布陣完了した攻城側の弓兵隊が支援射撃を開始したようだ。

「しゃらくせえ！」

市之瀬は射撃の指揮を執っている敵の将校を即座に撃ち倒した。ジャキン、とボルトを操作する音が続く。

たった一丁の狙撃銃でできることなどたかがしれている。こんな大軍を前に、たった一人で何ができるといふのか。

だが、市之瀬は諦めなかった。ここで戦うと決めた。ここで守ると決めた。

そして、側にはラロナがいた。恐れていては始まらない。ほとんど意地だ。

「城壁に上げるな！ 塀際で阻止しろ！」

カルダが無数にかけられる敵の梯子を見て部下に檄を飛ばす。

既に、守備側の弓や投石で阻止できる勢いではなかった。ほとんど無傷に近い状態で敵は城壁に取り付き、門には樽に詰めた爆薬を仕掛けようとしている。

市之瀬は身を乗り出し、樽を持って城壁に接近する敵の工兵を狙撃する。いや、狙撃したのは工兵ではなく、その爆薬を詰めた樽だった。

次の瞬間、周囲を巻き込んで樽が大爆発を起こした。

その爆発で、敵の攻勢が一時的だが弱まる。

また、敵の損害が目に見えたため、味方の士気が高まった。

「帝国の間抜け共め！　こちらには？　竜殺し？　のイチノセ殿がいるんだぞ！」

「百回来たって負けるものか！」

歓声を上げながら守備兵達が眼下の敵に対して叫んでいた。

だが市之瀬は撃ち尽くした銃に慌てて弾薬をリロードするのに忙しく、その声に耳を傾ける暇がない。

「あぐっ！？」

隣で弓を構えていた味方が敵の矢に当たって倒れる。

「右側面が手薄だ！　侵入を許すな！」

カルダが叫ぶが、時既に遅く、梯子を登って来た帝国兵が遂に城壁の上に雪崩れ込んで来た。元より、守りきることなどできないことが前提の戦いだっただけだ。

弓兵が主だったのが災いし、その場にいたマリースア兵は黒騎士の手にする長剣に次々と切り伏せられていく。騎士の接近戦での強さは恐ろしいまでのものだった。

「退け雑兵共！　貴様らを切っても名誉にもならぬわ！」

前線指揮官だろうが、歴戦の勇士といった風格のある黒騎士が前へ出た。守備兵側はおもわずその気迫に気圧されて後退る。

「全員伏せろお！」

市之瀬は味方に向かって叫ぶと、雑囊から何かを取り出して敵に向かって投げつけた。

「ふん、舐められたものだ。鉄の礫つぶいを投げつけただけで我らが怯むとでも……」

足下に転がった鉄製の丸い何かを見やり、敵の黒騎士は小馬鹿にした表情を浮かべる。

それが、安全ピンの引き抜かれた手榴弾だと理解できるはずもなかった。

ドオン！

破片をまき散らしながら、手榴弾が炸裂し、城壁へ侵入して来た黒騎士がまとめて吹き飛んだ。

突然の破裂音と爆風にマリースア兵も度肝を抜かれている。

「い、イチノセ殿がやったぞお！」

「怯むなあ！」

だが、それはすぐに歓喜に代わっていた。得体の知れない魔法を使う、竜を倒した戦士が味方にいることを改めて実感したからだ。勝てるかもしれない。そのわずかな希望にすがって。

「畜生！ 完全に白兵戦の距離じゃねえか！」

しかし、当の市之瀬は焦るしかなかった。単発式のスナイパーライフルの出番などもはや存在しなかった。彼はライフルから9？拳銃に持ち替え、こちらからも梯子をかけて登ってくる敵兵に向かって連射する。手榴弾の安全ピンを抜くと、城壁の根本に張り付いている敵の一团に向けて放り出す。

爆音と悲鳴が聞こえるが、それを確認する余裕もなく空になった拳銃のマガジンを交換する。

と、背後に黒い影が差し込んだ。

「え」

彼が振り返ると、そこにはブロードソードを手にした敵の姿があった。そして、その剣を振りかざし、振り下ろそうとしているのは他でもない自分だった。

「イチノセえ！」

ラロナの絶叫が聞こえ、ごり、と鈍い音がした。

すると、敵の身体がぐらりと揺れ、そのまま地面に倒れ伏した。そこには、短剣を全体重をかけて刺突したラロナの姿があった。

「大丈夫か！？」

「ラロナ伏せろっ！」

彼女の問いに答えようとせず、突然に市之瀬は彼女に向けて拳銃を構え、トリガーを引いていた。

「わっ！？」

ラロナが身を竦める。

彼女の後ろで、槍を手にしてこちらを狙っていた敵兵が9？パラ

ベラム弾を三発受け、仰け反って転がる。

「俺から離れるな！」

「そりゃこっちのセリフだったの！」

城壁の上は阿鼻叫喚の乱戦状態となっていた。

あちこちで剣戟の音がかき鳴らされ、悲鳴と怒号が飛び交っている。

だが、数の上でも強さの上でも、守備側が劣勢なのは目に見えて明らかだった。

「散るな！ 集団で戦って押し包め！」

カルダが必死になって部下に指示を飛ばすが、そもそも弓や投石用のスリングしか持っていない兵すら多い中では連携が難しかった。
「ダメだ！ この状態でライフルなんか撃ったら味方にも当たる！」

市之瀬は狙撃銃を手にしようとするが、この乱戦の中では無用の長物であることに歯噛みした。遠距離からの狙撃のために作られたスナイパーライフルなどを至近距離で撃てば、高速スピンのかった弾丸が敵を貫通してなお、味方の背中まで貫いてしまう危険があった。

「こんちきしょ！ これでも喰らえ！」

最後の手榴弾を手にとると、黒い絨毯のように眼下を埋め尽くすようになつた敵の大群の中へと投げ込む。もはや、手榴弾程度の破壊力では焼け石に水だった。

「敵は小勢だ！ ？ 見えない矢？ も恐れるに足らん！」

敵の指揮官の叫びが聞こえる。

市之瀬は悔しさに表情を強張らせるが、もう単発式のスナイパーライフルを振り回している余裕はない。

「イチノセ殿！ ここはもうダメだ！ 放棄して撤退しよう！」

カルダは戦略的撤退を決意していた。

ここで玉砕するつもりでいたが、遅滞行動を取ることと敵に出血を強い、時間を稼ぐ方がより現実的だと判断したのだ。

「で、でもこの状態で撤退なんてできるんですか！？」

「やるしかない！　ここで皆殺しになるよりはマシだろう！」

違いない、と市之瀬も思った。

後がないとはいえ、ここで全滅した方が後がない。

それに、もしも久世三尉がいる中庭まで撤退できれば、ヘリにはまだ武器がいくらかあったはずだ。それが手に入れば、自分はまだ戦える。久世三尉も、身を守るためには戦いに参加するしかないはずだ。

「中庭まで退くぞ！　生存者は仲間と協調して退却しろ！　一人で行動するな！」

カルダの命令に応じる声は少なかった。

既に守備隊は壊滅状態と言っている状態に追いやられていた。あちこちで戦いとも呼べない一方的な虐殺が起こっている。

「くっ……もはや、これまでになのか」

カルダが疲れ切った表情で戦場を見渡した。

と、

「はっ！？」

頭上を、巨大な影が横切った。

オオオーン！

「竜騎士団まで……！？」

カルダは絶望の象徴を見るかのようにその生き物の姿を凝視した。

「カルダ団長っ！　危ない！」

ラロナの悲鳴のような声が彼女を引き戻した。

横を見ると、そこには白い体表をした氷結竜が、味方の死体を踏みつけながら城壁に降りたっていた。

ふしゅう、と凶悪な牙ののぞく口から冷気を漏らし、氷結竜は目の前のカルダを捉えていた。

ずん、と鈍い音が竜が一步踏み出すことに不気味に足下に響いた。
「ふっ……貴様が私の、死か……」

カルダはとてつもない諦観に襲われた。戦う意思よりも、身を委ねる方が良いと思ってしまう。無駄なあがきよりも、潔い死の方が貴族には似合っている。ここへ来てもなお、自分は自分の死に方今まで貴族の美学を求めようとしている。そのことが悲しかった。

「ちつくしよお！ てめえがへりを落とすやがったんだなあ！？」

市之瀬は狙撃銃を構えてカルダを庇うように前へ出ていた。

「イチノセ……殿……」

彼女は呆然と彼の背中を見つめた。

自分よりも小柄なこの少年のどこにそんな勇気が備わっているのか、そう思えるような小さな背中だった。

「カルダさん！ 早く味方を連れて撤退するんだ！」

「え？」

「あんたに死なれたら、俺どうやって懲戒免職させられるの止めてもらえばいいんすか！？ 早くっ！」

「あ……」

彼女ははっとした。

彼は、諦めていない。

異界の戦士のこの少年は。

絶対の存在、竜を前にして、彼はまだ、諦めていない！

カルダはぐつと齒を食いしばった。

「分かった！」

彼女の返事と共に、市之瀬は狙撃銃のトリガーを引いていた。

竜の背中に乗って絶対の存在と偉そうにしている竜騎士が、突然の狙撃に血を吹いて転げ落ちていくのが見えた。

「イチノセっ！」

ラロナの悲鳴。見ると、そこには氷結弾をチャージし顎を大きく開いてこちらを皆殺しにしようとしている竜がいる。主人を殺されて逆上しているらしかった。

「うおわああああ！」

市之瀬は素早くボルトアクションを起こした。ボルトオープンと

共にバネで排出された空の薬莢が城壁の石畳に転がり、チリンと小気味良い音を奏でる。再びボルトを押し込み、次の弾丸を銃身の中へ装填、射撃体勢を取る。そのわずか二、三秒の時間が永遠に感じられた。

口の中の柔らかい部分を狙い、彼は絶望的な敵を相手に戦いを挑もうとする。

そして、市之瀬がトリガーを引き絞り、竜が氷の塊を吐き出そうとした瞬間だった。

ドシュ、と何かが突き刺さるような音が、いや、衝撃が周囲に響いた。

竜の後頭部から口の中に向かって、何か槍のようなものが突き立っている。

一瞬、その光景を認めた敵味方の兵士達の目前で、氷結竜が巨大な爆発を起こして消し炭になった。

「うわぁ!？」

市之瀬は爆風にそのままひっくり返っていた。

カルダは身を伏せ、なんとかその場に踏み止まる。

と、頭上を巨大な影が再び横切った。

(敵の竜……? いや、いや、あれは……?)

彼女にはそれが何なのか表現することができなかった。

「あれは、何なの?」

素直に疑問を口に出したのは、ラロナだ。

市之瀬は空を仰ぎ、そこに飛んでいる物体を見て思わず叫んでいた。

「ロングボウ・アパッチ!? 戦闘ヘリだ!？」

ヘルファイア対戦車ミサイルと、30?チェーングンを備えた、世界最強のアタック・ヘリが、竜の飛び交う空に飛び込んでいた。

第7章 イージスの盾

「何だ！？ 何が起きた！？」

リヒヤルダは目の前で起こったことが一瞬理解できなかった。

いや、今も理解できていない。

氷結竜が一撃で斃された。常識的に考えて、そんなことはあり得ない出来事なのだ。

この戦いの中で違和感を抱く局面は幾度かあった。だが、今のこの出来事は違和感を通り越していた。

そう、これは？ 異変？ に他ならなかった。

今、自分の目の前では、何か大きな変化が起きている。分かるのはそれだけだった。

「ぬっ！？」

と、上空を何かの影が横切った。

聞いたこともない奇妙な羽音を響かせ、疾空竜のように早く空を舞う？ 何か？。

「あれは……何なのだ！？」

彼女は空を飛ぶそれが生き物であるとは思えなかった。だが、機械だとも思えなかった。

あまりにも彼女の想像の域を超えた形状をしていたからだ。

鳥には見えない。かといって竜でもない。一番近いのは虫だろうか。だが、虫にありがちな甲殻や足の節のようなものは見当たらない。虫にしては洗練された形をしている。

戦闘ヘリコプターという戦うために特化したヘリの形は、この世界の人間にはまさに「異形の物体」に他ならなかった。

「追え！ 我が竜を倒したなればあれは敵だ！」

リヒヤルダの檄に、待機していた竜騎士が颯爽と相棒の背に飛び乗ると、手綱を操って空へと駆ける。

『こちらラコタ2。ラコタ1、背後に敵機の姿があるぞ！』

二機編隊を組んでいた陸上自衛隊戦闘ヘリAH64D？ロングボウ・アパッチ？が、無線交信で状況を確認する。

撃墜された偵察ヘリに乗っていた生存者らしき隊員を高倍率望遠鏡システムで発見できたのは奇跡だった。そして、彼を守るために、ヘルファイア対戦車ミサイル一発を発射。

？竜？を撃破した。

そして、今はその竜の仲間らしい怪物達に追いかけられていた。強力なターボシャフトエンジンでの最大飛行速度に追いつがって来る。驚異的な生物だ。

パイロットは焦りながらも最善の判断を下そうとした。

『ラコタ2、ダメだ振り切れない！ 援護願えるか？』

『ラジャー、SAMを使用する。敵機と距離を取れ！』

『畜生！ ドラゴンと空中戦なんて聞いてねえぞ！』

列機を救助するため、一機のアパッチが踊り出た。

アパッチは本来アメリカ軍の戦闘ヘリだが、ライセンス生産の日本のアパッチには独自に国産の91式空対空ミサイルが4発装備されている。そのため近距離であれば敵戦闘ヘリ・あるいは護身程度に敵戦闘機との交戦が可能だ。

「まさかこんな化け物相手に使うなんてな！」

コックピットでガンナーが叫び、ロックオンした竜に向かって発射レバーを引く。

パシユン、と短いロケットモーターの飛翔音を響かせ、スタブウイングから放たれたミサイルが、あっという間に音速を超えて竜の一匹を追尾する。

竜が飛ぶ空は竜に服従する。

そう伝説に謡われてきた空は、その瞬間、覆された。

ミサイルの炸裂に、竜の背に乗っていた竜騎士は即死、竜自身も翼を破片にズタズタにされてきりもみ状態になって市街地へ落下して行った。

「な……あ……！？」

リヒヤルダはその戦いを見た瞬間、絶句した。

この戦争は、継承帝国軍のこれだけの戦力をもつてすれば半日で終わるとも言われていた。そして、リヒヤルダにもその自信があった。帝国が生まれてより今までの歴史の中、幾度となく繰り返されてきた戦いの中でも取るに足らないありふれたものであるはずだった。

「……マリースアめ、もしや冥界の魔王とでも契約を結んだか？」
リヒヤルダは、マリースア自身が何かの力を得たとは考えなかった。その予兆も、情報もなかったからだ。となれば、何か別の要素つまりマリースアが何らかの特別な存在を味方につけたということだ。半ば当てずっぽうの推論だった。

「冥界との扉は継承戦争の折に封じられたはずでございます」
耳障りな男の声がした。いつからそこにいた、とあの虫の羽音よりも不愉快に感じる。

「そんなことは知っている。ならばあれは何だ？ この戦いは何がおかしい！」

「さあ、私には分かりかねますな」

「ならば下がっておれ！」

激昂したリヒヤルダがゲンフルを睨み付けた。
その時だった。

「しょ、將軍っ！？」

部下の叫び声が響き渡る。

「何事だ！」

振り返ると、部下が全員、海の方を見ていた。

ただ、呆然と。負傷兵までもが。

燃え上がる都の光に照らされ、赤く染まった海。

そこに、？何か？が浮いていた。

「何だ……あれは……？」

それがこの世界の人間が目にすることはありえない存在。
交わることのなき世界に存在する、日本という国の戦闘艦である

ことなど理解できようはずもなかった。

だが、都の炎を反射して赤く揺らめく船体は、それが戦うためにある船であることを本能的にリヒヤルダに察知させた。

「ふっ……なるほど、奴らを？呼んだ？のか」

リヒヤルダは直感的にそう判断した。

覇道突き進む帝国の軍人として、今この状況で見極めるべきはただ一つ。目の前の存在が敵か味方かどうかだけだった。状況から判断すれば、あの異形の船も敵であるのは当然だった。

「竜騎士団の集結は完了しているか？」

彼女は傍らの老将に尋ねた。

「はっ！ あの虫も飛び去りました故、黒竜騎士団及び氷雪騎士団のほぼ全力が集結済みでございます」

「作戦変更だ。全竜騎士団を投じてあの船を沈める」

「し、しかし……」

「奴ら相手に戦力の逐次投入は危険だ。一気に片を付ける！」
彼女が檣を飛ばすと、竜騎士団への出撃を告げる角笛が吹き鳴らされた。

待機していた竜騎士達が、その音に機敏に反応する。

「出陣ー！」

「団旗をかざせえ！」

その音色は、翼を休めていた数十匹の竜を興奮させ、猛々しい咆哮が地を痺れさせた。

戦いに喜びを見出す気高き竜達が、敵を求めて翼を羽ばたかせた。時空を超えた戦いが、始まるうとしていた。

「イージス艦だ！？ 助けが来てくれた！」

市之瀬は湾内に現れたそれを見て快哉を上げていた。
海上自衛隊の船がここまで来てくれた。それがこんなにも心強い

とは思わなかった。

「いーじす、かん？」

隣でカルダがぼかんと口を開けて湾内に現れた巨大な船を見つめている。

それは他のマリースアの兵士達も同様だった。

戦闘ヘリと竜の空中戦の後に今度は見たこともない巨大な船が現れたのだ。まるで夢を見ているような感覚なのかもしれない。

言うなれば、現代世界でいきなり頭上にUFOが現れても、一体どうすればいいのかなんてほとんど者がすぐには分からないのと同じなのかもしれない。

「あつ！ 敵の竜騎士団がつー！？」

ラロナがはつとして叫んだ。

命令伝達の角笛の音色の後に、とんでもない数の竜が、猛々しく咆哮を上げて飛び立って行くのが見えたのだ。

マリースア兵達は震え上がった。

だが、攻撃目標はどうやらここではないようだ。

やられた竜達の仇討ちの方が先らしい。竜の大軍は編隊を組んで海へと向かっていく。

それは勇壮で、そして恐怖の襲来のようにマリースアの人々には思えた。

だが、その先には何かがいる。

灰色の、巨大な船。

一体どこの船なのかも分からない。

帝国軍が向かっているということは味方なのだろうか？

希望か絶望か。

しかし、一つだけ分かることがあった。

この戦いが、おそらく普通のものではないということ……

イージス護衛艦？いぶき？は速力を上げて艦隊から離れ、一足先に湾の中へと入っていた。

イージス艦の最大の強みは本来、あらゆる敵の射程圏外からミサイルを撃ち込むことができるアウトレンジ能力である。湾の中まで進入するという接近は必要はずだった。

だが、蕪木は敢えてそれを行った。海軍という存在は、歴史的にその船を？見せる？ことによって相手国に対して抑止力となる場合が多かった。純粋な戦術ではなく、この異世界においてはそういった直感的な？威容？が大事だと判断したのだ。

それは同時に、敵に狙われる危険性を上昇させる行為でもあったが、陸自の隊員だけを危険な敵前にさらす方が、海自指揮官としては許せないことだった。

蕪木は艦内奥深くにある戦闘情報センターに降りていた。

窓はなく、照明も薄暗い室内には、レーダースクリーンや各種コンソールなどの機械が所狭しと並んでいる。

ここはハイク戦闘の要とも言える場所で、イージス艦のレーダー、ソナーといったあらゆる探知装置の情報確認から、主砲やミサイルなどの火器管制に至るまで全ての操作・指揮が可能である。

蕪木がレーダースクリーンを見つめていると、一気に光点が増えた。

それが？敵？が飛翔したからだというのはすぐに理解できた。

「蕪木司令！ アンソウ 国籍不明機の出現を確認しました！ 数、対空目標

およそ五十機！」

「……機じゃない、匹だな」

蕪木は皮肉な笑みを浮かべた。

部下に余裕を見せて安心させたかったが、おそらく自分の笑みが引きつったものなのは丸わかりだろう。

そう、これは自衛隊創設以来初の？実戦？なのだ。

「目標群、真っ直ぐに本艦に向けて接近中です！ 最短目標との距離、約6マイル！」

「司令、指示願います……！」

兵器使用を統括する砲雷長が蕪木に指示を請う。

イージス艦の戦闘距離としては、あまりにも近いのだ。一刻の猶予もなかった。

蕪木は砲雷長に命じた。

「対空戦闘用意」

砲雷長が部下に叫ぶ。

「対空う戦闘用おー意！」

日本海軍の時代からの伝統である独特の抑揚の号令に、CICの隊員達が戦闘準備を開始する。訓練として、身体に染みつくほどに習熟した動作である。

「我が方の戦闘能力を見せつける。攻撃は、半自動モードにより行う。敵目標群の戦闘能力の喪失を目的として迎撃せよ。向かって来る敵は全て撃ち落とせ！」

乗組員達がざわめいた。

砲雷長も、普段温厚極まりない蕪木の言葉とは思えない、過剰とも言える攻撃命令に耳を疑う。

「敵は本気だ。こちらも本気でなければ意味がないのだ」

蕪木は自分に言い聞かせるようにそう言った。

加藤の報告を聞く限り、また、ヘリを問答無用で撃墜した敵の心理を考えた場合、生半可な戦闘は返って危険に思えた。

敵は航空戦力のほぼ全力をこの艦に差し向けている。つまり、敵の指揮官は我々を全力で沈めるつもりなのだ。中途半端な攻撃で退くとは考え難かった。

ここは戦場、そして敵は平然と他国を侵略し、殺戮の限りを尽くす本物の軍隊なのである。

密かに、蕪木は皮肉げに笑った。

本物の軍隊相手に、？軍隊もどきの？我々がどこまでやれる？

「……了解しました。接近してくる？敵機？は全機叩き墜とします！」

砲雷長は蕪木が浅慮で命じているわけではないことを確認すると、腹を決めた表情で部下に命令した。

「主砲及び短距離ミサイル、スタンバイ！」

同時に200以上の目標を探知・捕捉し迎撃可能なイージス・システムのコンピュータが、向かってくる敵の距離・速力などから脅威度判定を行い、優先攻撃目標の算定を開始した。

空中では氷雪騎士団の精鋭二十六騎と黒竜騎士団の二十四騎が隊伍を組んでいた。

五十騎もの竜が空を舞う姿は壮観の一言だった。普通ならこの威容を見るだけで、白旗を掲げる敵もいることだろう。

そう、普通なら。

竜騎士エリヴィラはその中で、改めて湾の中に浮かんでいる正体不明の船を観察した。

あれを船と形容していいものか迷う。船にしてはマストもなければ帆も張っていない。だが、それでもまるで風よりも速く進んでいた。おそらく、魔導機関のようなものを使用しているのだろうが、船にそんなものを積んでいるなど聞いたことがなかった。

「それにしても何て大きなのかしら……」

彼女の常識からすると、その物体は船というより岩島のような印象を受けた。帝国軍の巨大な軍船を目にしたことがあるが、その数倍はあるだろう。

「エリヴィラ、あの船ひょっとして鉄でできてるんじゃないか？」

戦友のアルノリドが熊のような顔に、お調子者の表情を浮かべて軽口を叩いてくる。

そこそこの家柄の帝国北方貴族出身ということだが、見た感じではただの酔いどれ山賊にしか見えない。戦場でもいつも軽口を叩いてばかりで、上官から怒られてばかりいる。それでも、自分と同

期で選抜された間柄もあり腐れ縁が続いていた。

「鉄が水に浮くなんて初耳だわ」

彼女は戦友に涼しげな表情でそう答えた。

あれだけの大きさの船を浮かべて、しかも帆を張らずに動かすのは確かに驚くべきことだ。しかし、鉄船などという鈍重極まりない船があそこまで速く動くことなど不可能だ。つまり、あの船はハリボテが船体の大半を占めている無様な虚仮威^{こけあど}しに違いない。

「だがありゃあ木でできてるようにも見えんぜ？」

その船は、まるで乾いた灰のような色をしていた。継承帝国の水軍の中にも、敵を恐れさせるために船体を黒や赤に塗っている艦はあるが、灰色など聞いたことがなかった。船体にしても、まるで子供が積み木で角張ったおもちゃ船を組み立てたような形だ。一見すると、趣味が悪いようにしか見えない。

それが、ミサイル戦における海上での迷彩やステルス効果を狙ったものだと、彼らには理解できるはずもなかった。船というものが身を隠す必要に迫られる戦いが基本的に存在しないからだ。

「馬鹿馬鹿しい、ただのハリボテよ。私達が全力出撃するまでもないわ」

彼らには自信と誇りがあった。この世界で最強とも呼ばれる竜騎士であることに。

この戦役における黒竜一騎と氷結竜二騎の損害は少なくはない。だが、苦しい戦いの中で一騎二騎を失うことは歴史上ないわけではなかった。

加えて、これだけの数を揃えた上での敗北は皆無である。そのため、彼らの表情には明らかな余裕がうかがえた。

「はっ！ それもそうさな。だが見るよ、陸じゃ友軍もマリースアの連中も俺達に釘付けになってるぜ」

エリヴィラは振り返ってそれを確認した。確かに、陸では戦闘は膠着状態になっている。そして、皆この竜騎士団の雄姿に見とれていた。

悪い気はしなかった。相手があんなハリボテ船一隻なのが不満だが、リヒャルダ將軍の竜騎士団を利用した作戦は見事なものだった。あのハリボテを海の藻屑にすれば、抵抗している敵軍も意気消沈するとお考えなのだろう。

彼女は北方人女性特有の雪色の髪を掻き上げた。

「ふっ……これだけの竜騎士が集結するのは誰だって珍しいわよ。私だって陸にいれば見物しているわ」

「観客が多いのに越したこたあねえ。お、団長が先陣を切るみたいだぜ」

帝国軍竜騎士団の伝統、指揮官自ら切り込む戦場の美德である。

団長は滅ぼした国が十を超えることが自慢の老将だった。若い頃に戦いで片眼を失い、今は眼帯をしているが、それが返って歴戦の強者といった風貌を作っていた。部下からの信望も厚く、彼が参加した戦には一回も負け戦がないと伝説になっている。

「我に続けいっ！ 帝国の精鋭達よ！」

「継承帝陛下万歳！」

指揮官クラスの四騎が一斉に速力を上げて敵に突っ込んでいく。

黒竜騎士団もそれに続くように指揮官達が急降下していった。

その様子を、？いぶき？のＣＩＣでは肉眼ではなくフェイズドアレイ・レーダーによって探知していた。

「目標群ブラボー、本艦に最接近！ 迎撃優先を具申します！」

いよいよ来たか。

蕪木は大きく深呼吸をした。

そして、意を決して命じる。

ここまで来れば、最早後には退けない。

「了解……迎撃を、許可する！」

その短い言葉は、自衛隊が創設されて半世紀以上、一度も発せられたことのなかった禁忌の言葉だった。

攻撃命令という名の、決して発しては……発せられてはならないもの。

だが、それを受けた以上、この船はそれに従う。

この船は、他でもない戦うための船なのだから。

「対空戦闘、CIC指示の目標、主砲、撃ち方始め！」

コンソール横に備えられた、ピストル型の発射装置を握った乗組員がトリガーを引く。

攻撃指令を受けた艦首に搭載されている127？速射砲は、砲塔を素早く旋回させると、自動装填されていた砲弾を即座に目標に向けて発射していた。

その砲炎は、彼らにも見えていた。

「大砲を積んでいるのね……」

その時、エリヴィラはさほど驚かなかった。

見たところ、大砲の数はたったの一門である。

海賊と一戦交えた経験があるが、その時に十隻を超える海賊船から大砲で撃たれたことがある。しかしその時は、一発たりとも命中しなかった。そもそも、大砲など空の相手に向けるようなものではない。しかも、大砲を命中させるのにこの距離はあまりにも遠すぎる。

「敵も必死ね」

相手はこちらに恐れをなし、なりふり構わず当たらない距離から大砲を撃っている。そう彼女は判断した。

彼女は、主砲がイージス・システムによってコンピュータ制御され、目標の未来位置を予測、偏差射撃しており、更に発射された砲弾が近接信管を弾頭に搭載した対空砲弾であることなど、知る由もなかった。

次の瞬間、氷雪騎士団の団長の騎乗する竜の鼻先で、127？砲弾が信管を作動させ炸裂した。凄まじい衝撃波に竜の首が消し飛び、四散した爆炎が騎士団長の身体を焼き尽くした。

「あ……え……？！」

彼女は自分の目の前で起きたことが一瞬信じられなかった。

「団長ーっ！」

部下達が、父のように慕っていた上官が命を落としたことに愕然とする。

すると、指揮を引き継いだ将校が、隊旗を掲げて士気を鼓舞するように躍り出た。

この見事な連携と士気の高さは、彼らがいかに精鋭部隊であるかを如実に語っていた。

「おのれ！ 我ら竜騎士団に傷を負わせた償い、その命で償うと知れ……」

だがその言葉を遮るように、将校の竜が爆炎に包まれた。見ると、船の大砲が再び砲撃している。

（嘘！？ 大砲が何故そんなに早く次弾を！？）

大砲は数人がかりで砲口から火薬を詰め、丸い砲弾を込めねばならないはずだった。ほんの数秒で次弾を発射するなど常識外である。更に数秒後、自動装填装置で再び砲弾を装填した127？速射砲が火を噴く。

その驚きの答えも見つからないまま、今度は彼女の直属の上官が火だるまになって海に落下していった。

「まぐれ当たりじゃねえのか！？」

アルノリドが血相を変えた。

明確に、自分達は？狙われている？のだ。

そうしている内にも、次々と船の大砲が砲撃を繰り返し、その度に味方が吹き飛んでいく。

「クソ！ ありや人間業じゃねえ！」

アルノリドの言葉は皮肉だったが、事実、イージス艦の54口径127？速射砲は完全に自動化されていた。照準から発砲、次弾の装填まで全自動である。それ故、人間にありがちな能力による射撃間隔のバラつきや命中の誤差もなく、そして、躊躇いさえ存在しない。優先攻撃目標に対し、最短時間での攻撃を繰り返すのみである。それが、戦闘機だろうと竜であろうと関係はない。

竜騎士達は、今まであらゆる敵と戦ってきた。魔物に反乱軍、侵

略した国の正規軍、山賊に海賊、時には人外的能力を得た聖騎士とも戦った。だが、その敵はあくまで生身だった。

しかし今、彼らは機械そのものと戦っていた。

「大砲は一門だけよ！ 散会して襲いかかれば狙いが追いつけないはず！」

エリヴィラはこの状況にあつて、冷静な判断力を失っていないかった。竜騎士として幾多の戦場を駆けてきたのは伊達ではない。

アルノリドも頷く。

「そのようだな、よし、散会だ！」

竜騎士達は、家族のように意思の通じ合った戦友同士、高度な連携を見せていた。

しかし、その連携さえも、レーダーに逐一探知されている。

イージス艦の装備する三次元レーダーは、バラバラに動く数十の竜の動きを全て探知し、火器管制コンピューターは接近してくるであろう目標を脅威度判定し、迎撃目標に指定する。

「……冷静な敵だ」

しかし蕪木は、未知の敵と戦う状況に自分が置かれたとして、彼らほど冷静に戦うことができるか自信はなかった。武人として、今レーダースクリーン上に写っている敵兵士達に敬意すら覚える。それと同時に、やはり気を抜けば首を狙われかねないことを理解する。

彼は、自分達が生き残るために命じた。

「ELUSM発展型シースパロー、主砲の対応範囲外の敵に対し指向！」

イージス艦のメインウェポンである対空ミサイルの射撃命令を受け、砲雷長が叫ぶ。

「VLS垂直ミサイル発射装置解放！」

ミサイル士が即座に応じた。

「イルミネーターリンクス誘導電波照射装置配分！」

ミサイル一発一発に、それぞれの敵を撃墜するのをデータ配分する。

ミサイル士が叫ぶ。

「シースパロー発射用意良し！」

サルウォー
「一斉射撃！」

ミサイルの発射パネルが操作され、艦首と艦尾の甲板に組み込まれているVLSセルがハッチオープンした。そして、セル内に格納されていた艦対空ミサイル・ESSMがロケットブースターを作動させる。

「何よあれ！勝手に爆発した！？」

エリヴィラが目を見張る。

こちら側は何も攻撃など加えていない。まだ一騎たりともあの船には到達していないのだ。

一見すると、VLSでミサイルを一斉発射した光景はまるで艦が炎に包まれているかのように見える。だがそれは、ミサイルのブースターの吹き上げる炎を外に逃がしているからである。

エリヴィラはそこから、何かが飛翔するのをその目で見た。

（光る、槍！？）

それは何本も空高く飛び上がると、白い煙の尾を引きながら、一直線にこちらへ向かって飛んで来る。

本能が訴えかけた。逃げろ、と。

「ひッ！？」

咄嗟に彼女は手綱を引いた。矢を避けるのにこうした動作は珍しいことではない。

「な、なんだありや……うわあああ！？」

刹那、何かが横切る風切り音がすると、立て続けに凄まじい爆発音と爆風が彼女の隣で巻き起こった。

アルノリドが餌食になったのだ。彼女に分かるのはそれだけだった。

体勢を立て直すと、まるで松明の炎で焼かれた夏の小虫のように、仲間の竜がばらばらと空から落ちていくのが見えた。

燃えて行く竜達の断末魔の叫び。

その光景は、狂氣的で、そしてどこか幻想的でさえあった。

これだけの損害を、これだけの短時間に竜騎士団が受けることがあり得ただろうか。

彼女には、この目の前で起きている光景が現実とは思えなくなつた。

「嘘よ……こんな、嘘……」

竜騎士はこの世界で比類する者なき絶対の強者であつたはずだ。帝国がここまでの繁栄を極めることができたのも、歴史上多くの竜騎士の活躍あつてのこと。その竜騎士が、まるで木の葉のように破り捨てられていく。こんな光景を、異常者以外に夢でさえ見る者がいただろうか。

大砲の音が容赦なく響き、その音の数だけ仲間が海面へと燃えて落ちて行く。光の槍が、逃げようとする竜に意思があるかのように追いつがり、爆発して無慈悲に道連れにしていく。

そう、これは悪夢だ。夢魔が見せている悪夢に違いない。

「あ……ああ……」

彼女はあることに気づいた。

悪夢で最も恐ろしいことは何だろうか。それは、背後に得体の知れない？何か？がいることだ。

彼女は背後を振り返った。

悪夢は、自分だけを見逃してはくれなかった。

彼女が最後に見たのは、かわされた後にプログラムに従い急旋回し、リーダー誘導により再び追尾してきたホーミング・ミサイルの姿だった。

CICの中では、各担当から冷静な報告が次々と上がってきていた。

「撃墜41を確認！」

サブファイブ・ターゲット

「敵残存機は本艦から距離を取り始めました」

オペレーターからの報告に、蕪木は戦闘の終結を悟った。

ミサイル攻撃によって一度に十騎以上を失い、混乱状態になった後は、ほとんどが一方的な戦闘だった。

最終的に、近接距離に接近した竜は一騎もいなかった。

敵航空戦力は完全に戦意と継戦能力を喪失。本艦周辺からの離脱を始めていた。

「攻撃一時中止、モードを手動に切り替える。警戒は怠るな」

「了解」

「過熱した砲身の冷却と、消費した対空砲弾の補給作業を急がせる」
「はっ！」

訓練の際にも発せられる命令が終わった時、CICに束の間の静寂が訪れた。隊員達は互いに顔を見合わせる。

自分たちは戦った。砲身が過熱し冷却水を浴びせる程に砲弾を撃ち込み、ミサイルの雨を敵に見舞った。

しかし、このCICで実感できることは、レーダースクリーン上に写っていた敵を示す光点が消失する様子だけである。ハイテク戦とはそうしたもののなのだ。

だが、隊員達は、自分達が大勢の人間を殺傷したということを知っている。だが、そのあまりの実感のなさに戸惑いを覚えているのだった。

「……まるで、演習だったな」

隊員の一人がぼつりと呟いた。

その場にいる者全員の感情を代弁した言葉だった。

「演習ではない。それを決して忘れるな」

蕪木が、自分自身に言い聞かせるように、そう口にした。

そして、彼の隣で佇んでいた砲雷長が、静かにレーダースクリーンに対して手を合わせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9111s/>

ルーントルーパーズ

2011年10月9日00時41分発行